

Chernobyl

Sasakawa

笹川チェルノブイリ医療協力事業を振り返って

Chernobyl Sasakawa Health and Medical Cooperation Project

Health and

Medical

Cooperation

Project

笹川チェルノブイリ医療協力事業を振り返って

目 次

まえがき	2
座談会	
1. 「チェルノブイリ医療協力事業を振り返って」(2004)	4
2. 「チェルノブイリ・プロジェクトと国際医療協力の課題」(1995)	24
年表	32
資料	
① 5センター	50
② チェルノブイリ笹川医療協力委員会	51
③ チェルノブイリ笹川医療協力専門家委員会	51
④ 技術協力者	52
⑤ 研究業績(発表論文 和文・英文)	54・57
⑥ 財団制作出版物	61
⑦ 供与器材	62
⑧ 供与試薬	71
あとがきにかえて	76

まえがき

笹川記念保健協力財団 理事長 紀伊國献三

笹川記念保健協力財団は2004年に創立30周年を迎え、その記念誌も編纂されたが、紙面の都合上チェルノブイリ事業を十分にカバーすることができなかった。そこで、関係された先生方に一度お話を伺い、チェルノブイリ事業の経緯もまとめておこう、ということになった。

チェルノブイリ笹川医療協力プロジェクトは、1990年、当時のゴルバチョフソ連邦大統領の支援要請を受けて、故笹川良一（財）日本船舶振興会（現在の日本財団）会長が、笹川記念保健協力財団を中心に人道支援を決意したことに端を発している。早速1990年8月、当時の（財）放射線影響研究所の重松逸造理事長を団長に、広島・長崎の放射線医療の専門家が現地を訪問し、汚染地域の広大さとともに、住民の社会的心理状況、とくに強い不安、恐怖感を実体験すると同時に、正確な情報の欠如を目の当たりにした。

そこで、まず、母親たちの最大の不安でもある放射線感受性の高い子供たちを対象に健康調査を行い、今後の対策の基本となる正確な情報の収集と、住民への正しい知識の伝達に努めることにした。健康調査（検診）にあたっては、第一に人道的支援であると同時に、科学的調査に基盤を置くことを基本原則とした。第二に、得られたすべての情報はデータベースとして、今後の住民健康問題のみならず、広く放射線と健康障害の解析に利用され、世界の共有財産となるように透明性・公開性を基本として計画した。

翌91年5月には、放射能汚染被害の大きなベラルーシ共和国、ロシア連邦、ウクライナ共和国内の5カ所（ゴメリ、モギリョフ、クリンシイ、キエフ、コロステン）で、事故時0歳～10歳の児童を対象に甲状腺および血液異常の検出を中心に、体内被曝線量の評価も含む健康調査を5年計画で開始した。幸いなことに、企画の段階から放射線医学の豊富な経験を有する長崎大学医学部、広島大学原爆放射能医学研究所、（財）放射線影響研究所などからの全面的な協力を得て、最新鋭の機器を搭載したバスを利用した健康調査を行った。

しかし、健康調査の開始から5年が経過した1996年時の旧ソ連の社会・経済状況では、現地の医療機関が独立して健康調査活動を継続することが困難であること、また、10万人以上の健康調査の結果により、小児甲状腺がんの多発が放射能の高汚染地域に見られたことから、原発事故によって排出された放射能との関係究明のため、5カ所の健康調査センターの中で小児甲状腺がんがもっとも多かったベラルーシのゴメリ州においてさらに5年間健康調査を継続することにし、最終的にこの事業は2001年3月に完了した。健康調査を受けた児童は約

20万人になる。

約11年間の健康調査活動、また被曝者の健康管理、治療等に必要な検診車、医療機材、試薬等の物品供与に加え、診断技術等の指導のため、日本からは全期間で延べ450名の専門家が派遣された。また、ロシア、ベラルーシ、ウクライナの医師・技術者を対象に、日本および現地で延べ230名の研修も実施された。

この間、1999年2月にはベラルーシのゴメリ市と日本（長崎大学医学部）とを通信衛星で結ぶ遠隔医療システムを稼働させ、小児甲状腺がんの確定診断に効果を発揮している。このシステムにはWHOも関心を示し、笹川記念保健協力財団と協力してベラルーシ内の遠隔医療・遠隔医学教育を発展させる事業となった。また、EU、米国国立がん研究所、WHO、笹川記念保健協力財団との共同事業として、ロシア、ウクライナ、ベラルーシ3カ国の甲状腺がん組織等の保管、管理体制を整備する研究プロジェクトも実施しつつある。

本年（2006年）はチェルノブイリ原発事故発生から20年目を迎える。われわれの事業の科学的成果としては、2つのシンポジウムのProceedingsがすでに*Chernobyl: A Decade* (Elsevier, 1997), *Chernobyl: Message for the 21st Century* (Elsevier, 2002) に報告されているが、本冊子では、そこに触れられなかった当事業に関係された方々の体験を座談会として収載し、チェルノブイリ医療協力の詳細としてまとめた。

今後の国際医療協力事業の参考になれば大きな喜びである。

座談会 1

チェルノブイリ医療協力事業を振り返って

2004年12月7日

日本財団2階 第7会議室



出席者 (発言順)



重松 逸造

(財)放射線影響研究所名誉顧問



長瀧 重信

(社)日本アイソトープ協会常任理事、
長崎大学名誉教授



山下 俊一

長崎大学大学院医歯学総合研究科
附属原爆後障害医療研究施設教授



三輪 史朗

冲中記念成人病研究所理事長



久住 静代

原子力安全委員会委員



(聞き手) **紀伊國献三**

笹川記念保健協力財団理事長

(事務局) **榎 治子**

紀伊國 本日は、お忙しいところお集まりいただきどうもありがとうございました。先生方にご出席いただいた財団創立30周年記念行事の折に、日本財団の笹川陽平理事長（当時）がチェルノブイリの事業についてもきちんとした記録を残しておいたほうがいいのではないかと提案されました。30周年を記念してまとめました小史は、その90%をハンセン病対策の記録が占めております。財団の予算の額からいきますと、ハンセン病対策が圧倒的ですからそれはそれで当然なのですが。しかし、チェルノブイリ事業については、重松先生からも、あまりお金も出していない国が、やった、やったと言っているの、この際きちんとした記録を残すことが後世への責務ではないかというご助言もありましたことが本日お集まりいただいたということです。

1986年4月26日にチェルノブイリ原発事故が起こったのですが、チェルノブイリ笹川医療協力プロジェクトは、1990年2月に笹川陽平日本財団理事長が日本から経済使節団を率いてソ連を訪れたときに、ソ連側からチェルノブイリ事故に関連して民間から被災者への医療協力をしてほしいという非公式な申し入れがあったことが発端となっています。当時、ソ連と米国の間は冷戦状況が続いておりましたが、チェルノブイリ事故直後には米国の医師が骨髄移植のためにモスクワを訪れています。しかし骨髄移植を受けたほとんどの放射線高度被曝者の方は亡くなられたというような事態があったようです。

さて、日本財団から、これは海外医療協力だから、笹川記念保健協力財団で担当してほしい、と言われました。私は放射能については何も知りませんので、早速、重松先生（当時は（財）放射線影響研究所の理事長をしておられました）にご相談申し上げたわけです。私が筑波大学に在職中、ある先生をお呼びするときに重松先生に大変お世話になったというご縁がありました。重松先生がおられたために、ある意味では世界に誇れるプロジェクトに育ったと考えております。

重松先生はIAEA（国際原子力機関）の調査などでチェルノブイリにご関係になっておら

れたわけですが、そのあたりから先生にお話をさせていただきたいと思います。

ハマー氏と笹川良一氏

重松 もう20年近く前の話になったので今となると忘れていた点も多いのですけれども、この笹川プロジェクトの始まる前の状況をちょっとかいつまんでお話し申し上げたいと思います。

当時、チェルノブイリで稼働していた原子炉は4基あって、5、6基目は建設中でしたが、4基の中の第4号炉というのが1986年4月26日の未明に2回の爆発を起こして、このチェルノブイリのエピソードが始まったわけです。紀伊國先生が言われましたように、東西の冷戦がまだ激しいときでしたが、その前の年、1985年11月に当時のロナルド・レーガン（Ronald Reagan）米国大統領とミハイル・ゴルバチョフ（Mikhail Gorbachev）ソ連書記長がジュネーブで会談をするという当時としては画期的な出来事がありました。核軍拡競争に歯止めをかけようというのが目的だったのですが、結局核軍縮の話はまともならず、その代わりに文化協定が結ばれて、その結果、レニングラードにありますエルミタージュ美術館とモスクワのプーシキン美術館の両美術館が所蔵している印象派と後期印象派の画家の作品、特に若いときの作品（それはあそこにはしかないのです）の展示がはじめて米国で行われました。それが1986年の4月です。ところで、今の話を取り持ったのが、当時は西側と東側の唯一のチャンネル、パイプといわれていた米国オクシデンタル石油のアーマンド・ハマー（Armand Hammer）会長（医師）でした。彼が世話をしてワシントン、ロサンゼルス、ニューヨークの3カ所で4月からその展示を始めたわけです。

そのときに4月26日の事件が起こって、そこでハマーさんはただちにカリフォルニア大学ロサンゼルス校医療センターのロバート・ゲール（Robert P. Gale）博士をモスクワに派遣したわけです。

彼は事故後の5月上旬にモスクワへ行って、

ご存知の第六病院*で13名の重度被曝者の骨髄移植をやりました。結果は13名中11名の方が亡くなって、2人の人だけが助かったのです。この2人の人も骨髄移植のため助かったわけではないともいわれていますが……。

ハマーさんはロバート・ゲール博士を派遣しただけでなく、本格的な援助をしたいというので、放射線の専門家、米国だけでなく外国も含めて十数名をロサンゼルスに呼んだのです。日本からは私が呼ばれました。私のところへはゲール博士が1986年5月下旬、放影研の理事長室に電話をかけてきたのです。放影研というのは財団法人でありますから、まあ民間のようなものではありませんが、日本政府と米国政府に全予算を出してもらっていますから半公務員的でありますから、米国の会社の会長から呼ばれたからといってすぐ行くわけにはいかないと思っていましたら、ワシントンの日本大使館から、実はこれはハマーさんが呼ぶのだけれども、民間の人が呼ぶとは思わず政府依頼というつもりで行ってやってほしいと外務省を通じて言ってきたのです。それで7月10日に私はロサンゼルスに行ったのです。そこで集まって協議したチェルノブイリの援助策を、ロバート・ゲールさんがもう一度ハマーさんに代わってソ連へ持っていくということになりました。

そこで私はハマー会長に、「われわれとしては技術的なことではいくらかでも協力するけれども、これだけのことをするには大変な財政バックアップを要する、いったいどうするか」と聞いたら、「私にはちゃんと心当たりがあります」と言われる。「どんな心当たりですか」と聞いたら、「実は日本の私の友達、笹川良一氏が相談に乗ってくれるはずである」と。そのときこの話は恐らく笹川良一さんがご存知だったのでしょう。

*ソ連保健省管轄の第六病院には、生物物理学研究所の特別診療部門、すなわちソ連放射線医学センターがおかれている。第六病院の2階にあり、120床のベッドと二部屋の無菌室がある。放射線事故の際、現場の如何にかかわらずすべての犠牲者はこの施設の診療部門に運ばれるということである。(L.A.イリン『チェルノブイリ：虚偽と真実』 p.p.71-78)

紀伊國 ハマーさんと親しかったことは事実です。

重松 お年も似通っていましたが、ハマーさんはかなり自信を持って言っておられました。

紀伊國 それは面白いですね。

ソ連の崩壊と3共和国の チェルノブイリ対策

重松 それまではハマーさんが唯一のパイプだったのですけれども、ゴルバチョフ書記長時代になって鉄のカーテンがだんだん開いてきたのです。事故から4カ月後の1986年8月25日からの3日間のウィーンのIAEAで初めてソ連があれだけすべてのデータを出したというので、みんながびっくりしたのです。それがきっかけでだんだんグラスノチ（情報公開）とペレストロイカ（経済改革）が進んだわけです。

付け加えると、ベルリンの壁が崩壊したのがそれから3年後の1989年11月、ついにソ連が崩壊したのが1991年12月です。

ソ連内部では、チェルノブイリに対応するためキエフに2,000人くらいのスタッフの全ソ放射線医学研究センターをつくるという構想で、1986年10月にスタートさせることにしました。しかし、その後ソ連が崩壊し、3共和国に分裂してしまったので、全ソ放射線医学研究センターも結局ウクライナのものに、そしてロシア側はオブニンスクのセンターを中心に、ベラルーシ側はミンスクの研究所ということになったのです。

チェルノブイリに関してはあることないこといろんなデマが横行して、一番困ったのは住民の人たちですが、ソ連政府は一度客観的な評価をぜひ国際専門家委員会にお願いしたいとIAEAに申し入れたのです。それが1989年10月です。1990年2月にIAEAの会議で「国際チェルノブイリ計画諮問委員会」を立ち上げることが決定して、1990年の5月から実際調査をすることになりました。その前にも日本の外務省が協力計画を実施していましたし、米国やドイツなどもやっていましたが、調査だけでは

住民を説得できないで困っていたわけです。ちょうどそこへ笹川陽平さんたちがソ連へいらして、財団のこのプロジェクトが始まった、というわけです。

福竜丸放射能被曝と白血病

紀伊國 面白いお話でした。先生はIAEAの調査委員会の委員長もお務めになったのですね。

当時、ゴルバチョフさんの腹心といわれていたヤコブレフさん（Aleksandr N. Yakovlev）がわれわれの窓口になってくださいました。具体的な援助をどうするかについては東京で2回ほど委員会を開きまして、委員会メンバーの選定はすべて重松先生にお願いしたのですが、本日ご出席の三輪先生、長瀧先生にはその委員会のメンバーになっていただきました。

三輪先生は、広島・長崎の経験から、どうしても住民に白血病が出るのではないかとお考えになったわけですね。三輪先生は、福竜丸のときからのご関係ですね。熊取先生もおられた。三輪先生と放射線のかかわりについてはいかがでしょうか。

三輪 私は東大の沖中重雄先生の内科に入って血液学を専攻していました。そんなことで、福竜丸事件（1954年）のときには国立東京第一病院のほうで熊取敏之先生が主に診療されておられたのですが、7人が東大に入院して三好和夫先生が診ておられ、私はその下で診ていました。私はそのときから放射線との関わりを持つようになったわけです。7人の経過を見るのに、はじめのうちは骨髄穿刺を頻繁にやりましたが、やはり言われているとおり骨髄の細胞が減って、それからだんだん回復する様子がとてもよくわかりました。その標本を読むのが私の主な仕事でした。

当時もうひとつ私の学位のテーマでこれをやれといわれていたのがあります。骨髄穿刺というのはご存知のように骨髄の液をとってそれを塗抹標本にして見るわけですが、病理で亡くなった方の骨髄を見るということは、骨髄の組織切片を切ってそれを見るわけです。死んだ人の骨髄と、骨髄穿刺をやった患者さんの骨髄は標本の作り方が異なるので本来比べることが大変難しいのです。片方は組織だし、他方は細胞診断です。穿刺液を何とか固めてマイクロトームで切ってみるようにし



第1次調査団 中央は、アレクサンドル・ヤコブレフソ連大統領評議会委員（1990年8月）

て、死体の組織と比較できるようにするというのが私のテーマです。三好先生に叱咤激励されて学位はまとめることができました。これがチェルノブイリの事故のときに声がかかった理由だったかと思います。

紀伊國 先生は重松先生の放影研とはご関係がおありでしたか。熊取先生は放射線影響協会におられましたね。

三輪 その頃私は山口大学におりまして、昭和46年から48年まで内科の教授として遺伝の研究をしていました関係で、放影研のハミルトンさん(Howard B. Hamilton, 臨床検査部長)のところに入入りしていました。

重松 放影研の顧問をしていただいていた。

甲狀腺と放射線

紀伊國 重松先生の頭の中には放影研のご経験からまず白血病ということがおありになったと思うのですが、もうひとつ甲狀腺ということも当然お考えになっておられたわけですね。

甲狀腺のことで長瀧先生をとということだったわけです。長瀧先生が放射線と甲狀腺との関わりを研究しておられたのは長崎におられたからですか。

長瀧 重松先生は僕が学生のときには東大医学部の結核研究会の顧問で僕は学生の部長だったものですから、そのときからご指導をいただいています。チェルノブイリ関係で僕が積極的に活動したのは、ほとんどが長崎時代でありまして、天皇・皇后にご進講申し上げたのも長崎大学医学部長のときでした。

甲狀腺と放射線のご質問ですけれども、まったくそのとおりです。長崎に赴任しまして原爆被爆を身近に経験し、また家内の祖母が原爆で爆心地から500メートルのところまで亡くなっていますので、放射線影響の研究は地域の専門家の責任であると思っていました。

一方、甲狀腺は東大時代からの専門でしたので、甲狀腺と放射線が結びついた次第です。

長崎に赴任してすぐに原爆関係のデータを甲狀腺を中心に調べますと、定期健診で同じ

患者さんでも甲狀腺腫が認められたり消失したりしてしまっていて、検診するお医者さんによって結果が違ってしまうように感じていました。それで検診用の甲狀腺の超音波の器械、それも断層写真の結果をすべて記録でき、後で客観的に評価できるような、国際的な専門家が絶対に認めるような器械を原爆被爆者の調査を目的に開発しました。非常に高価な器械でしたから、研究費を捻出するのが大変でした。

この調査がある程度進行したころに日本の核医学会総会を長崎で主催することになりました。原爆の被爆地ではじめて開催されるアイソトープを使用する核医学会ですから、会長として被曝をテーマにしたシンポジウムを提案したのですが、理事会では被曝をテーマにすると被爆者や原発反対者が押し寄せてくるのではないかと相当に強い反対がありました。会長に指名されてから長崎のマスコミと十分に話し合いをしまして、国際的な専門家をまじえた「放射線と甲狀腺」というシンポジウムを企画しました。この企画は最終的にはNHKで40分くらいの全国放送の番組になりました。長崎大学にいる専門家としての国際的な義務を少しは果たせたと考えた次第です。

この「放射線と甲狀腺」のシンポジウムで初めてチェルノブイリの発表がありました。チェルノブイリ事故の1年後です。ヨーロッパ甲狀腺学会の代表を招聘してチェルノブイリについての報告をしていただきました。まだロシアから何も情報のない頃であります。そのときの発表は、「IAEAの報告による放射性ヨード131の降下量から計算するとヨーロッパ全体で50人位の甲狀腺がんの患者が増えるかもしれないけれども、疫学的に見つかるものではない」という報告でした。

このシンポジウムはチェルノブイリの話や先ほどお話ししました原爆被爆者の最新のデータに加えまして、マーシャル群島における甲狀腺疾患、世界中の放射性ヨードのfall-outを1954年以来屠殺場の動物、牛、羊などの甲狀腺を利用して調べた結果、医療に使った放射性ヨードによる甲狀腺がんの発生を米国、日本の結果として発表するなど「放射線と甲狀腺」の重要なトピックを含んでいます。それ

を全部英語にして単行本として出版しました。

日本核医学会で世界の専門家とシンポジウムが持てましたので、その結果を1988年の北京と台北の核医学会で発表しました。米国の核医学の草分けで第一人者でもあるProf. H. Wagnerと、ラジオイムノアッセイの開発でノーベル賞を受賞した(1977) Prof. R. S. Yalowと私の三人が、両方の学会ともPlenary, Round Tableなどで一緒になりました。ちょうど中国が原発をつくる前の第1回の国際核医学会でして(中国の原発の送電開始は1991年)、いかにアイソトープが役に立つかということをしてPRしてもらおうと思って、アジア地区から当時日本核医学会の会長でアジア甲状腺学会の会長の私も加えたのではないかと思います。しかし、私は先ほど申し上げた長崎の科学者の責任と思って、少量のアイソトープでも日本の原爆被爆者の調査では害があると発表しましたところ、両方から攻撃されました。Prof. Yalowは、当時は普通の研究室でアイソトープを使っており、研究室でアイソトープを使っても何も害はないと主張していましたし、Prof. Wagnerは核医学を発展させようとしているときですから当然かもしれません。なにしろ米国も中国も戦勝国で核保有国ですから、原爆の被害は科学的根拠がないとか、精神的なもの、ノイローゼであるなどの議論も出てきました。

そのとき改めてこのような世界の専門家が認めるような原爆の調査結果を発表するのが長崎大学にいるわれわれの責任であると決心した次第です。以上が放射線と甲状腺に関する質問のお答えです。

1986年がチェルノブイリ事故、1987年が日本核医学会シンポジウム、1988年が北京と台北の核医学会、1988-89年に単行本出版、そして1990年に重松先生からお呼びがあり、笹川の90年8月の調査団に参加させていただきました。チェルノブイリ事故に関しましては最近『日本醫事新報』(2004年10月20日 第4197号)にも書きましたが、僕がお話しできるのは1989-90年の調査団からチェルノブイリ10年目のWHOとIAEAのシンポジウムで発表するくらいまでではないかと思います。この期間は国

際的に調査が受け入れられ始めたときですから、各国、各国際機関のほか、われわれの周辺では、笹川記念保健協力財団のプロジェクト、IAEAやWHOのプロジェクト、日ソの専門家会議のプロジェクトなどが入り乱れていまして、また個人的にはEU(ヨーロッパ連合)などもっと多くのプロジェクトに参加していましたが、それぞれのプロジェクトが報告書を出しています。

放射線影響研究所理事長のときに外務省の日ソ専門家会議のまとめの報告書を依頼されましたが、外務省はちょうど例の鈴木宗雄氏の件でNIS支援室の書類も全部持っていかれてしまって調べようにも調べられない状態でした。それで、外務省のプロジェクトの報告のために、特に1990年から92年ごろは放影研のニューズレターとか、長崎新聞とか長崎大学の記録などで足りないところを調べました。そうしますと、外務省、WHO、笹川プロジェクトは入り混じっていて同じ人間が行っているのです。外務省のプロジェクトをどのようにまとめるか迷いましたが、これはWHO、IAEA、そして笹川プロジェクトのまとめ方も同じですね。国際機関はWHO、IAEA、UNSCEAR(国連科学委員会)など世界のすべての調査結果をまとめて発表していますが、外務省や笹川プロジェクトをどのような考え方で調査結果を発表すべきかが難しいと思いました。それぞれのプロジェクトに固有のことだけを報告するか、どこまで全体の動きを加えるか、原則としては全体の動きの中で、それぞれのプロジェクトを正当に説明するということですが、具体的には難しいと感じました。

1990年、チェルノブイリ視察へ

紀伊國 私たちは、中嶋宏先生がWHOの事務局長であったこと、またハンセン病対策事業で非常に密接な関係がありましたので、WHOとは逐次連絡をとりました。また、ご承知のように、元厚生省の医務局長をされた佐分利輝彦先生にもチェルノブイリ委員を最初からお願いしていましたので厚生省とも関係があった

わけです。

私も50億円の予算でといわれ、どうやって使ったらいいかいろいろ考え、重松先生にご相談して1990年8月の暑期中、11名の方々をお連れしてまずモスクワとチェルノブイリ近辺の被災地の見学に行ったわけです。そのときには、松平寛通先生は放射線医学総合研究所の所長で、広島大学原爆放射能医学研究所の所長である蔵本淳先生、先ほどの放射線影響協会の熊取敏之先生、長崎大学の岡島俊三先生、市丸道人先生を含んだいわば日本のオールスターで行ったわけですが、これは本当に重松先生のお蔭とっております。まだソ連邦の時代だったので、すべてソ連共産党のホテルに泊められましてね、お湯が出ないで水しか出ないのです。8月はエネルギー対策なのでしょうね。どのホテルもお湯が出なくて、お湯で髪を洗えたのはチェルノブイリ原発のシャワー室でというような、大変な時期でした。

長瀧 笹川プロジェクトでは8月の旅行にご一緒して。大変なような、楽しいような旅だったように思い出します。自動車で行きましたね。僕と重松先生の車両だけ冷房が効かず……。

紀伊國 あれは冷房ではなく換気なのですよ。

重松 僕と長瀧君の一等車だけそれが故障していて。

紀伊國 モスクワからゴメリ（白ロシア〔後に

ベラルーシ〕第2の都市）まで自動車で行ったのです。鶴崎事務局長と私が一緒のコンパートメントにいたのですが、どうも重松先生の部屋が暑い、暑いとおっしゃっているというので行って見たのです。そうしたら本当に暑いのですよ。それでウイスキーを飲もうということになって、つまり体温を上げることによって気温を相対的に下げるといふ理論で、先生のお部屋で酒盛りをしたことを覚えております。

ゴメリには到着きまして、視察の後キエフ（ウクライナ）まではバスで行きました。国境の森の中で大野外パーティをしてくれました。全部共産党が手配してくれましてね。チェルノブイリへはキエフから車で行了きました。30キロ圏内の住民はどこか別のところへ移動させられていました。そのとき印象的だったのは、3号炉はまだ動いていたのですね。3号炉に入るとき皆白い服に着替えてマスクをして、何でマスクをしたのかわかりませんが。

長瀧 ほこりやチリがあるのですよ。

紀伊國 3号炉から焼けた4号炉のコントロールルームへ行きました。亡くなった方の慰霊碑がありました。外の石棺の前で記念撮影などしました。重松先生、そのときの印象はいかがでしたか。

重松 実際にはそのときのわれわれの被曝線量は相当すごいのですよ。

三輪 あそこでシャワーを浴びられたものですから、石鹸を持っていった記憶があります。

重松 ホテルではちょっと故障してお湯が出ないというけれど、あれは1年中一寸故障なのです。

長瀧 最初の調査団でもっとも印象的だったのは、ゴメリで患者さんに会ったときです。自分の政府のいうことは信じられないときに原爆を受けた国の専門家が来たということで、あんなに患者さんに頼りにされたのは医者冥利につきると思



ゴメリで患者を診察する長瀧重信長崎大学教授（1990年8月）

いました。

紀伊國 モスクワでは第六病院へも行きました。ハマーさんが寄贈した自動血液測定装置なども放ったままにしてありまして、メンテナンスが大変なのだなと思いました。

住民に役立つことを

長瀧 先ほどお話しましたように長崎で被爆者のスクリーニングのためにつくった器械がありまして、少なくとも客観的に甲状腺の検査ができることはわかっていました。それに金は沢山あるというお話もありましたので、お金を十分に使わせていただきました。そのお蔭で他の国に対して笹川プロジェクトは格段に正確なプロジェクトとはっきりといえる結果が出たと思っております。その頃山下先生が帰っていらっしゃったのですか。

植 山下先生は1990年秋、10月頃、ちょうど検診バスを製作中にはじめて財団にお見えになりました。

紀伊國 お金は心配するなといわれましてね。先生方に行っていたら、これからどうしたらいいかと考えていたときに、重松先生が、これまでは調査ばかりするところが多かった、やはり住民のために役立つことをしようとおっしゃられた。現地ではすべてがチェルノブイリのせいになっていたわけです。奇形の馬が生まれたらチェルノブイリ、風邪をひいたらチェルノブイリという具合で、すべてに不安があった。ゴルバチョフさんがグラスノスチという情報公開の方針をとられました。チェルノブイリの情報は小出しにされたみたいで、国民の間には不安が多かったということもありまして、きちんとした検診をして住民に情報を与えようということになりました。

検診バスに何を積もうかということで議論をしました。岡島先生は、どれだけ被曝したかということ調べるために線量を測らなければならないと言われましたし、三輪先生、藏本先生は、白血病を考えなければならないので血液採取をして血液はしかるべきところで検査をしましょうと。もうひとつ、甲状腺

についてはどうしたらいいかという議論をしたとき、長瀧先生、山下先生から甲状腺のポリウムをきちんと測定できなければならないと言われました。当時は、超音波では画像を見ることができても容積を測ることはほとんど不可能だったのです。特注で積むことができたのですけれども、これが高価なものになりました。

検診車の製作については山下先生からお話してください。

特注検診車の製造

山下 私が米国から帰ってきたのは1987年で、長瀧先生が長崎で核医学会を主催された年です。長瀧先生のお蔭で1984年から87年まで米国に研究留学していましたので、重松先生が先ほどおっしゃられたロサンゼルス・カウンティ・ミュージアムでそのエルミタージュとブーシキン両美術館からの初めての美術展を86年に見たのです。まさにアーモンド・ハマーが調整されて、ロバート・ゲールやポール・テラサキラ専門家が現地モスクワへ行ったときですね。

当時は、チェルノブイリの事故は自分には関係ない地球の反対側のことだと思っていました。ところが帰ってきてみると、長瀧先生はチェルノブイリを千載一遇のチャンスだととらえて尽力されていました。長崎は原爆被爆者のデータの宝の山をキチンと世界に還元していないということもあり、日本核医学会総会は長崎大学医学部第一内科の一大イベントだったのです。その後、第一内科で長瀧先生の下で仕事をしていましたが、90年に長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設へ教授として移籍することになりました。長瀧先生が行きたくなければ基礎の教室に行かなくてもいいとおっしゃったのですが、選ばれた以上は行かなければなりません。今思うと、ある意味で遊撃隊員のように、第一内科の外にいて長瀧先生の手足となって自由に動けたことが、この事業への最大の裨益効果を生んだ一因ではないかと思えます。ちょうど90年の10月でした。重松先生や長瀧先生の指導の中で、

こんな高価な機材や機器をどうやって維持して検診活動をやるのかということに大きな不安とともに一番責任を感じましたね。

長瀧先生が無理をして高価な器械を入れたことは、2つの意味で大きなインパクトがありました。

第1に、チェルノブイリ周辺では現地の医師らは腫れた甲状腺を全部チェルノブイリのせいにしていました。この新型の器械は、正常値はどうだということを客観的に現地の医師らに示します。同時に病気の頻度を客観的に示します。まず甲状腺の超音波画像診断がこの地域の健康状況を明らかにするという点で非常に役に立ったのです。

2つ目は、記録に残すことで後々種々の解析に活用できたことです。最初はスティルビデオという記録媒体で、1枚のデスクに2名分の画像22枚しか記録できない。これではすぐいっぱいになります。当時は共産圏への輸出はコム(対共産圏輸出統制委員会、本部はパリ)の規制にかかり、この程度のものが最高のもので、これしか入れられなかったのです。

検診車をつくる時一番問題になったのは、超音波の搭載もそうですが、岡島先生らが開発したチェア型ホールボディーカウンターも大変でした。これはものすごく重いのですよ。10月に計画を伝えられ、翌年の4月には検診車を引き渡すからといわれてもとても間に合いそうにないのです。既存の車や機材しかなかったので、楨さんたちと一緒に種々準備したのですが、その結果、器械類がどうにか載った実にすばらしい検診車が5台完成したのです。

楨 国産のいろいろなバスやトラックを検討しましたが、寒冷地仕様で常時生産されており、何とか翌年4月までに5台間に合いそうなものは、当時トヨタのコースターだけでした。それでコースターのlong chassis, high roofというタイプを使うことにしました。

山下 ところが、必要な機材や機器がうまく車に載ったのはいいのですが、現地で活動を始めると埃とか振動などで、コンピューターなんかすぐ壊れるし、スティルビデオはすぐ詰まるのです。こんなことは最初はわかりませんものね。まったく踏んだり蹴ったりです。

最初にスタートした時は5センチの足並みも揃いませんでした。共通の診断基準の遵守や信頼できる検査所見がなかなか得られないのです。91年夏に政変劇が起こり、その暮、ソ連が崩壊したお蔭で、超音波画像記録用にはMOディスク、今よりも形とサイズは大きいものですが、それにすぐ変えることができました。その後今のCD-ROMへと改良が重ねられ、それから現地の技術レベルも向上し、順調になってきたのです。本当に現場は混乱しながらいろいろと大変でしたよ。

紀伊國 検診車は1台が確か1億円近くしました。それを5台つくって運ぶのにソ連最大の輸送機アントノフを成田によこして無料で運んでくれたのです。これはソ連の軍用機が成田に飛来した初めてのことだったのではないですか。

重松 あんな巨大な飛行機を持っているのはソ連ぐらいでしょう。

長瀧 超音波の甲状腺断層撮影は原爆被爆者で使って非常によかったということが基礎にあったのです。長崎に赴任したときに国際的な専門家を納得させる調査をしなければならぬと、超音波診断装置を作成しました。長崎の放射線影響研究所に被爆者の検診のためにこの器械を買ってくださいとお話したところ、広島放射線影響研究所のラッセルさん(Walter J. Russel, 放射線部長)が、広島にない器械をどうして長崎で買うのかと反対されたといいました。長崎はあくまで2番目とされていまして、甲状腺は長崎を中心しようかと決心しました。

いろんなところで決心ばかりしていますが、ラッセルさんに認めてもらうためにその器械を伊藤病院(東京・渋谷区)まで運んで、伊藤病院で手術する患者さんを半年くらい全部この器械で調べて、器械で測定した結果と手術のときに計った重さを比べたらものすごくきれいに一致しているので、それを米国の雑誌に発表し、ラッセルさんに見せて、長崎大学で作製したこのようによい器械があるので、長崎の放影研でも買ったらどうかと交渉に行きました。米国のジャーナルに出たことで信用されまして、広島にない器械が初めて長崎で

購入されました。

紀伊國 広島では甲状腺の問題はあまりなかったのですか。

長瀧 私が長崎へ行って半年くらいで重松先生が広島（財）放射線影響研究所、1981）へいらしたのですね。

重松 あなたが行ったからやれ、と。

長瀧 全体として広島でも甲状腺の病気が多いということは何度か話題になっていました。ただ、それを世界の甲状腺の専門家が承認するところまでの機会がなかったといえると思います。それで長崎で調査を開始しまして、先ほど申し上げました1987年の日本核医学会に原爆被爆者の新しい調査結果を発表し、そのときチェルノブイリ1年後のヨーロッパのIAEAの発表、その他世界の権威の発表と一緒にシンポジウムのProceedingsを出しました。それが現在も続いていまして、いまは長崎・広島両方の放影研の甲状腺のスクリーニングでやっております。今年も2つ論文が刊行されました。

超音波診断装置での スクリーニングと精神的被害

長瀧 話題の超音波診断装置で現在の長崎のスクリーニングについてももう少し紹介します。

チェルノブイリも含めまして超音波で発見された被曝による甲状腺の結節をすぐに手術するのか経過を見るのかは大きな問題です。結節noduleが見つかった人をどうすればいいのかということなのです。

話が飛びますが、ネヴァダの原爆実験によって放射性ヨードが米国全体に広がっていることがわかりました。それを議会で取り上げて、NAS（全米科学アカデミー）が隠していたとか、いろいろな経過がありまして、出版物としてすべての調査結果を発表しています。ネヴァダの原爆実験で甲状腺がんが増えているという発表はあるのですが、スクリーニングをやってみつけたときに臨床的にどうするかという結論が出ていない段階ではスクリーニングをやるべきではないと述べられています。米国的に考

えると、スクリーニングでnoduleがありますというだけで何も治療ができないのでは心配が増えるだけなので、スクリーニングはやらないほうがよいというものです。

このような被曝と甲状腺でもっとも重要な問題に挑戦しまして、今、長崎では10年前に長崎でやったスクリーニングを同じ規模でやっています。そうするとnoduleのある人からがんが出る割合はコントロールに比べ20倍も多いことがわかりました。

原爆でもチェルノブイリでも大切なことで話題になっていますのが精神的影響です。実際にチェルノブイリの発表でも精神的影響が増えています。

先ほどお話した中国が原発をつくるときのシンポジウムでは、日本のデータがヒステリーと表現されました。精神的な問題は被害にはならなかったのです。日本でもそのとおりでしたが、阪神・淡路大震災のときから始まって、バスのハイジャックなどがあって、精神的影響という言葉が新聞にも出るようになりました。そして去年ですけれども、精神的影響が長崎の被爆者に関しては正式に被爆地域の議論の中で認められたのです。精神的な被害を国が保障するというので米国大使館の精神科の医者からいろいろ質問されました。

チェルノブイリに今後どう影響を与えるかはわかりませんが、われわれには原爆という経験があったから、日本がチェルノブイリと関わりをもつことができたことは間違いのないと思います。

キエフのスライドを日本で 再染色して判読

紀伊國 久住先生は広島大学との関連で、重松先生とも非常にお親しいのですけれども、先生と放射線、チェルノブイリとのご関係をお話いただけますでしょうか。

久住 私は広島大学の原爆放射線医学研究所の血液内科で、内野治人先生、藏本淳先生のもとで仕事をさせていただきました。

当時、広島の放影研で原爆被爆者の白血病調

査がどうも10年くらい進まないということで、藏本先生から放影研でお手伝いするようになられ、以来8年くらい重松先生の下でお世話になりました。ちょうど赴任した直後にチェルノブイリの事故が起こり、IAEAのチェルノブイリ調査団に参加させていただきました。この時は、私たち20数カ国から集まったメンバーが交代で、健康影響の調査に携わりました。

最初、私は血液担当ということでキエフへ行きました。他の方々も、外国から20名くらい、現地から30名くらいで1チームを構成し、それぞれの村の診療所へ行って検診をしました。全体で5,000名弱を対象として疫学調査を行うという計画です。私は、一人でキエフの研究所、先ほど重松先生が言われた全ソ放射線医学研究センターになる予定のところだったのですが、そこに残ってしまっていて、ホテルから60キロくらいの森の中のサナトリウム、当時研究所にしていたところに、すごいスピードの車で通いました。

通うというより連れて行かれるという感じで、何よりもそれが怖かったという記憶があります。皆さんが村へ検診に行かれて2、3日ほどすると村から血液標本が帰ってくるのですね。それを顕微鏡で診て、白血病が起こっていないかどうかをチェックするのが私の役目でした。顕微鏡を覗きますと白血球はブルーに染まるのですが、それが時々は見えるのですけど、ほとんどないのですね。この時は事故から数年たっていますから、通常では考えられない、ありえない話です。もしこの時点でまだ白血球がこんなに少なければ相当被曝があるはずですし、それは大変な問題です。しかし、その後も白血球がないような標本が何十枚、何百枚と届くのです。1週間我慢したのですがどうしてもおかしいということで、そのミッションがキエフに戻ってきたときに、その団長のメトラー先生 (Fred A. Mettler, Jr., ニューメキシコ大学放射線学教授) に、「どうして白血球がないのか現地に行って確認したい」とお願いしました。すると彼は、「重松先生に連絡して、行ってもいいか了解をとってほしい」と。

簡単に日本に電話ができる状況ではなかつ

たのですが、当時、本物かどうか知りませんがKGBといわれた人がいつも私についていたので、その人に頼んで電話を入れ、重松先生に了解をとりました。それで、村へ行ったのです。行って気がついたことは血液の標本はメイ・ギムザ染色といって赤と青とに染めるのですが、染色液がよくなかったということもあったのでしょうが、染め方について、IAEAの代表者と現地の代表者が絶えず揉めていて、白血球がほとんど染まっていないということがわかりました。結局、IAEA調査団の数千枚のスライドを全部、放影研に集めまして、日本で再染色して手分けして判読し、結論を分析してメトラーさんに渡したという経緯があります。

ですから、この笹川プロジェクトについてのお話を重松先生からお聞きしたときに、決してこのようなことがまた起こってはいけない、と。

血液の標本は現地できっちり染色して、きっちり診断できるようなシステムにしなければならなかったという記憶があります。

積 久住先生にはゴメリ・センターの立ち上げに大変お世話になりました。

久住 現在、日本が行ってきた多くのチェルノブイリ協力が終わろうとしています。せっかくここまで日本が一生懸命やってきたものが、ここでぶつんと切れるというのは……。チェルノブイリから日本の顔がすっかり消えるのではないかと残念な気がします。IAEAが来年(2005)9月にフォーラムをやるということで、特にこの笹川プロジェクトはUNSCEARレポート数ページを割いて載っていますし、日本のプロジェクトをぜひ紹介していただきたいということを申し上げ、今、現地で調整しているところです。

IAEAの調査

紀伊國 ぜひやるべきことだと思っています。山下先生もWHOへ行かれることになって大変よかったと思います。

IAEAの調査、これは国際的なスケールでやられて、その結果は、重松先生が責任者で、公

表されたときはソ連国内では受け入れ難い状況だったと記憶していますけれども。

重松 IAEAのプロジェクトがスタートしたのは1990年5月から1年間で、実際に久住さんたちにも現地に行ってもらって検査したのは抽出調査ですから、子供から老人までの5年齢階級を全体の数で1,400人くらいでした。事故後ちょうど5年目ですから、広島、長崎の例からいうと、もし何か病気が出てくるとすると真っ先に出てくるのは白血病関係であろう、甲状腺にはまだちょっと早いかもしれないけれど、ともかく兆候が見つかるかもしれないということをやったわけです。

この調査は健康診断だけではなく、5つのチームに分かれて、環境調査、線量推定、社会的なバックグラウンド調査なども平行して行いましたが、答えは事故後丸4年目ではまだほとんど異常は認められない。ただ考えられるのは、これから増えるのは甲状腺がんであろうということが、ちゃんと報告書に書かれています。特に子供さんたちに注意するようにと……。ところが、マスコミはこれではニュースにならない。日本国内でも発表しましたがマスコミの対応は同じです。3共和国は、まだソ連時代ですけれども、あんまり健康影響がないといわれると困るのです。援助がこなくなりますからね。

あのときのIAEA事務局長はHans Blix氏で、私が委員長で報告しましたら、慰めてくれましたね。コペルニクスの地動説が認められるのには100年かかった、と。この調査結果も恐らくこれから10年か20年経ったらわかる人が出てくるだろうと。

われわれの調査は学問的立場から見ると正しいわけですが、そのまま社会に受け入れられるとは限らない。その対応をどうするかということも重要なことがよくわかりました。

紀伊國 われわれのプロジェクトも科学的な調査だけでは困るといわれましたが、結果的には20万人の検診をやったことは大きな意味があったと思うのです。不思議なことに、普通ならば当時のソ連政府と契約を結ぶところを、われわれは5つのセンターと個々に契約を結んだのです。これはどういう発想があったの

でしょうか。

榎 ソ連保健省の指示だったのです。あの当時その理由を私たちはいろいろ考えたのですが、恐らく保健省としては私たちが何をしようとしているのかわからなかった。はじめはお互いに何をするのかということがはっきりしなかった。それで保健省としては責任をとれないと考えたのではないかと思います。

20万人に検診を実施

紀伊國 最初に行った時はソ連共産党と労働組合がカウンターパートとしてこの協力事業をしたいと言っていたのですが、私は過去のハンセン病対策の経験、WHOとの関連で、保健省でなければ駄目だと言ったのです。榎さんが言われたように、保健省としてはこのプロジェクトがどんなものになるかわからないということがあったので、5つのセンターと個々に契約を結ぶことになったのですね。結果としてはこれがよかったです。

もしソ連邦政府とやっていたら大変でしたが、5つのセンター、ゴメリなどを選んだのは、結果として正しかったのだという気がしております。20万人の検診ができたことについては、これは日本の先生方の努力です。事務局としては榎さんが中心になってやられました。山下先生は何回行かれましたか。

山下 数えられませんが、100回近いでしょうか。1991年の2月に器械ができて、東京で、ホルモン測定や血液分析、甲状腺超音波診断などのトレーニングを初めて派遣される日本人の技師の方々に行きました。そのときに日本側の医師はほとんどチェルノブイリ支援に手を挙げない。それで協力者を集めるのに困って、財団のほうから日本臨床検査技師会、日本放射線技師会にお願いしていただいたら、老いも若きもたくさん来てくださった。でも医師は手を挙げないのですよ、放射能汚染地域に行くのを危惧して。同時に、日本の医師は日常臨床で多忙で、抜けた診療の穴を埋める体制がないのです。

ですから私たちはこれらの技師のボランテ



赤の広場での検診車贈呈式（1991年4月26日）

シア集団を、血液検査のSysmex、体内被曝量測定ホールボディカウンター、種々の機材に付属するコンピューターの使い方についてそれぞれプロトコルを作ってトレーニングをしました。これらの仕様書は原則すべてロシア語にも翻訳されて、現地で活用されることになりました。それらの準備をもとにして、91年4月26日のチェルノブイリ原発事故5周年に合わせて笹川陽平氏が自らソ連を訪問され、赤の広場で贈呈式を行いました。

紀伊國 岡島俊三先生もいらっしゃいましたね。

キエフ・センターを立ち上げ

山下 91年5月に初めてトレーニングのためオブニンスクへ行き、そこに日の丸と「日本の国民からソ連の国民へ」と英語とロシア語で書かれた検診車5台が到着しているのを見て感激しました。しかし、ここでも種々混乱

がありました。

どうにかすべての機材の使用についての研修が始まりました。現地の異なる場所からそれぞれ人が集められていたので、その背景がばらばらなんですね。僕が行ったのはちょうど5月のその研修の時期で、着いてみたらそこはパニックなのです。教科書も何もなければ、教える人もいない。行ってびっくりしたのは司令塔がないのですね。

ここからが走りながら考える臨機応変さが要求されました。まず、各センターから集まっている人たちを組織してトレーニングコースをつくるのですが、そのときに一番採めたのは問診票です。どういうQuestionnaireを作るか。オブニンスクがカウンターパートだと思ったので、オブニンスクの代表者と相談してすべての問診票を作りました。それもロシア語が最初でした。その後日本語の通訳を通して日本語にしてもらい喧々譁々とその状況を乗り越えたのです。それを持って5センターへ日本人の指導スタッフも分かれて散りました。

スタートするときにひとつ条件をつけました。それは冬場が寒いから検診車搭載の機器保全のため必ず暖房ガレージをつくるということです。冬場はガレージがないと巡回検診ができなくなる可能性があるのです。それは個々のセンターの責任で対応することをお願いしました。

僕がまず行ったキエフは、パトカー先導なのです。現場は非常に期待が大きい。キエフは最初、州立第一病院がセンターだったのですが、そこでは総スキャンを食ったのです。ロシアのオブニンスクが作った問診表など受け入れられるか、というものでした。キエフには全ソ放射線医学研究センターがあるし、チェルノブイリはウクライナだということです。まだソ連時代ですが、すでに独立の気運が感じられました。つまりキエフ・センターは自分たちで独自の検診プロトコルを作るということです。それで困ってしまって、とりあえずここは共通の問診表を作ったのだからこれでやってくれと。向こうもこれだけの高価で見たこともない機材や検診車をプレゼントされる以上、本音は嬉しいのですね。それでキエ



コンテナで航空輸送された消耗品等を仕分けする5センターの職員（1991年5月 オブニンスクにて）



甲状腺の画像を見ながら現地医師を指導する山下俊一教授（1992年5月）

フ・センターをまず立ち上げてからコロステンに行きました。

コロステン、ゴメリ、モギリョフ、クリンシイ各センターの状況

山下 コロステン・センターはできたばかりで何もないのです。まさにこの検診のためにつくったというセンターですね。そのセンターを見ても、中身は何もない。もう踏んだり蹴ったり。でも日本から日の丸をつけた検診車が来て、地元は大いに期待しているのです。

われわれは村へ行かなければならないという予定が市長の采配で順次計画されているのです。そこで村へ行くと、トイレも何もなく、われわれのために穴を掘って、本当にしらかばの匂いのするトイレを日本人のために用意しているのです。

ここまで来た以上はわれわれも最後まで責任をとらなければならないと思いました。子供たちが学校で待っているのです。ソ連の田舎に初めて足を踏み込み、何の経験もない若いわれわれ日本人専門家は皆緊張しました。

そんな中で唯一すぐに感謝されたのは、星正治先生らが頑張られたセシウム137をホール

ポディーカウンターで測定して、その体内被曝を心配しないでよと子供たちや親たちに知らせてからです。そこではじめて現場は安心するのです。それしか現場ではすぐに結果が出ないのですよ。ですから、まず心配要らないと伝えられるたことがまず第1ですね。

第2番目は、甲状腺に関してはまだ何もデータが出ない。問診と一緒に触診をするのですが、時間がかかるのです。朝、昼、晩とずっとやっている、首にぐりぐりのある子供が見つかるのです。5歳、6歳の子供にですよ。われわれは5歳の子供が頸部リンパ節が腫れると伝染性のウィルス疾患とか、良性の病気程度と思いがちですが、後からそれが甲状腺がんと判明するのです。当初われわれは信じられませんでした。人に言うことでもないし、あとで手術をしてがんだったと聞きまして、とんでもないことが現地では起きているのではないかとの漠然とした不安がありました。

それで日本に帰ってきて各センターの情報から検診の進捗状況を検討するわけです。

1年目の立ち上がったばかりのセンターは、いろんな面でばらばらで、5センターの中でゴメリが一番ひどい。それで当初ゴメリは日本人の専門家からゴミの山といわれていました。一生懸命頑張っているのですが、本当にひどかったのです。

これに対して同じベラルーシでもモギリョフ・センターはよかった。院長以下スタッフの取り組みが違うのですね。

ロシアのクリンシィ・センターはまた大変。田舎で何もしたことがない医師らで何事も勉強でした。

キエフは大都会の病院でしたから逆に斜に構えている。キエフとゴメリは場所的にも規模的にも中核となるセンターとしては最もよいのですが、一番協力体制がよくない。

そういうところから手探り状態でスタートしたのです。それが1年目です。

評価の高い疫学データ

紀伊國 最初は手探りでやらざるをえないと

ころがありましてね。冬の寒さは異常ですから、搭載機器のためにもガレージがないと大変で、その中で検診をしたこともありました。重松先生が疫学者でいらっしゃいますから、最初から疫学的にきちんとしたものでなければならぬということでした。

柴田義貞先生は最初から参加されていましたか。どういうことで柴田先生（当時、(財)放射線影響研究所疫学・生物統計部長）が参加されたのですか。

山下 途中からです。重松先生に「暇だから行け」と言われたとご本人はおっしゃっていましたが、それは大変でした。

重松 スタートさせるときはIAEAの調査とは違うのだ、これはまずサービスが第1であると。疫学的に言えばもう少し年齢層をはっきりさせ、きちんとした対象を選びたかったのですが、現地に任せて選んでもらいました。だから初めの頃の5センター合計で数万人ほどの規模のときは恐らくかなり偏った人だけ呼び集めたという傾向があったかもしれません。

そのうち、最終的に20万人ということになると、これは疫学的にいても「数は力なり」でありましてね、この20万人から得られたデータというのは疫学的にいても被曝児一般を代表するデータではないかと思います。それだからこそ、国連科学委員会の科学的に厳密な報告書にこれが載っているということは、これは最初に期待しなかったことですが、この計画が科学的な文書にきちんと記録されているという意味で、笹川記念保健協力財団としても誇りにされてもいいのではないかと思います。

紀伊國 最初は臨床検査技師やレントゲン技師の方の中で、「私は行きます」と言われた方に行っていただいたのですが、現地には優秀な方々がおられるのですね。結果としては日本から行って常駐する必要がなくなったわけです。唯一の例外として、ゴメリには日本のお医者さんが常駐していたほうがよいと思って、ある方が手を挙げてくださったのですが、思いがけない妊娠というおめでたがありまして撤収せざるを得なかったというエピソードがありました。

山下 1991年から96年の5年間の最初のプロジェクトが非常にうまくいったと思うのは、正確に16万人の検診という当初の目標を大幅に超える子供たちへの健康管理に貢献できたということです。そのうち12万人が柴田先生の厳しいチェックをクリアして、サンプルの重複がない、素晴らしい解析の結果が出ています。これらの成果は公表され整理されています。これは宝だと思います。

これを出した原動力になったのは、現地のスタッフに培われた高いモチベーションでした。自分たちの子供の健康をいかに守るかということで5センターが一丸となったのです。

毎年われわれはその5センターで報告会をしてきました。甲状腺、血液、線量の各分野での実務者レベルの会議ですが、モスクワとかサントペテルブルグで、全部彼らがデータをまとめて発表するのです。このブレストミーティングのような合宿で、センター間の情報交換とともに、いい意味での仲間意識や競争心も出てきて、これで非常に強い独立性が育ちました。またソ連が崩壊し国境ができてそれぞれが違う国になったのですが、この毎年の交流会が、5センターが一堂に会する唯一の機会だと現地の医師たちに喜ばれました。

紀伊國 甲状腺、血液、線量、データ管理の現地の担当者のトレーニングについても相当お金を使いました。日本にも招いて、広島・長崎で研修・指導もしていただきました。その方たちの技術的なレベルが上がったのも、先生方のトレーニングのお蔭だと思います。16万人という大きなデータが出ましたので、ウィーンで事故10年目のIAEA・WHO会議がありましたとき発表させていただいたのですが、それ以来、笹川プロジェクトが世界的に注目され始めたと思います。

走りながら考える、 走り終わって考える

紀伊國 槇さんは「チェルノブイリの母」ともいわれているのですが、何か思い出がありますか。

槇 私は突然この仕事を手伝ってくださいと当時の鶴崎事務局長に言われまして、1990年8月に第1次調査団を成田でお見送りしたのがはじめてのコンタクトでした。それまで数回の会議が開かれておりましたが、私はその会議にはまったくタッチしておりませんでした。確かあの時は、調査団がモスクワへ行くため予定していた飛行機が24時間遅延となり、慌てて別の航空会社の便に変更するというハプニングがあったと記憶しています。

その後は山下先生がよくおっしゃるように、走りながら考えるというか、走り終わって考えるというか、そういう形の事業の進め方だったのですが、やはり先生方の熱意がここまで引っ張ってきてくださったという感じがいたします。先生方の中には当初、「僕は冬期には絶対行きません」とおっしゃっていた方もおられましたが、いつのまにか冬でもこぞって現地へ行って下さるようになりました。それは、やはり現場に私たちをひきつける力があったからだと思います。

紀伊國 新しいことということと、誰もやっていないことということもありましたので、果敢に山に迷い込んだという気持ちもありました。財団もお金が豊富な時期でしたから、潤沢なことができました。

長瀧先生はご自分が受けられた研究費の中でも最大のものでしたというようなことを言っておられますが、やはりこのプロジェクトのデータは大変貴重なものだと思いますね。

3カ国とも1991年と比べまして本当に変わりました。最初はゴルフボールとトイレトペーパーは必ず持っていけということでした。なぜ洗面所や浴槽の栓がないのでしょうか。ゴルフボールで塞いでも水が漏るのです。後ではゴムの栓を持っていくようになりました。

ベラルーシやウクライナへはフランクフルト経由が一番行きやすいということで、よく空港のホテルに泊まりましたが、そのトイレトペーパーのなくなり方が早かったのではないかと思います。また、冬に行きますと、モスクワの赤の広場で多くの人が毛皮の帽子を被るというのはよくわかりますね。帽子がなければ思考能力もなくなります。

このプロジェクトのもうひとつ特徴は、毎年科学的な成果を現地の担当者にも発表させるということで、モギリョフで第1回シンポジウムをやったということ、しかもわれわれはそのデータをすべて公表するということがよかったのではないかという気がします。

山下 英語とロシア語で会議をやり、報告書を毎年露英で作成したのがよかったですね。

紀伊國 通訳を見つけるのも困りましたね。

槇 スタート時は各センターの検診活動に同行するわけですから大勢の通訳が必要なので、モスクワ大学の日本語の先生や日本語を専攻している学生に通訳を頼みました。学生のほうは、「育てながら」というべきでしょうが。医学用語をマスターするのも大変だったと思います。その中には現在日本の企業で活躍している方もいるようです。通訳といいますが、コーディネーターとしての力量が問われました。

先生方の組み合わせが非常に絶妙で、山下先生のようにぱっと走ってくださる先生がおられて、その後ろを柴田先生のように石橋を叩いて、そしてもしかすると渡らないというくらいの先生もいらっちゃって。非常に素晴らしいチームワークだったと思います。

私は甲状腺を測定する器械というものは初めてだったのですけれども、長瀧先生が、これで測定すると現地の医師の技術、能力のレベルの差に関係なく皆同じように客観的な測定ができるとおっしゃったのが非常に印象に残っております。

長瀧 放影研で原爆のデータで、医者が違うとデータが違う。それを外国の人にいかにか客観的に示すことができるかを考えました。

山下 長瀧先生は謙虚でいらっしゃいますから甲状腺の器械のことしかおっしゃっていませんが、検診対象の子供たち全員採血をして、全員甲状腺のホルモンと抗体を測っているのは世界に類がないのです。本当にすごいデータなのです。その後、尿中のヨード測定装置もモギリョフとキエフに寄贈し、大変有用な結果を報告しています。これらの試料が現在もそれぞれのセンターに保管されています。

長瀧 これも長崎の調査結果を世界の専門家

に科学的な調査と認めてもらうのに有効だったと思いますし、チェルノブイリの場合も人道援助ではあるが、調査結果は科学的であるといえるところであると思います。

槇 とくに子供だけでこの数というのはすごいんですね。大きな仕事ですね。

紀伊國 線量に関しても苦労しました。事故直後にソ連は子供の甲状腺放射性ヨードを測定しているのですが、そのデータがなかなか出てこないのですよ。随分喧嘩もしましたけれども。結果としてはどれほどの意味があるのか私にもわからないのですね。

長瀧 これは米国が継続していて、最近データがまとまったので出版すると聞きました。米国と同じことをするなら笹川プロジェクトを辞めると米国に言われました。米国等は、事故直後の測ったデータがある人たちをフォローするという原則で今も続けていて結果が出たということでした。

重松 その計画は、前に放影研にいたDr. Finchが顧問をしています。米国は線量がわかった分だけお金を払う、というはっきりしたやり方でやっているわけです。

笹川プロジェクト10年間の評価

紀伊國 結果としては、笹川プロジェクトは人道的ということを出しましたが、あれは人道的だけではないかといわれるのは悔しいので、最初から科学的にやっていると言いつづけたわけです。それで5年間続けたわけですが、データが蓄積されて柴田先生が参加されたお蔭できちんとした処理ができるようになったのです。すると甲状腺の問題が一番大きくクローズアップされてきました。もう少し検証する必要があるのではないかということで、それであと5年間続けることにしました。

また、5センターをこのまま放っておくのは可哀想だから、自立できる形でどう引き継いでもらうかということもありました。事故と甲状腺の関係をどうするか、事故後生まれた子供たちと検診した子供たちとの比較調査を中心にその後5年間やりまして、2001年のモスク

ワのシンポジウムで一応終わりにしたということです。

10年間やったということの評価についてはいかがでしょう。

山下 1996年に5年間のプロジェクトを終了するまで、財団が支援した相手は、ある意味で現地では過疎のセンターだったのです。これは現場直結型の支援としては非常によかったけれども、同時にやっかみや、ある意味での批判、それはモスクワ、オブニンスク、キエフ、ミンスクの権威ある研究所にしてみれば、自分たちのところを素通りして田舎の診療所・病院を支援したわけですから、その後の状況を見守ることはある意味で大変重要でした。

その一つが、オブニンスクには1996年に同じ型の検診車を一台差し上げて、新しい共同プロジェクトを始めたことです。

ゴメリに関しては、最も多く小児甲状腺がんが発見されたということもあり、96年以降新たにいくつかのプログラムが組まれました。一つは事故前後に生まれた子供の甲状腺疾患の頻度を比較調査するということがあります。加えて後方支援のミンスクとゴメリを結ぶということでTelemedicineをWHOと立ち上げました。そしてChernobyl Tissue Bankというきわめて重要な国際共同プロジェクトの構想が動き出しました。ですから、私は、最初の5年間で地ならしができた、次の5年間で少しscientificなアプローチができる仕事をしようという段階に進むことができたと思います。

財団のこの5年間のプロジェクトの成果そのものが次の5年間のプロジェクトを生み出したと思います。

1997年には、先ほどお話のありましたある女性医師をゴメリへ送り込みましたけれども、先のお話の理由で、半年で帰ってきました。そこで98年には私自身が冬に1カ月あまりゴメリで生活させていただきました。

一緒に現場で苦楽を共にすると現地が見えてくるのです。というのは、彼らが本当に何を希望しているのか、こちらは何をすべきかということです。そして理解できたのは、彼らは本音では、まったくこちらに依存して将来を深く考えていないのです。財政的な面

でも、人的な面でも。どうにかして自立自活をさせないといけない。そうすると現地だけをいくら支援しても駄目で、行政のレベルから保健省、研究機関、大学やアカデミーなどとの協力が不可欠となるわけです。

そういうところは、財団は客観的そしてできるだけ科学的なアプローチで人道支援を実践してきたという事実を強調することで、現場とは一味違うパイプをつくることができました。これがある意味で財団のチェルノブイリへの貢献という名を残す一つの方向性を示しているのではないかと思います。

紀伊國 久住先生はチェルノブイリとのご関係はいかがでいらっしゃいますか。

久住 チェルノブイリに関して、日本では放射線の方面だけではなくて原子力界の方々もあの事故そのものがどういう事故だったのか、原子力の点からいろんな調査をやっておられる。今、私は両方を見せていただくという機会がありますが、日本はチェルノブイリに膨大な関わりをもってきたということをあらためて実感しています。

また、一方で政治的ないろいろな思惑があるのですが、現地の方々がいまだ大きな不安を抱えていらっしゃる、その解決策を世界中で模索している。18年たったからもうよろしいということではなくて、日本のこれまでの貢献を現地の人々に生かすには今後、どうしたらよいかと最近考えます。

紀伊國 そうですね、10年間でわれわれのプロジェクトは終了したのですが、幸いなことにWHOを巻き込んでベラルーシ、ウクライナ、ロシア、WHOそれからNCI（米国立がん研究所）、ECとの協力体制はいまだに続いております。

その一つはTissue Bankで、せっかくの甲状腺の標本を散逸させていいのかということからやっているのですが、ベラルーシの不思議な制度のもとにあって、なかなかうまくいかない点もあります。

もう一つは長崎大学とベラルーシ、またベラルーシ国内のゴメリとミンスクを結ぶTelemedicineです。日本財団がこれまでWHOに寄附してきたお金の利子について、私は28年前にマーラー事務局長と、利子はお互いに

協議して使おうじゃないかとメモランダムを取り交わしたのです。その一部を使ってTelemedicineのプロジェクトをスタートさせたわけです。

10年の総括

紀伊國 最後に、笹川プロジェクトの10年を総括され、そしてまたどういう具合に関わってこられたかというご感想を、順にお伺いしたいと思います。

長瀧 IAEAの会議が来年という久住先生のお話で、一つは日本全体としてどうするかという問題があると思います。日本として非常に多くのグループが関係しておられます。今、話題になっただけでもWHO、IAEA、EUなどの国際機関に対する日本の関与、そして笹川プロジェクト、外務省のプロジェクト、さらに現実に動いた組織でいえば、放射研、長崎大学、広島大学という単位がありますし、今までの話に出てこない日本のプロジェクト、団体、組織、個人も少なくないと思います。日本全体で、日本は被爆国としてチェルノブイリにこれだけ貢献したのだということをごどこかではっきりとまとめておくということも大切ではないかと思えます。WHOのまとめ、IAEAのまとめ方などは非常に上手だと感心しています。外務省のプロジェクトでNGOの数を調べたことがあったと思いますが、日本として50以上報告されたのではないかと思います。

それで日本全体、世界全体としてみたときに、チェルノブイリ事故を原子力利用、放射線利用、あるいは健康における影響という世界的な視野からどう捉えるか、いってみれば原子力文化の中でチェルノブイリをどう捉えるか、もう一度そのような視野で考えるのも意味があるのではないかと感じました。ちょうど久住先生が内閣府にいらっしゃるので、特に発言させていただきます。

笹川プロジェクトも日本あるいは世界全体の支援活動の中でどのような意味があったかを考えますと、先ほどからお話がありますように、現実に検診を非常に多数行って、重松

先生のいわれる分母ですが、それが国際的に最高のレベルの科学的な根拠があるなどということが本当に強調できる意義があります。笹川プロジェクトの総括として大切なところだと思います。

もう一つ大事なものは、笹川プロジェクトはあれだけの集団を日本として今後どうするのか、データもあり名前がわかっている集団をいったいどうするのかという問題があると思います。

3番目には、fall-outの影響というのは、科学的には甲状腺がんしかないということです。先日の長崎での放射線影響学会で柴田先生がまとめて質問をされていましたけれども、fall-outとしては白血病は全然増えていない、他の病気も増えていない、甲状腺がんがあるだけだ、ということ、社会に、日本全体としてあるいは世界にアピールすることは、いままで関わった人たちの大きな任務ではないかと思えます。そしてほかの病気が発見されていないのは、今の調査の限界で見つからないのか、本当になのか、そのへんのリスクの考え方も含めて、チェルノブイリの調査に関わった専門家がきちんとしたメッセージを社会に送るということも大事ではないかと思えます。

三輪 私は8月の1週間見学に行くような形で数々の貴重な体験をさせていただいたのですが、その後は現場でお手伝いすることができず残念でした。皆様方の現場での非常な苦勞を交えたお話を聞きながら、また長瀧先生の非常に先見性のある、またお金も非常に有効に使うことができたというので、確かに一番特筆に値すると思うのですけれども、こういうお話をお聞きできて私は非常に勉強させていただきました。

白血病の問題は、なるほどそういうことかというのが一つ新しい知識というか、それを今後も長瀧先生が最後に言われたように何かの形でもう少しどう追いかけるかというのは興味がありますね。

長瀧 白血病はfall-outにないだけで、リクイデーター（liquidator除染作業従事者）には相当可能性があるのですね。ですからそのへんを社会に対してはわかりやすく、fall-outでは

こうだけれども、リクイデーターではこうだ、と説明する必要があります。UNSCEARがまとめますと金科玉条とされるのですけれども。

日本全体がチェルノブイリをまとめて、チェルノブイリの科学的結果を発表し、原爆の被爆者と比べると日本としてはこうだというメッセージを発信できるといいですね。

紀伊國 最後に重松先生いかがですか。

重松 10数年間にわたって行われたこのプロジェクトはぜひ記録に残しておきたいと思えます。今回のプロジェクト全体を通じて最大功労者の一人がモスクワ事務所だと思うのです。モスクワ事務所をまずつくるという発想、現地の人たちのいろんな苦労話、この分だけはぜひ追加してください。

2004年7月末にOECD（経済協力開発機構）が2回目のアジアシンポジウムを東京でやってチェルノブイリの話が出た、そのときにフランスの人が、自分たちがやっているプロジェクトのビデオをずっと見せてくれたのですが、あれを見ると、ベラルーシが中心で、フランスしかやっていない、フランスが一番よくやっている、と理解されてしまいます。ぜひこの笹川プロジェクトもビデオにまとめられたら、と思ったわけです。

ご存知のようにチェルノブイリに関しては、日本だけでみましても、スタートは日本の外務省から始まって、笹川プロジェクトはもちろんのこと、大小さまざまなボランティアからNGOまで恐らく何十というグループが行っている。民主国家だから皆それぞれ勝手にやればよいといってしまうばそれまでですけれども、このような大事件について取り組んだ以上は、何か日本としてのまとまりがほしいですね。外務省はNIS支援室までつくってやりましたけれども、結局財団が作っているこのような記録は作成していない。ようやくの間、放影研の連中が苦労して『チェルノブイリ専門家交流10年の歩み』を出した。これだって放影研の練石君が苦労して作ったということです。

長瀧 先ほどお話したように、僕もそのために一生懸命分散したデータをまとめました。

重松 今後また同じような事件が起こっては困りますが、こういう世界では、どこで何が起

こってもおかしくない。その際はいろんな形の協力ができるように、ボランティアとしてもどうするかといういろんな教訓がありますので、それをぜひ大所高所からの教訓とをあわせて記録に残せばいいと思います。

紀伊國 ありがとうございます。

モスクワ事務所につきましては、第1回調査団の報告書の中で、重松先生が、ぜひ現地事務所が必要であると提言なさっておられたと記憶しています。最初は不思議な人もおりまして苦労しましたが、最後まで働いてくれたストリージャック氏（Viktor L. Strizhak）、ポーション氏（Ilya V. Poshin）、カムシュコフ氏（Nikolai N. Kamshukov）の3人は非常な努力をしてくれました。

彼らがいなかったら大変でしたね。3人の組み合わせもよかったですね。彼らは3カ国の保健省中枢部とも電話で連絡できるほどになってきていましたので、この事業を終えるときには日本にお招きして感謝の気持ちを表しました。いまだにロシアとの関連では助力をお願いしています。

重松 最大の潤滑油ですね

紀伊國 そういう点ではいろいろな方の努力、特に長崎大学、広島大学、放影研のご協力に対し感謝申し上げますと同時に、これだけのことをきちんと世界に発信しなければならないとのご指摘ですので、小冊子にまとめると同時に、来年ウィーンの会議にできれば久住先生にご報告していただくことを考えております。

重松 蛇足ですが、このプロジェクトに絶大な協力をしてくれた山下君たち国家公務員の人たちが首にならなくてよかったと思っています。

以上

（本座談会にご出席いただきました三輪史朗先生は、2006年1月ご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。）

チェルノブイリ・プロジェクトと国際医療協力の課題

1995年7月 Em:Bridge Special No.3 「国際保健医療協力」(1995年7月25日発行)より転載



出席者 (発言順)

山下俊一 (長崎大学医学部 原爆後遺障害医療研究所施設 教授)

星 正治 (広島大学原爆放射能医学研究所附属国際放射線情報センター教授)

柴田義貞 (放射線影響研究所 疫学・生物統計学部部長)

藤村欣吾 (広島大学原爆放射能医学研究所・病態治療部門 助教授)

プロジェクトをふりかえって

山下 まず最初にプロジェクトの経緯を簡単に振り返ってみようと思います。最初(財)放射線影響研究所の重松逸造理事長を中心に広島大学、長崎大学にヒバクシャ医療協力への声がかかり、甲状腺、血液、線量などの専門家のチームをつくることになりました。

何が最も現場に適したことなのかという協議がなされ、その結果、検診バスを送ることになったんです。チェルノブイリの汚染は、非常に広範囲にわたる汚染なので、ある一定の場所に住民を集めることは非常に難しいという判断からでした。

私は甲状腺担当ですが、まず最初の課題は、どのような機器を検診バスにのせるかということでした。これは高価なのですが、長崎大学第一内科で開発したアーク式のメカセクタイプの超音波装置と画像解析・保存装置が搭載されました。甲状腺以外のものでは、線量測定機、ホールボディ・カウンターなのですが、非常に重いので普通のバスにはのせにくい。その上、冬の極寒も耐えなければならぬ。どのような配置にするか、各御専門の先生方と相談し、機械や車の機種を選定を行いました。90年の3月に最初の一台が完成した時はトヨタの工場まで出かけて行きました。

次に技術支援ですが、91年1月からまず日本人スタッフの募集をはじめました。当初が

ら常駐は不可能だということで、人材を募集し、放射線技師、臨床検査技師たちを派遣することになりました。日本人医師以下技師合わせて20名くらい5月の連休明けから1週間、モスクワの近郊のオブニンスクという旧ソ連邦で最も古い原発の町へ行き、そこの放射線医学研究所で現地スタッフの研修をしました。検診バスの使い方や甲状腺の超音波診断装置・ホルモン測定機器などの使い方を1週間の駆け足で学習してもらいました。

その後日本人スタッフは5つの場所、ロシアではクリンシイ、ウクライナではキエフとコロステン、ベラルーシではゴメリとモギリョフという5つのセンターに散らばって行ったわけです。センターといっても千差万別で当初から生活面で苦勞したスタッフもいたようです。7月ぐらいまでで一応の指導は終了し、その後の常駐日本人スタッフは現地にいません。

ある場所などでは、本当に期待を持って受け入れられたものですから、パトカー先導で、ナンバープレートがまだつけてない状況下でバスを運んでいたりということもありました。その頃、現在のように柴田先生がかかわられていなかったこともあり、一番もめたのは問診表をどうするかということでした。というのは、すでに事故後5年経ってましたが、現地では旧ソ連邦時代の全ソ放射線医学センターというところが情報収集するスタイルになっていました。すると、問診表を日本の放影研、あるいは長崎、広島がやったスタイルでいくのかそれともWHOがやろうとしているスタイルにするのか、ずいぶん議論になりました。最終的にはある一定の合意のもとに問診表ができあがったのですが、これが各センターに持ち帰るとまた問題が発生するんです。ウクライナのキエフなどではどうしてオブニンスクの問診表に従わなくちゃ行けないんだとか、ゴメリでもこういう話は聞いていない、自分たちは自分たちでベラルーシのシステムがあるからそれでやりたいという話が出るわけです。

例えばゴメリでは甲状腺の機械がうまく動かないとか、モギリョフではある程度自分でアレンジしてやりたいということがあったり、キエフは全く独自のやり方をやってる。検診

の対象を事故当時0歳から10歳に決めたにもかかわらず、汚染地区の住民を対象にしたりとか、いろいろな意思の不統一というか情報の乱れがありました。最初の3カ月くらいは本当に試行錯誤でした。この間の日本人スタッフは本当にこのプロジェクトの立ち上げに尽力していただきました。

また、血液の採血にしても真空採血管というのを使うんですが、使ったことがありませんから、どうやって採血するのかを、実際に教えてあげる必要もありました。

急いで作ったコンピュータのソフトは日本語でした。日本語だと彼らは読めませんから、それを翻訳したりとかいろいろなことに対応しながらやってたというのが、最初の出足の3カ月でした。こんな状況が一年間ぐらい5センターでくすぶっていました。ですから、データの品質管理まではなかなか到達しないわけですよ。

これはおそらくNGO独特の、走りながら考えるという面のいいところと悪い面の両方が出た例ですね。

甲状腺については、甲状腺癌が増えるだろうということは、当初から予測されていました。ただそれは恐らく長崎、広島、マーシャルのように事故後、8年から10年くらい経ってからで、すぐに増えてくるということを我々は予想してませんでした。ところがベラルーシのゴメリという地区を中心に91年、92年、93年と、発見頻度が非常に増えてきたんです。我々のプロジェクトでも当初の2万人くらいの診断では甲状腺癌は0だったんです。ところが、最初にスクリーニングした中から癌が見つかり、極端なことをいうと1991年の5月に最初に検診した子供の中に癌が出たということがありました。93年の時点では、5万5千人の解析でその中で甲状腺癌が20数名、大半がゴメリ地区という高い汚染地区でみつかるという事実が歴然としてありました。

甲状腺で我々が世界に誇れるのは、統一された診断基準とプロトコールに従い全ての画像のデータを保存、保管しているということ。ホルモンといわゆる血液の自己抗体を測定するわけですが、その血清を原則的にすべて保

管しているということです。これは将来、この子供たちがある意味で非常に大きな母集団、追跡調査の母集団になるということの大前提に作業をするということです。同時に周辺住民に大きな安心感を与えるということができたということです。

藤村 私は血液が専門ですが、最初この話を聞いた時は、一体何をやるのだろうかと思いました。なにせあの時はソビエト連邦の解体の時期が重なり、各共和国の自己主張が出てきた時期でした。それに事故についての被害者意識も非常に強い。また我々の方も最初目的をはっきりできないということがあり、いろんな行き違いがありました。特に我々は、広島や長崎で行っている原爆被爆者に対する検診を最初イメージして行きましたが、そういう型にはめるのが本当にいいのかどうか、わからなかったんですね。

ある程度は我々が日本でやってるような方向でやろうと頭に描いて行きました。しかし、今いったような政治情勢とか、国民の意識の壁にぶちあたると、なかなかそうはいかないことに気づかされました。

それと、もう一つの問題は、医学教育方針が我々の日本とやっぱりロシアのお医者さんとの間に差があることです。現地の医学教育とか医学レベル医療システムというものを我々が理解しないで行ってるという面もあり、検査データを正確に出すというようなことでさえいぶん苦労がありました。

私が最初に行ったのはキエフで、そこから田舎へバスで行きましたが、現地の人、住民の人たちの受入れが非常にあたたかかったです。最初はこんなところでやっていけるのかという心配がありましたが、家族の人や現地の医療スタッフの我々に対するあたたかい迎え入れを肌で感じるにより、苦労は消えてしまいました。

血液で何が一番問題なのかというと、まず、検査機具やいろんな試薬が全く違いました。顕微鏡一つにしても、双眼で見れて、しかも電源で光を与えるというような顕微鏡を彼らは使ったことがない。彼らの顕微鏡は我々が高校の生物で使ってたような単眼の顕微鏡で、しかも太

陽光線で光源を得てる顕微鏡でした。従って今回財団から供与して頂いた顕微鏡で血液の標本を見ると、やはりイメージが違うわけですね。そうすると白血球分類を最初から教えていくことになります。白血球分類は最終的には機械で右左に振り分けができるようなものではなく、どうしても主観的なものが入ります。各センターで白血球を分類する人の目を一致させるということも非常に苦労しました。

血液でいうと、我々のイメージでは広島、長崎の場合、被爆後だいたい5年、6年をピークにして白血球が非常に増えて、10年まで非常に多くなるというデータが今まであります。ですから事故後、そのようなことが、いろいろ起きるんじゃないかということで、我々もずいぶん神経を尖らせて見たんですが、今のところ、幸いなことに白血病患者の数が増えているデータは、我々が検診した対象の中では、それほどはいないんです。風土的な病気や遺伝的な病気は、見つかっていますが、とりたててこういう特徴のある血液の病気が増えているということは今のところは認められないのが現状です。

星 私は線量が担当なんですが、まずは全体的な話をさせてください。私が最初に行ったのは、実際機械を向こうの人にいかに使ってもらうかということのためでした。我々のセクションは、最終的に放射能の影響が本当にあったかどうかを問われます。個人的、あるいは地域的にどれぐらいの線量かを最終的にはっきりしなくてはいけないわけです。当然、IAEAが取ったデータや旧ソ連で取ったデータを使うという方法もありますが、基本的には自分たちで確認しながらやっていくという方針をとりました。装置は作りましたが、現在測定できるのはセシウムしかないんです。セシウムは、体内の代謝によって半分に減る量が百日です。だから計ってもせいぜい一年前ぐらいのことしかいえない。調査は、事故後、ずいぶん後から始めたわけですね。だから一番の問題は直後のデータが全然とれてないということです。つまり、直後の被爆のことはわからないということがあるんです。線量再構築と言うんですが、最初の数カ月の被爆線

量というのはものすごく高かったはずですが。それを現在のデータを使いながらいかに推測するかということが問題なんです。

我々がとった大きな方針は間違っていないと思うんですが、もう一つの課題は、土壤の放射能汚染との関係がとれるかです。日本であれば、土壤の汚染をとるのはほとんど意味がありません。というのは、日本だったら米にしる農作物を全国各地から集めています。ところがロシアの場合、非常に大きな農場があります。一方で個人用として畑が短冊状に並んでるんです。よく聞きますと、国がそういう土地は貸すわけです。保健省関係の人に聞くと、当然、汚染地域の食物は食べないように指導してると言いますが、やはり全部自分の所で採った食べ物を食べてるんですね。このような場合は土壤を調べる意味があるわけです。

それともう一つは、実際調べてみると汚染状況が平均的でなくて、20、30m²単位のスポット的に降ってるということがありました。それで土壤と食物と体内量の三者の関係をまずとってみようと考えたわけです。百件ほど対象を決めて、その相関関係を今ちょうど調べています。もし土壤汚染との対応がつけば土壤汚染の地図なりが利用できるかもしれないと思うんです。

柴田 私がこのプロジェクトに参加したのはだいぶ後のことでした。91年7月に広島で開かれた会議の席で、問診表のことで大変もめてるということを聞きました。生物統計学が専門ですから、データ管理と統計解析を担当するというので参加しました。問診表については、5センターの関係者をモスクワに招き、討議して決めました。会議の後でモギリヨフに行ったのですが、印象としては、やはり人工衛星を初めて打ち上げた国だけのことはあって、非常に科学技術は進んでいると思いましたね。お金がないからコンピュータもあまりいいものが買えないけれども、非常に優秀な技術者のいることがわかりました。この国は数学は非常に強いのですが、純粋数学や物理数学が中心で、データ解析とか疫学などの概念は馴染みが薄いようです。しかし、潜在能力はきわめて高いですから、こちらがうまく誘導していけば、非常によくやれるわけで

す。日本だとおそらく外注したりして、高価なものにつくのですが、彼らはかなり高度なソフトまで全部自作します。

直面したさまざまな問題点

山下 始まって3カ月ぐらいは本当に混乱の連続でした。私たちは医師ですから、その立場から参加したわけです。まずこのプロジェクトは医療援助、人道的援助が第一にあります。400万人ぐらいの人が汚染地帯に住んでいるわけですが、その中でもできるだけ多くの子どもたちの診療をすることになりました。ソ連という国が非常に情報が閉鎖された社会でしたから、事故後、情報が隠されたりしたこともあり、住民は政府や行政サイドからの情報に対する不信感が強いんです。私たちは広島や長崎で調査活動をしてきた実績があります。ですから、最初、現地の熱い期待が高かったわけです。日本の専門家が来たということでもずいぶん歓迎されました。

私たちの直面した問題をいくつかあげてみましょう。例えばウクライナのキエフはチェルノブイリ原発のある所ですから、いろんな国、アメリカ、フランス、ドイツなどいろんな国の支援団体が交錯して入ってるんです。そうするとAという地区で検診された子どもと親が、それを信用できないかもしれないという不安から、Bというところへ行くということが起こるんです。つまり、データが重複してしまい、個人のアイデンティフィケーションが非常にとりにくい。第2の問題は、最初はソ連だったものが、国が崩壊することによって、行政機関の担当が変わり、最初からまた説明をしなければならないということです。国がわかると各センターで対応の差が出てきてしまう。ベラルーシのモギリヨフは州をあげてチェルノブイリ事故の医療に対応している。スタッフも設備に非常にしっかりしている。一方、キエフは、州立第一病院に最初のセンターをおいたんですが、自分たちの仕事のテリトリーをこえてうまく稼動しない。検診も思うように進みませんでした。2年目に保健省

などと話し合いをやり、3年目に第二病院にセンターそのものが代わったんです。幸いにスタッフは同じままでしたので大きな混乱にはなりませんでしたが。

地元では、いろんな支援団体が交錯しますから、いろんな団体から支援を受けるんです。最初ゴメリのセンターはオランダの医師や看護婦の指導でやっていましたが、彼らが偉いところは、住民に根ざした情報公開活動を積極的に推進させ常駐スタッフをおいて指導していたということです。それに比べて私たちは常駐しているわけではありませんし、物質的支援をするにも開始時点で大きな設計やプランニングがないまま始めたことが大きな問題点でした。私たちは医療サイドだから、現場がわかることが長所ですが、逆に言うと現場しか見えない。現場のためだと思うことが、大局的に見ると欠点だったりすることもあるわけです。藤村先生や僕がいくらがんばって、病気をみつけても、限界があります。治療の問題は積み残していますし、最終的には放射能によって起こった障害かどうかを疫学・統計学的に見なくてはならないわけですから。だから最大の問題というのは、医療協力というのは人道的な立場ですが、あくまでサイエンスに基づいた援助じゃなければいけないんです。限られた予算枠の中での有効なお金の使い道も考えなくてはなりません。そのことを現地スタッフに理解してもらうのに随分と時間がかかりました。

柴田 基本となるデータをとるためのフォーマットを決めるだけでも半年以上かかりました。5センターの間でシステムに少しずつ違うところがあり、納得させて統一するのに時間がかかりました。最近では、向こうの方からこうしたいという声が出てきますが、最初はイメージがつかめないのでですね。住所にコードをつけるように何度いっても、初めのうちは面倒だからつけない。そのため、山下先生や藤村先生から求められたデータが即座に出せない。彼らもやっとなりの必要性がわかってきたわけです。

藤村 データと医療のことは、私たち血液の方でも大きな問題があるんです。広島や長崎の場合でも統計学的な視点から言えば確かに原爆の影響があったと言えますが、ではなぜ

放射線が様々な障害を引き起こすのかというメカニズムはまだわかっていないし、すでに50年になろうとしているんですが、原爆と病気のメカニズムについてまだ結論を出せなくて継続してやっているのが現状です。だから、チェルノブイリに関して、マスコミはすぐに因果関係を言いたがりますが、診断を始めて3、4年のデータで原因がなんだと言うには時期尚早だという気がします。

今、我々がやらなきゃならないのは1986年当初0歳から10歳の子どもたちを対象にして調べたデータや血液をきちんと資料としても保存し、将来的にはDNAからのアプローチもできるようにすることです。これらの子どもたちが成人や老人になった時に、おそらく様々な病気が出てくると思います。事故とその病気の因果関係を知る上で、それらのデータや資料の保存・保管はきわめて重要な作業です。

今までシンポジウムを現地で行ってきたんですが、その時、私たちが検診している地域外からいらっしゃったお医者さんたちから質問があるんです。自分がいる地域は白血病や再生不良性貧血が多いんだとおっしゃる。私たちも検診したいところがあっても対象にならない地域だったりすると、ディスカッションしたくてもうまくできない場合があるんです。血液疾患に関しては、ロシアの医学会をリードしてらっしゃる方のデータでも、今回の原発事故と血液疾患に関して結果が出せるはっきりしたものは出ていないんですね。もちろん事故当時、放射能の除染作業をした人たちは除きますが。

星 私の立場からすれば2つの問題があると思います。放射線をうけて、どれだけ問題があるかということが一つ。二つ目としては今、住民が住んでいる場所は本当に大丈夫かということです。各センターのカバー地域の範囲、つまり住民が住んでいる現状の場所に関しては、全く問題なからう、安全だと思います。かなりの安全性を見積もって、広い範囲を避難させたとして私は思います。これから出る影響に関しては、今から調べてみないとわかりません。30キロ圏、つまりゾーン内ですが、ゾーン周辺の汚染はチェルノブイリ原発から円を描いていますが、ゾーンの中であっても放射能のレベルが非常に低

くて住める場所もあるんです。かと思うと、10キロ圏内ぐらいだとものごく汚染が高い場所もあり、そこはとても住めません。ロシアがつくった30キロ圏内の汚染を調べた精密な地図があるんですが、それにのっって調べたらいたい合っていました。

これは、私の個人的な意見ですが、帰っていい地域は当然あると思います。しかし大きな問題があります。それは食べ物の問題です。彼らは「きのこ」をかなり食べてるんですが、放射能は普通の食物の場合は1/100ぐらいの量しか入らないんですが、「きのこ」はそっくり入ってしまうんですね。汚染されている葉っぱがそのまま腐った腐葉土に生える「きのこ」が多いんですよ。汚染の高い森では採ることを禁止しなくてはならないんです。

チェルノブイリ・プロジェクトの今後の課題

山下 あらためて難しいなと思うことは、やはり我々は日本で国家公務員としての仕事の合間をぬって出かけていくわけです。その心苦しさが一つあるんです。それから今一番心配なのは、このプロジェクトは一応5年間で一区切りですから、いよいよ5年目をむかえてこのシステムを現地の活動としてどうやって維持するのか、どう再編成するのかということですね。現地で使う医療物資や消耗品を今まで全て日本からサポートしてるわけで、供給ルートがなくなると、当然血液も採取できない状態になってしまうんですね。ロシアをふくめて各国の経済はどんどん悪化してますよね。

藤村 私が現地へ行って驚いたのは、もう使われなくてねむっている機械がたくさんあるんです。それらは、アメリカやドイツの団体が寄付したものなんです。しかしながら、彼らは消耗品などはある一定の期間しかサプライしないわけです。だから、機械はあっても今では機械は使われずにほこりをかぶっているわけです。プロジェクトの終了が近づいてきて思うのは我々のプロジェクトが終わってしまうと、今使っている機械もねむってしまうのかなあと一抹の寂

しさがあるんです。いかに維持し、発展していったらいいのか。

柴田 最近ときどき考えることは、チェルノブイリのような事故が日本で起こった場合、「何ができるだろうか」ということです。「まず、科学的調査だ」なんて言ったら住民は怒りますよ。まず被災者の救援です。私の研究所では原爆被爆者の調査をやっていますが、科学的調査もさることながら、被爆者の健康と福祉が大きな目標です。もちろん、科学的調査の結果として、得られたデータは放射線防護の基準作りなどに利用されており、やはりどれくらい世の中に貢献できるかということが評価の根底にあると思います。100%安全ということはありませんから、日本で起こった場合の対応など、教訓とすべき事はいっぱいあります。

星 プロジェクトをこの段階でやめしまうと非常にもったいないこともあるし、現地の人たちも大変だと思います。笹川プロジェクトの一つの特徴は、3つの共和国にまたがって同じ、均質な検診活動が出来ているということです。この間のシンポジウムでもロシアから来た代表とウクライナの代表が影響あるないということについて喧嘩ごしてで言い合っていました。そのような二国間のずれが今後大きくなってくると思います。その意味で笹川プロジェクトは非常に重要です。

山下 放射線障害の特徴はいわゆる「晩発性」、かなりあとまで影響が出るということです。したがって長期プロジェクトにならざるを得ない。これからの国際ヒバクシャ医療は日本の国際社会における役割ということと非常に関係してくると思います。世界の富のかなりの部分が日本に偏っているわけです。そうすると東南アジアやアフリカなど地球上で、援助を必要としている何も無いような地域で、どうやって彼らの自立、自発をうながすかが大変重要になるわけです。ロシアは後進国ではありませんが、チェルノブイリの事故に関しては長崎・広島への支援を必要としています。

藤村 私たちが意図したような検査システムなり人材というものが育っているのは事実ですね。日本にやってきても立派にやっていける能力のある人もいます。問題は今後、3つの

共和国がどのような保健医療システムを組み継続的な体制をつくっていけるのかということの方でしょうね。

山下 現地のスタッフは血液、線量、甲状腺についてきわめてよくトレーニングされてると思います。笹川プロジェクトが本当にいいことをしていると思うのは、我々が現地で指導するだけでなく、同時に現地のスタッフを日本に呼んで研修するということです。血液もそうですし、甲状腺も、広島の高ケア（放射線被爆者医療国際協力推進協議会）同様、長崎・ヒバクシャ医療国際協会というのがあるんですが、勉強しに呼ぶんです。その人材交流がこのプロジェクトが4年間いいかたちで続いてきた重要なところですよ。

星 線量の場合は、維持するために試薬とかあまり高価なものはないんですね。だから、体制を現地に引き継いだとしても可能だと思うんですが。

山下 ただ、先月もベラルーシとロシア、ウクライナをまわったんですが、急速に各国のチェルノブイリに対する対応の差が出てきている。ロシアはチェルノブイリ国家委員会というのは解散してしまい、人が代わってしまいました。窓口も人が代わってしまいました。またベラルーシは大統領が代わりましたから当然、保健大臣も代わった。幸い新しい保健大臣はゴメリの癌センター出身の女性の方で非常に話のわかる方ですので、チェルノブイリに力を入れることになる。ゴメリに新しいセンターをつくって、そこを立派なものにしたいと考えている。同じくベラルーシのモギリョフも州をあげて力を入れている。ところがロシアはどちらかというと逃げ腰の態度です。

センターによっては検診バスも車軸がだめになったり、窓ガラスが割れたりとかいろんなことがある。機械の耐用年数もきますし、そのへん含めて、我々はどこまで責任をもてるか、ただ私も星先生と同じで、やらないといけないし、継続してやりたいという気持ちが強いです。

柴田 この5年間でわかったことを整理して発表することが第一の義務だと思います。今のところ白血病は見つかっていませんが、我々が調べた5万～7万の子どもたちがサンプルとして

偏っていたためにみつからなかったというわけではありません。放射線被爆というどうしても広島、長崎というストーリーが念頭にあって、まず白血病が発生して、その後甲状腺が発生すると予測されがちです。しかし、チェルノブイリは今後も起こりうる原発事故の一つの形態で、広島、長崎とは被爆の状況が全く違います。ですから、チェルノブイリの場合に順序が逆になったことは、別に不思議とは思いません。むしろ新しい知見だと思います。

藤村 だから成人になった時に癌が多くなるかどうかということをフォローする必要があると思います。

柴田 「低線量被爆」がいったいどんな結果を生み出すかは簡単にはわからないと思います。どれぐらいであれば人間の一生においてほぼ安全といえるのか、これまでの結果をそういう風に役立てよう努力する必要があると思います。

藤村 いまだかつて世界でこのような調査をした例はありません。将来的に何らかの形でこのデータを利用してもらえるようにしなければならぬということが、我々の最終目標でしょうね。今回の我々の検査システムがベストかどうか反省点もあると思います。柴田先生が先ほどおっしゃいましたが、日本で事故が起きた時にどういうプロジェクトチームをつくった方がいいか。チェルノブイリ事故では急性放射線障害の人を非常に早くモスクワの第六病院に運んでいます、あのようなシステムは日本ではできないと思うんです。そういう面もふくめて非常に勉強になりました。日本ではロシアなどの医療制度が末端では機能しないと言われますが、基本の根幹は日本なんかより出来上がっていると思います。

国際医療協力への道

山下 今年は戦後50周年にあたります。広島、長崎の一つの区切りの年になると思いますし、あらためて世界へアピールする機会だと思うんですね。また、我々がチェルノブイリまでかけてヒバクシャ医療協力活動を行っていることの一つのまとめの年にもあたり、巡り

合わせを感じるわけです。私はこのプロジェクトでやっていることが21世紀に向けて放射線と人類がいかに付き合うかという大きなテーマにおいて、どんな遺産を残せるのかをいつも考えるんです。原子力についての論議はいろいろありますが、私の立場からすれば、結局、科学者や医者役割が問われているような気がします。前に星先生がお母さんたちから「ここに住んで大丈夫か」「これ食べていいのか」「子どもに影響はないのか」と質問された話をされてきましたが、そういう切実な問題にどうこたえるのが重要ですね。

と同時に、チェルノブイリもそうですし、海外での医療協力の人材が今後どのように育つのかということも大問題だと思っています。星先生のところは後継者というか、人材についてはどうですか。

星 我々は放射線はどれぐらい近づくと危険だって知っていますからいいんですが、わからない人はこわがりますから、後継者はほとんど育たないんです。放射線と疾患の因果関係がつかめていないからなんです、放射線生物学の分野でノーベル賞が出てもいいと思うんです。そうすれば日本でも若者がかなり参加するようになると思います。研究としては地味かもしれないけれど、いつか花開くと思うんです。見捨てちゃいかん(笑)。

山下 本来、こういう研究は、病気が「晩発性」ということもありますから、研究者や医師自身も長い間これにかかわれることが大事です。ただやっぱりやって旗を振れるのは、日本の場合、長崎、広島しかありませんから、ヒバクシャ医療に関わる医師や研究者を育てるというのは、我々の責任だと思います。

グローバルに医療協力活動をもっと盛り上げていかなければいけない時代なんです、その活動にもっと評価を与えるシステムを考えないとなかなか参加しにくいのが現状ですね。

藤村 そうならないと、若い人にいくら医療協力を海外へ行けてと言っても、これは難しい。我々医療サイドも、周りにいる人たちだけがターゲットではないという意識をもっともって持たなければいけない。あれはボランティア精神で行っとるわいというようなこと

だけではだめですよ。

星 ボランティアの評価がないとだめなんだよね。

藤村 若いこれからの人たちがどんどん世界に飛び出して、いろんな困っている人たちの所に行こうという、そういう意識をバックアップする姿勢ですね。これは何も放射線だけに限らない課題です。現地へ行くと日本へ帰ってきた時にポジションがなくなるっていう問題も大きいんです。きちっと行けるような雰囲気や環境整備をしないとね。

山下 藤村先生の話聞いて感じたんですけど、現状では海外へ出かけて仕事をして、論文などの業績評価が中心でその評価が低いように見なされているようです。ですから大事だと思うのは、海外医療への参加をどう評価するか。これは将来を考えた時、非常に深刻なんです。僕は今度の日本医師会雑誌に発表させていただきまされたけど、国際医療協力部門とか、正式な講座とか部門別にスタッフを抱えてくれるような制度やシステムづくりをしないとおそらく国際という名ばかりで同じことの繰り返しだと思っています。そういう枠組みが日本の中にできないと、海外の医療活動とか、海外の保健行政に直接タッチするのは非常に難しい。国際医療協力の大学院が東大の講座ではじまっているんですが、現状では、そういうことを教育する場が他にないんです。医師国家試験なども、すべて日本という国に向けて成立していますから。

国際ヒバクシャ医療協力は、21世紀に日本が国際社会にどう貢献できるかという大きな命題ですが、民間活力の利用と国レベルの調和という点ではまだ何も始まっていないに等しい。日本の大学の中にもセンター構想があるわけですから、しっかりとした予算面、身分保証のシステムがつくられるべきだと思います。今日のこの話が少しでも官公民共同事業のきっかけになればと思っています。

年表

年次	暦年	月日	出来事
1	1990 (平成2年)	2.12~14	日本の経済使節団を率いて訪ソ中の(財)日本船舶振興会笹川陽平理事長はモスクワにて、チェルノブイリ原発事故(1986年4月発生)被害者に対する医療協力の要請をソ連政府より受ける
1	1990 (平成2年)	4.12	第1回チェルノブイリ原発事故協力に関する懇談会開催(於 笹川記念会館)
1	1990 (平成2年)	5.2	第2回チェルノブイリ原発事故協力に関する懇談会開催(於 笹川記念会館)
1	1990 (平成2年)	5.8	(財)日本船舶振興会笹川陽平理事長よりソビエト社会主義共和国連邦共産党中央委員会A.ヤコブレフ氏宛てチェルノブイリ被曝者対策協力について書簡送付
1	1990 (平成2年)	5.18	全ソ労働組合評議会議長G.I.ヤナーエフ氏より(財)日本船舶振興会笹川陽平理事長宛て放射線医学の日本人専門家視察団をソ連へ招聘したい旨連絡をうける
1	1990 (平成2年)	7.9	チェルノブイリ原発事故協力に関する打合せ会開催(於 笹川記念会館)
1	1990 (平成2年)	8.8~15	ソ連邦第一次調査団派遣(団長笹川陽平(財)日本船舶振興会理事長、重松逸造他放射線医学専門家6名、佐藤哲雄(社)日ソ貿易協会会長、吉松昌彦(財)日本船舶振興会振興会事務局長代理、紀伊國献三理事) ロシア、白ロシア、ウクライナの被災地の医療施設とチェルノブイリ原子力発電所視察、労働組合代表者等と協議
1	1990 (平成2年)	8.22	ソビエト連邦保健省副大臣K. Kondrusev氏より、チェルノブイリ医療協力委員会委員長重松逸造宛、協力要請の骨子と5基幹センターの提示
1	1990 (平成2年)	11.8~14	第二次調査団としてプロジェクトの内容協議および全ソ放射線科学研究センター視察のため重松逸造((財)放射線影響研究所)、藏本淳(広島大学原爆放射能医学研究所)、紀伊國献三理事、財団職員1名を派遣(ソ連邦 モスクワ、キエフ)
1	1990 (平成2年)	12.19~26	チェルノブイリ笹川医療協カプロジェクト開始宣言贈与医療機材目録贈呈のため笹川陽平日本船舶振興会理事長、重松逸造(財)放射線影響研究所理事長、紀伊國献三理事、鶴崎澄則事務局長、財団職員2名をモスクワへ派遣
1	1991 (平成3年)	2.28	日本船舶振興会笹川良一会長よりソ連代表団へ検診車の披露(於 東京)
1	1991 (平成3年)	3.4~7	日ソ専門家・担当官協議(於 モスクワ、重松逸造チェルノブイリ専門家委員会委員長他日本側7名、財団事務局3名)
2	1991 (平成3年)	4.16	検診車5台他医療機器成田空港より、ソ連のアントノフ輸送機にてモスクワ向け発送

年次	暦年	月日	出来事
2	1991 (平成3年)	4.26	笹川陽平日本船舶振興会理事長、紀伊國献三理事他によりモスクワ赤の広場で検診車5台の贈呈式
2	1991 (平成3年)	4月末～7月	現地技術協力のため日本人医師、臨床検査技師、放射線技師等25名を5基幹センターへ派遣、鶴崎事務局長他財団職員6名出張
2	1991 (平成3年)	5.5～8	日本人専門家の指導により現地医師検診チームの研修 (於 ロシア・オブニンスク市)
2	1991 (平成3年)	5月中旬	5センターで児童検診活動開始 (ロシア・クリンシイ、ベラルーシ・ゴメリ、モギリョフ、ウクライナ・キエフ、コロステン)
2	1991 (平成3年)	5.26～6.1	検診活動指導および状況確認のため今村展隆 (広島大学原爆放射能医学研究所)、難波裕幸 (長崎大学医学部) 他3名、および財団職員2名をモスクワ、クリンシイ、ゴメリへ派遣
2	1991 (平成3年)	7.29～8.10	検診活動指導のため、和泉元衛、山下俊一 (長崎大学医学部)、中尾隆 (鹿児島市民病院) および財団職員4名を5センターへ派遣
2	1991 (平成3年)	9.23～10.5	5センターからのソ連医師団 (Dr. Shvetsov他9名) の研修実施 (於 長崎、広島、千葉)
2	1991 (平成3年)	10.9～13	検診活動指導および第1回専門家会議のため、和泉元衛、山下俊一 (長崎大学医学部)、柴田義貞 ((財)放射線影響研究所) および財団職員1名を5センターへ派遣
2	1991 (平成3年)	10.10～11	チェルノブイリ笹川プロジェクト第1回専門家会議「検診指導および検診の進め方について協議」(於ロシア モスクワ市)
2	1991 (平成3年)	12.15～20	供与機材 (超音波診断装置および線量計) の厳寒期点検のため、メーカー技師2名および財団職員1名を5センターへ派遣
2	1992 (平成4年)	1.15～27	検診活動指導のため山下俊一 (長崎大学医学部)、星正治 (広島大学原爆放射能医学研究所)、財団職員1名を5センターへ派遣
2	1992 (平成4年)	1.25	5センターと覚書調印 (於 ロシア モスクワ)、笹川陽平日本船舶振興会理事長重松逸造(財)放射線影響研究所理事長、鶴崎澄則事務局長他出席
2	1992 (平成4年)	3.31	鶴崎澄則、事務局長を退任 (4.1 理事就任)
3	1992 (平成4年)	4.25～5.1	藤村欣吾 (広島大学原爆放射能医学研究所)、柴田義貞 ((財)放射線影響研究所) および財団職員1名を5センターへ派遣
3	1992 (平成4年)	4.27	第1回チェルノブイリ笹川プロジェクト ワークショップ開催 (於 ロシア・モスクワ)

年次	暦年	月日	出来事
3	1992 (平成4年)	5.17~24	供与機材の取り付け、取り扱い指導、点検のためメーカー技師4名および財団職員1名を5センターへ派遣 (超音波診断装置、線量計および尿中ヨード・クレアチニン自動分析装置)
3	1992 (平成4年)	5.31~6.5	第1回シンポジウムおよび機材トレーニングのため日本人専門家19名、財団関係者7名派遣
3	1992 (平成4年)	6.2~3	第1回チェルノブイリ笹川医療協力シンポジウム開催 (於 ベラルーシ・モギリョフ市)
3	1992 (平成4年)	6.4~5	5センター担当医師、技師35名を対象に線量測定器、甲状腺超音波診断装置、尿中旅一度測定装置、血液標本自動染色装置操作訓練およびデータ管理の研修を実施 (於 モギリョフセンター)
3	1992 (平成4年)	6.6~7.5	供与機材の取り付け、取り扱い指導、点検のためメーカー技師4名および財団職員1名を5センターへ派遣 (超音波診断装置および線量計)
3	1992 (平成4年)	9.13~20	検診活動指導のため、星正治 (広島大学原爆放射能医学研究所) 他3名をモギリョフ、クリンシー、ゴメリへ派遣
3	1992 (平成4年)	9.15~25	検診およびデータ管理指導のため、山下俊一 (長崎大学医学部) 他2名および財団職員1名を5センターへ派遣
3	1992 (平成4年)	10.16	事業調整のため、Nikolai Vaganov (ロシア保健省次官) 他6名およびモスクワ事務所職員2名招聘、長崎、広島、東京で協議
3	1992 (平成4年)	11.2~3	チェルノブイリ協力に関するウクライナ保健省主催調整会議およびUN主催Inter-Agency Task Force Meetingに出席のため、紀伊國献三理事、ウクライナ (キエフ) へ出張
3	1992 (平成4年)	11.23~28	新キエフセンターおよび後方支援病院の調査、ウクライナ放射線医学研究センターと甲状腺データについての話し合いのため山下俊一 (長崎大学医学部) および財団職員1名をウクライナに派遣
3	1993 (平成5年)	1.22~2.1	尿中ヨードクレアチニン分析装置据付およびホールボディカウンター稼動状況点検のため、メーカー技師2名および財団職員1名を5センターへ派遣
3	1993 (平成5年)	1.22~2.5	ロシア連邦における後方支援病院の調査および基幹センターでの技術指導のため、山下俊一 (長崎大学医学部) 他4名および財団職員1名を派遣
3	1993 (平成5年)	3.7~12	ロシアTV「テレビマラソン」でのチェルノブイリ笹川医療協力事業紹介のため笹川陽平日本船舶振興会理事長モスクワを訪問

年次	暦年	月日	出来事
4	1993 (平成5年)	4.10~14	5センターの担当者と検診活動状況、データ分析の検討および土壌サンプル採取について討議のため山下俊一(長崎大学医学部)、高辻俊宏(長崎大学医学部)、星正治(広島大学原爆放射能医学研究所)および財団職員1名をモスクワへ派遣
4	1993 (平成5年)	4.18~5.1	5センター血液検査担当者を自動血球分析装置操作、検診データの解析と評価、および関係施設視察のため広島へ招聘(Yuryeva他12名および通訳1名)
4	1993 (平成5年)	5.9~20	供与機材(Sysmex NE-7000)の据付および取り扱い指導のため、メーカー技師1名をベラルーシ(モギリョフ)、ウクライナ(キエフ)、ロシア(クリンシー)へ派遣
4	1993 (平成5年)	5.10~28	血液検診指導のため、藤村欣吾、久住静代(広島大学原爆放射能医学研究所)、メーカー技師(東亜Sysmex)1名を5センターへ派遣;久住医師、ISEA "Znanie" 主催ブリヤンスク国際セミナー「チェルノブイリ事故の影響緩和問題」で報告(於ロシア・ブリヤンスク市)
4	1993 (平成5年)	5.25~30	チェルノブイリ原発事故への医療援助に関するWHO調整会議のため山下俊一(長崎大学医学部)および財団職員1名をジュネーブへ派遣
4	1993 (平成5年)	6.21~7.3	検診活動指導、土壌・食品サンプル収集およびワークショップ参加のため日本人専門家10名および財団職員3名をモスクワおよび5センターへ派遣
4	1993 (平成5年)	6.30~7.2	第2回チェルノブイリ笹川プロジェクト ワークショップ開催(於 ロシア・モスクワ)
4	1993 (平成5年)	8.8~21	試薬および消耗品等の在庫調査のため財団職員1名5センターへ出張
4	1993 (平成5年)	8.31~9.6	甲状腺検診および線量測定指導のため山下俊一(長崎大学医学部)、星正治(広島大学原爆放射能医学研究所)および財団職員2名をゴメリセンターへ派遣;ゴメリセンター「オランダプロジェクト」主催シンポジウムで山下教授が報告;およびコロステンにて第2回シンポジウム企画・打合せ
4	1993 (平成5年)	9.2~11	Sysmex NE-7000の据付、試運転、操作指導(於ゴメリ、コロステン)、および既設置NE-7000およびK-1000の保守点検のためメーカー技師1名を5センターへ派遣
4	1993 (平成5年)	10.13	第2回チェルノブイリ笹川医療協力シンポジウム開催(於 ウクライナ・コロステン市)
4	1993 (平成5年)	10.11~25	甲状腺、線量(レンガ・タイル収集)分野の検診活動指導のため日本人専門家6名をウクライナへ派遣
4	1993 (平成5年)	10.18~21	WHOキエフ会議参加のため長瀬重信(長崎大学医学部)をウクライナ(キエフ)に派遣

年次	暦年	月日	出来事
4	1993 (平成5年)	10.19~20	ウクライナ保健省主催キエフ会議に参加のため柴田義貞 ((財)放射線影響研究所) をウクライナ (キエフ) に派遣
4	1993 (平成5年)	11.22~29	チェルノブイリ笹川委員会への出席および広島・長崎の本事業協力機関の施設見学のため、5センター院長、関係州保健局長等10名を日本へ招聘
4	1993 (平成5年)	12.13~20	WHO European Centre for Environment and Health主催チェルノブイリ事故に関するワークショップ出席のため長瀧重信 (長崎大学医学部) をローマへ派遣
4	1993 (平成5年)	12.20~27	供与機材 (尿中ヨード・クレアチニン自動分析装置) の保守点検のためメーカー技師1名をモギリョフ (ベラルーシ)、キエフ (ウクライナ) へ派遣
4	1994 (平成6年)	1.12~2.1	甲状腺関連検診活動の指導のため、難波裕幸 (長崎大学医学部) をモギリョフ、ゴメリ、キエフへ派遣
4	1994 (平成6年)	1.20~2.1	検診活動指導のため山下俊一 (長崎大学医学部) 他3名および財団職員1名をモギリョフ、ゴメリ、クリンシーへ派遣
4	1994 (平成6年)	3.8~21	線量分野の検診活動指導およびホールボディカウンター保守点検のため、高辻俊宏 (長崎大学医学部) およびメーカー技師1名を5センターへ派遣
5	1994 (平成6年)	5.8~18	甲状腺生検指導、ウクライナ保健省との協議、94年ワークショップのため山下俊一、伊東正博 (長崎大学医学部) および財団職員1名をキエフ、コロステン、モスクワへ派遣
5	1994 (平成6年)	5.8~18	モギリョフセンターの線量指導、被曝レンガ採取、94年ワークショップのため星正治 (広島大学原爆放射能医学研究所) 他2名をモギリョフ、ゴメリ、モスクワへ派遣
5	1994 (平成6年)	5.14~24	血液関連検診活動指導および94年ワークショップのため藤村欣吾、下村壮司 (広島大学原爆放射能医学研究所) をベラルーシ2センター、ウクライナ2センターおよびモスクワへ派遣
5	1994 (平成6年)	5.15~28	データ管理指導および94年ワークショップのため柴田義貞 ((財)放射線影響研究所) をキエフ、モギリョフ、ゴメリおよびモスクワへ派遣
5	1994 (平成6年)	5.16~17	第3回チェルノブイリ笹川プロジェクトワークショップ開催 (於 ロシア・モスクワ)
5	1994 (平成6年)	6.4~11	放射線量推定に関するワークショップ (於 バード・ホンネフ) へ出席のため星正治 (広島大学原爆放射能医学研究所) をドイツへ派遣

年次	暦年	月日	出来事
5	1994 (平成6年)	6.11~25	線量測定の現地技術指導およびホールボディカウンター保守点検のため、高辻俊宏 (長崎大学医学部)、佐藤育 (日本医科大学霞ヶ浦病院)、メーカー技師1名を5センターへ派遣
5	1994 (平成6年)	6.25~7.2	"International consultation on the health of the recovery workers after the Chernobyl accident"へ出席のため藤村欣吾 (広島大学原爆放射能医学研究所) をロシア (サンクトペテルブルグ) へ派遣
5	1994 (平成6年)	7.25~8.10	体内被曝線量測定および環境の放射線による汚染度調査に関する今後の方針の検討のため、5センター線量担当者9名と通訳を招聘 (広島大学原爆放射能医学研究所、長崎大学アイソトープ総合センター)
5	1994 (平成6年)	9.11~27	検診活動指導 (血液検診、甲状腺検診、線量測定、データ解析)、血液機器取り扱い指導のため山下俊一 (長崎大学医学部) 他日本人専門家、およびメーカー技師を派遣
5	1994 (平成6年)	9.16	第3回チェルノブイリ笹川医療協力シンポジウム開催 (於 ロシア・ブリアンスク) 会議出席のため日本人専門家を派遣 (9.14~9.19)
5	1994 (平成6年)	10.9~16	供与機材の新輸送ルートの開拓およびセンターでの在庫調査のため財団職員1名、ロシア (モスクワ)、ベラルーシ (モギリョフ、ゴメリ) に出張
5	1994 (平成6年)	11.01~20	甲状腺超音波診断装置の記録装置システム交換 (スチルビデオ方式→光磁気ディスク方式) のため、メーカー技師2名を5センターへ派遣
5	1994 (平成6年)	11.15~18	自動血球測定装置保守点検および指導のためメーカー技師をベラルーシ (モギリョフ) へ派遣
5	1994 (平成6年)	11.20~24	事業推進協議のため笹川記念保健協力財団モスクワ事務所長M. Bondarenkoを日本へ招聘
5	1994 (平成6年)	12.11~20	血液標本判定の標準化のため5センター血液担当医師9名を招聘、モスクワ事務所職員2名同行 (広島大学原爆放射能医学研究所、広島原爆障害対策協議会健康管理・増進センター)
5	1995 (平成7年)	1.15~2.3	甲状腺検診、線量測定の指導のため山下俊一 (長崎大学医学部) 他4名を5センターへ派遣、紀伊國献三理事および財団職員1名同行、ロシア医学アカデミー放射線医学研究所 (オブニンスク)、放射線衛生研究所 (サンクトペテルブルグ) との共同研究打合せもあわせて行う
5	1995 (平成7年)	1.16~23	放射線衛生研究所 (サンクトペテルブルグ) との医療協力協議のため紀伊國献三理事および財団職員1名 (1.18~) ロシア (サンクトペテルブルグ) へ出張

年次	暦年	月日	出来事
5	1995 (平成7年)	2.4~13	データ解析指導のため柴田義貞 ((財)放射線影響研究所) をモギリョフ (ベラルーシ) へ派遣
5	1995 (平成7年)	2.8~12	WHO主催 "Technical Advisory Meeting on Chernobyl Conference" 出席のため山下俊一 (長崎大学医学部) をジュネーブへ派遣
5	1995 (平成7年)	3.6~10	ロシア放射線衛生研究所 (サンクトペテルブルグ) との共同研究に関する協議のため V. Pavel Ramzaev 所長と Yu. O. Konstantinov を招聘 (於当財団)、モスクワ事務所2名同行
5	1995 (平成7年)	3.27~4.1	ロシア科学アカデミー放射線医学研究所 (オプニンスク) との共同研究に関する協議のため、所長 A. F. Tsyb 他8名招聘 (当財団)
6	1995 (平成7年)	4.1~10	TLD (廃屋に設置した線量計) の回収および線量測定の指導のため星正治 (広島大学原爆放射能医学研究所) をロシア (サンクトペテルブルグ)、ベラルーシ (ミンスク、モギリョフ、ゴメリ) へ派遣
6	1995 (平成7年)	4.2~15	ホールボディカウンターの保守点検および線量測定の指導のため、高辻俊宏 (長崎大学アイソトープ総合センター)、佐藤斉 (東京医科大学霞ヶ浦病院)、メーカー技師1名を5センターへ派遣
6	1995 (平成7年)	4.8~15	血液検診の指導のため藤村欣吾、下村壮司 (広島大学原爆放射能医学研究所) および財団職員1名を5センターへ派遣
6	1995 (平成7年)	5.16~24	検診データの記録・保管・解析に関する指導のため柴田義貞 ((財)放射線影響研究所) をウクライナ (キエフ、コロステン) へ派遣
6	1995 (平成7年)	6.17~27	TLD (廃屋に設置した線量計) の回収およびホールボディカウンターのファントムの測定のため佐藤斉 (東京医科大学霞ヶ浦病院) をベラルーシ (モギリョフ、ゴメリ) およびロシア (クリンシー) へ派遣
6	1995 (平成7年)	6.24~7.11	血液検診、甲状腺検診、線量測定、データ解析指導のため藤村欣吾 (広島大学原爆放射能医学研究所) 他8名および財団職員3名を5センターおよびミンスクへ派遣 (あわせて第4回ワークショップに参加)
6	1995 (平成7年)	7.7~8	第4回チェルノブイリ笹川プロジェクト ワークショップ開催 (於 ロシア・サンクトペテルブルグ)
6	1995 (平成7年)	7.15~20	WHO主催 "International Conference on Health Consequences of the Chernobyl and Other Radiological Accidents" 出席のため山下俊一 (長崎大学医学部) をジュネーブへ派遣
6	1995 (平成7年)	9.20~27	ベラルーシ保健省およびウクライナ保健省との協議のため紀伊國献三常務理事および財団職員1名をウクライナ (キエフ) およびベラルーシ (ミンスク) へ派遣

年次	暦年	月日	出来事
6	1995 (平成7年)	9.20～10.2	ベラルーシ保健省およびウクライナ保健省との協議およびロシア医学アカデミー放射線医学研究所との共同研究打合せのため山下俊一(長崎大学医学部)と柴田義貞((財)放射線影響研究所)をベラルーシ(ミンスク、モギリョフ)、ウクライナ(キエフ)、ロシア(オブニンスク)へ派遣
6	1995 (平成7年)	9.29～10.6	TLD(廃屋に設置した線量計)の回収およびGe型γ線検出装置測定データのチェックのため佐藤斉(東京医科大学霞ヶ浦病院)をベラルーシ(モギリョフ、ゴメリ)へ派遣
6	1995 (平成7年)	11.12～25	血液検診、甲状腺検診、線量測定、データ解析指導のため星正治(広島大学原爆放射能医学研究所)他7名および財団職員3名を5センターへ派遣(あわせて第4回シンポジウムに参加)
6	1995 (平成7年)	11.17	第4回チェルノブイリ笹川医療協力シンポジウム開催(於 ベラルーシ ゴメリ市) 重松逸造((財)放射線影響研究所)、紀伊國献三常務理事他出席
6	1995 (平成7年)	11.20～23	WHO主催"International Conference on Health Consequences of the Chernobyl and Other Radiological Accidents"で笹川チェルノブイリ医療協力事業の成果を報告するため、財団より関係専門家重松逸造((財)放射線影響研究所)他10名および財団職員1名をジュネーブへ派遣
6	1996 (平成8年)	2.13～18	5センター、モスクワ事務所について協議のためモスクワ事務所職員I. Poshinを東京へ招聘
6	1996 (平成8年)	2.25～3.3	線量測定の指導のため星正治(広島大学原爆放射能医学研究所)、佐藤斉(東京医科大学霞ヶ浦病院)をベラルーシ(モギリョフ、ゴメリ)へ派遣
6	1996 (平成8年)	3.2～8	共同研究に関する打合せのためロシア医学アカデミー放射線医学研究所と放射線衛生研究所からViktor Ivanov他5名を招聘(広島大学原爆放射線医学研究所、(財)放射線影響研究所、長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設)
6	1996 (平成8年)	3.6～10	線量、甲状腺、血液専門家会議のため、ロシア医学アカデミー放射線医学研究所よりV. Ivanov他6名広島、長崎へ招聘、モスクワ事務所職員1名同行
6	1996 (平成8年)	3.7～17	甲状腺検診の指導のため山下俊一(長崎大学医学部)他4名および財団職員1名(3.15～21)をモスクワ、ゴメリ、クリンシー、キエフ、コロステンへ派遣; あわせてEC/CIS主催"First International Conference of the EC, Belarus, Ukraine and Russian Federation on Radiological Consequences of the Chernobyl Accident"に出席(3.15 於 ミンスク)
7	1996 (平成8年)	4.6～21	線量測定の指導のため高田純(広島大学原爆放射能医学研究所)他1名を5センターとチェルノブイリ原発現状視察のためチェルノブイリへ派遣

年次	暦年	月日	出来事
7	1996 (平成8年)	4.7~13	IAEA主催「チェルノブイリ事故10周年記念国際会議」で笹川チェルノブイリ医療協力事業の成果報告のため、長瀧重信、山下俊一(長崎大学医学部)、紀伊國献三常務理事および財団職員1名をウィーンへ派遣
7	1996 (平成8年)	4.13~22	5センター看護婦5名、通訳1名を日本の原爆医療および福祉医療現場の視察のため招聘(長崎大学医学部他)
7	1996 (平成8年)	4.21~29	ウクライナ政府主催「チェルノブイリ事故10周年記念シンポジウム」での報告、およびロシア政府主催チェルノブイリ事故10周年記念式典参加のため柴田義貞((財)放射線影響研究所)および財団職員1名をキエフ、モスクワへ派遣(笹川陽平日本財団理事長モスクワの式典に出席)
7	1996 (平成8年)	5.10~18	データ解析の指導のため柴田義貞(財)放射線影響研究所)をベラルーシ(モギリョフ、ゴメリ)へ派遣
7	1996 (平成8年)	6.25~7.11	ロシア医学アカデミー放射線医学研究所および放射線衛生研究所との共同研究打合せおよび第5回ワークショップ参加のため柴田義貞((財)放射線影響研究所)をオブニンスク、サンクトペテルブルグ、モスクワへ派遣
7	1996 (平成8年)	6.26~7.2	第5回チェルノブイリ笹川プロジェクト ワークショップ開催(於 ロシア・モスクワ)のため藤村欣吾(広島大学原爆放射能医学研究所)他3名および財団職員1名をモスクワへ派遣
7	1996 (平成8年)	7.21~8.1	国際シンポジウム「低線量放射線の長期被曝による人体への影響」および広島・長崎の原爆による被曝線量に関するワークショップへの出席のため、ロシア生物物理研究所Yuri I. Gavrilin, Igor A. Gusevを招聘(広島大学原爆放射線医学研究所、(財)放射線影響研究所、長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設)
7	1996 (平成8年)	8.15~9.1	チェルノブイリ検診の5年間の全検診データ管理・解析の打合せのため、Nikolai K. Dolbeshkin, Yuri I. Gaidukを招聘((財)放射線影響研究所、国立環境研究所、国立放射線医学総合研究所等)、モスクワ事務所職員1名同行
7	1996 (平成8年)	10.3~18	EC他と今後の協力関係について協議および第5回チェルノブイリ笹川医療協力シンポジウム開催のため、紀伊國献三常務理事および財団職員1名、ブリュッセル、キエフ、ミンスクへ出張
7	1996 (平成8年)	10.5~18	甲状腺検診のまとめおよびデータ解析の指導と第5回チェルノブイリ笹川医療協力シンポジウム出席のため山下俊一(長崎大学医学部)他3名を5センター、オブニンスク、ブリヤンスク、キエフへ派遣

年次	暦年	月日	出来事
7	1996 (平成8年)	10.14~15	第5回チェルノブイリ笹川医療協力シンポジウム開催 (於 ウクライナ キエフ市)、日本人専門家8名、日野原重明理事長、財団職員2名派遣
7	1996 (平成8年)	11.21~25	Tissue Bank設立に関する協議のため紀伊國献三理事ジュネーブへ出張
7	1996 (平成8年)	12.10~13	ロシア医学アカデミー放射線医学研究所との共同研究に関する打合せのため財団職員1名モスクワへ出張
7	1997 (平成9年)	1.20~26	WHO、ロシア、ベラルーシとの若年甲状腺がんの共同研究調整会議出席のため、柴田義貞 ((財)放射線影響研究所) をリヨンへ派遣
7	1997 (平成9年)	1.21~31	新規プロジェクトに関する打合せ、および駐在医師現地受け入れ状況の調査のため山下俊一 (長崎大学医学部) および財団職員1名をミンスク、ゴメリへ派遣
7	1997 (平成9年)	3.16~20	チェルノブイリ関連研究プロジェクト進捗状況報告会での発表のため長瀬重信 (長崎大学医学部) をワシントンへ派遣
7	1997 (平成9年)	3.24~30	チェルノブイリ事故被災地に住む児童の被曝線量推定の進捗状況報告および今後の方針検討のため、Yuri Konstantinov (ロシア国立放射線衛生研究所) 他2名を招聘 ((財)放射線影響研究所、広島大学原爆放射能医学研究所)
8	1997 (平成9年)	4.4	ゴメリセンターと第2次児童検診の覚書調印 (於ベラルーシ・ミンスク) 紀伊國献三常務理事と財団職員1名ミンスクへ出張 (4.3~4.6)
8	1997 (平成9年)	5.12~9.30	第2次児童検診事業をゴメリセンターで開始するため、本村智子 (長崎大学医学部) をゴメリへ派遣
8	1997 (平成9年)	5.26~28	国連人道問題調整事務所とロシア非常事態省との共催による国際セミナー「チェルノブイリとその後」に出席のため紀伊國献三常務理事と財団職員1名モスクワへ出張
8	1997 (平成9年)	6.9~8.26	チェルノブイリ国際プロジェクト調整会議出席、ゴメリでの第2次事業開始および共同研究の打合せのため柴田義貞 ((財)放射線影響研究所) を、リヨン、ミンスク、ゴメリ、モギリョフ、キエフへ派遣
8	1997 (平成9年)	6.21~7.1	チェルノブイリ国際プロジェクト調整会議出席およびゴメリでの第2次事業の協議のため山下俊一 (長崎大学医学部)、星正治 (広島大学原爆放射能医学研究所)、財団職員1名をミンスク、ゴメリへ派遣
8	1997 (平成9年)	6.24~25	ベラルーシ保健省主催・笹川記念保健協力財団後援「チェルノブイリ国際プロジェクト調整会議」開催 (於 ベラルーシ・ミンスク)

年次	暦年	月日	出来事
8	1997 (平成9年)	7.7~10	ケースコントロール共同研究調整会議開催 (於東京)、WHO・国際癌研究機構 (IARC) (フランス) より1名、Fred Hutchinson Cancer Research Center (米国) より2名招聘
8	1997 (平成9年)	7.15~30	チェルノブイリ放射線汚染地域の線量再構築のため高田純 (広島大学原爆放射能医学研究所) をロシア・ブリヤンスク州へ派遣
8	1997 (平成9年)	8.4~11	日本の放射線医療現場の視察、長崎平和祈念式典出席のため、ベラルーシ保健大臣Zelemkevich他4名招聘
8	1997 (平成9年)	8.27~29	WHOのチェルノブイリ健康影響調査国際プログラム (IPHECA) のManagement Committee Meetingのため長瀧重信 (長崎大学医学部) および財団職員1名をジュネーブへ派遣
8	1997 (平成9年)	9.13~10.1	WHO Workshop on Health Effects of Low Dose Radiation出席、共同研究者との打合せ、ゴメリの検診状況確認のため柴田義貞 ((財)放射線影響研究所) をロシア (オブニンスク、モスクワ)、ウクライナ (キエフ)、ベラルーシ (モギリョフ、ゴメリ) へ派遣
8	1997 (平成9年)	9.25~10.3	5ヵ年計画終了での検診状況の結果と事業成果確認、新規ゴメリ事業進捗状況把握のため、紀伊國献三常務理事および鈴木道生事務局長5センター視察 (ロシア、ウクライナ、ベラルーシへ出張)
8	1997 (平成9年)	11.10~12.27	ゴメリ新事業のデータベース構築管理のため、本村雅彦をゴメリセンターへ派遣
8	1997 (平成9年)	11.25~12.5	検診状況およびデータ管理のチェックのため柴田義貞 ((財)放射線影響研究所) をゴメリおよびキエフへ派遣
8	1997 (平成9年)	12.16~28	ロシア医学アカデミー放射線医学研究所との共同研究協議およびゴメリ-長崎間の遠隔医療構築準備のため、山下俊一 (長崎大学医学部) および財団職員1名をロシア (オブニンスク、クリンシー)、ベラルーシ (ゴメリ、ミンスク) へ派遣
8	1998 (平成10年)	1.5~2.27	山下俊一 (長崎大学医学部) をジュネーブ (WHOとテレメディシン導入について協議)、ミンスク (医科大学他と協議)、ブラッセル (ECとのTissue Bank会議)、ゴメリ (検診活動指導) へ派遣
8	1998 (平成10年)	1.31~2.7	ロシア国立放射線衛生研究所およびロシア医学アカデミー放射線医学研究所との共同研究の協議のため柴田義貞 ((財)放射線影響研究所) をロシア (サンクトペテルブルグ、オブニンスク) へ派遣
8	1998 (平成10年)	2.19~22	Telemedicine Projectに関する協議のため紀伊國献三理事ミンスクへ出張

年次	暦年	月日	出来事
8	1998 (平成10年)	3.6~12	WHO・国際癌研究機構 (IARC) との若年甲状腺がんに関する共同研究の会議に出席のため柴田義貞 ((財)放射線影響研究所) をリヨンへ派遣
9	1998 (平成10年)	4.5~9	甲状腺がん組織バンクの専門委員会出席のため、山下俊一 (長崎大学医学部) をベラルーシ (ミンスク) へ派遣
9	1998 (平成10年)	4.11~25	ゴメリ新事業のデータベース構築指導のため柴田義貞 ((財)放射線影響研究所) をベラルーシ (ミンスク、モギリョフ、ゴメリ) へ派遣
9	1998 (平成10年)	7.5~17	ゴメリ新事業のデータベース構築指導のため柴田義貞 ((財)放射線影響研究所) をベラルーシ (モギリョフ、ゴメリ) へ派遣
9	1998 (平成10年)	7.18~25	国際セミナー「放射能と甲状腺がん」出席のため、山下俊一、伊東正博 (長崎大学医学部) および財団職員1名を英国 (ケンブリッジ) へ派遣
9	1998 (平成10年)	8.4~11	日本の放射線医学専門家との打合せおよび原爆祈念平和式典に参加のためゴメリセンター院長およびゴメリ州保健局長を広島・長崎へ招聘、モスクワ事務所職員2名同行
9	1998 (平成10年)	10.8~11	チェルノブイリ甲状腺がん組織バンク第1回運営委員会出席のため、山下俊一 (長崎大学医学部)、紀伊國献三常務理事、財団職員1名キエフへ出張
9	1998 (平成10年)	11.30~12.4	モギリョフセンターデータ管理担当者2名Oracle社の研修受講 (於 ミンスク)
9	1998 (平成10年)	12.5~15	データ管理技術指導のため柴田義貞 (長崎大学医学部) をモギリョフ、ゴメリへ派遣
9	1999 (平成11年)	1.21~2.14	ゴメリセンター (ベラルーシ) と長崎大学医学部附属原爆後障害研究施設を通信衛星で結ぶ遠隔医療 (Telemedicine) 立ち上げのため山下俊一、柴田義貞 (同施設) (1.25~2.3) をベラルーシ (ゴメリ) へ派遣; NTT技術者2名 (1.23~2.11) および財団職員1名 (1.24~2.5) 同行
9	1999 (平成11年)	1.29~2.5	曾野綾子日本財団会長、日本財団職員、報道関係者がゴメリセンター-長崎大学医学部を通信衛星で結ぶTelemedicine開通式 (2.2) およびチェルノブイリ汚染地域を視察のためゴメリを訪問、曾野会長は帰路ミンスクでベラルーシ共和国ルカシェンコ大統領と会談
9	1999 (平成11年)	2.26~3.4	チェルノブイリ甲状腺がん組織バンクの病理診断会議出席のため、伊東正博 (長崎大学医学部) を英国 (ケンブリッジ) へ派遣

年次	暦年	月日	出来事
9	1999 (平成11年)	3.8~20	WHO/IARC (国際癌研究機構) との若年甲状腺がんに関する共同研究会議に出席のため星正治 (広島大学原爆放射能医学研究所)、山下俊一、柴田義貞 (長崎大学医学部) 他をフランス (リヨン) へ派遣
10	1999 (平成11年)	4.15~26	研究打合せ (ウクライナ放射線医学研究所) および技術指導のため柴田義貞 (長崎大学医学部) をウクライナ (キエフ)、ベラルーシ (モギリョフ、ゴメリ) へ派遣
10	1999 (平成11年)	5.22~6.2	データ管理の打ち合わせのためS.Y. Cherkin (ロシア医学アカデミー放射線医学研究所) を長崎大学医学部附属原爆後障害研究施設 (疫学部門) へ招聘
10	1999 (平成11年)	6.21~28	血液標本長期保存の指導のため、藤村欣吾 (広島大学医学部) をベラルーシ (モギリョフ、ゴメリ)、ロシア (クリンシー) へ派遣、財団職員1名同行
10	1999 (平成11年)	6.28~7.2	モギリョフセンター (ベラルーシ) のデータ管理担当者1名Oracle社の研修受講 (於 ベラルーシ・ミンスク)
10	1999 (平成11年)	7.7~9	モギリョフセンター (モギリョフ) データ管理担当者1名Oracle社の研修受講 (於 ベラルーシ・ミンスク)
10	1999 (平成11年)	7.15~8.14	ゴメリセンター (ベラルーシ) データ管理担当者 V. Arkhipenko他1名を研修のため長崎大学医学部附属原爆後障害研究施設へ招聘 (NASHIMに委託)
10	1999 (平成11年)	7.18~23	第11回国際放射線学会で共同研究成果の報告のためViktor Ivanov (ロシア医学アカデミーロシア放射線医学研究所) をダブリン (アイルランド) へ派遣
10	1999 (平成11年)	7.27~31	モギリョフセンター (ベラルーシ) データ管理担当者2名Oracle社の研修受講 (於 ベラルーシ・ミンスク)
10	1999 (平成11年)	8.23~30	チェルノブイリ甲状腺がん組織バンクの病理診断会議出席のため、伊東正博 (長崎大学医学部) をイタリア (ミラノ) へ派遣
10	1999 (平成11年)	9.1~5	チェルノブイリ甲状腺がん組織バンク科学専門部会会議出席のため、山下俊一 (長崎大学医学部) をイタリア (ミラノ) へ派遣
10	1999 (平成11年)	9.18~26	WHO Sasakawa 遠隔医療プロジェクト (Health Telematics Project) の予備調査のため財団職員1名、ベラルーシ (ミンスク、ゴメリ) へ出張
10	1999 (平成11年)	9.22~10.5	線量計測のため高田純 (広島大学原爆放射能医学研究所) をロシア (オブニンスク、クリンシー)、ベラルーシ (ゴメリ) へ派遣

年次	暦年	月日	出来事
10	1999 (平成11年)	9.27~30	モギリョフセンター (ベラルーシ) データ管理担当者1名Oracle社の研修受講 (於 ミンスク)
10	1999 (平成11年)	11.19~29	データ管理の指導のため柴田義貞 (長崎大学医学部) をベラルーシ (モギリョフ、ゴメリ) へ派遣、財団職員1名同行 (~12.2) し、帰路モスクワにてモスクワ事務所と打合せ
10	1999 (平成11年)	12.2~3	5センター院長会議開催 山下俊一 (長崎大学医学部)、紀伊國献三常務理事、財団職員1名をモスクワクへ派遣
10	1999 (平成11年)	12.4~5	第2回チェルノブイリ甲状腺がん組織バンク運営委員会出席のため紀伊國常務理事、財団職員1名、ロシア (オブニンスク) (12.1~) へ出張
10	2000 (平成12年)	1.24~2.13	ゴメリでの検診活動指導のため山下俊一 (長崎大学医学部) をミンスク、ゴメリへ派遣
10	2000 (平成12年)	3.3~8	チェルノブイリ甲状腺がん組織バンクの病理診断会議出席のため、伊東正博 (長崎大学医学部) を英国 (ケンブリッジ) へ派遣
10	2000 (平成12年)	3.9~11	チェルノブイリ甲状腺がん組織バンクの科学専門部会会議出席のため、山下俊一 (長崎大学医学部) をケンブリッジ (英国) へ派遣
10	2000 (平成12年)	3.22~4.4	データ管理の指導のため柴田義貞 (長崎大学医学部) をウクライナ (キエフ)、ベラルーシ (ゴメリ) へ派遣
10	2000 (平成12年)	3.25~30	WHO・国際癌研究機構 (IARC) との若年甲状腺がんに関する共同研究の会議に出席のため星正治 (広島大学原爆放射能医学研究所) をフランス (リヨン) へ派遣
11	2000 (平成12年)	5.13~20	線量関係会議出席のためViktor Ivanov (ロシア医学アカデミー放射線医学研究所) を広島に招聘
11	2000 (平成12年)	5.14~20	WHO-SMHF Health Telematics実施協定書署名式およびプロジェクトの協議のため財団職員1名、スイス (ジュネーブ) へ出張
11	2000 (平成12年)	5.22~7.2	N. Petoukyova (ロシア医学アカデミー放射線医学研究所) をDNA抽出等の研修のため長崎へ招聘
11	2000 (平成12年)	6.4~7.16	S. Mankovskaya (ベラルーシ国立科学アカデミー生理学研究所) をDNA抽出等の研修のため長崎へ招聘
11	2000 (平成12年)	6.8~13	WHO-SMHF遠隔医療プロジェクト作業部会のため、山下俊一 (長崎大学医学部)、財団職員1名をスイス (ジュネーブ) へ派遣
11	2000 (平成12年)	6.13~19	血液標本長期保存の指導のため、藤村欣吾 (広島大学医学部) をウクライナ (キエフ、コロステン) へ派遣、財団職員1名同行

年次	暦年	月日	出来事
11	2000 (平成12年)	6.21～7.4	WHO/IARC (国際癌研究機構) との若年甲状腺がんに関する共同研究の疫学会議出席とゴメリ他のデータ管理指導のため柴田義貞 (長崎大学医学部) をフランス (リヨン)、ベラルーシ (ミンスク、モギリョフ、ゴメリ) へ派遣
11	2000 (平成12年)	7.17～8.15	Irina Karevskaya (ロシア・クリンシーセンター血液担当) 研修のため長崎へ招聘 (NASHIMへ委託)
11	2000 (平成12年)	8.2～4	モギリョフセンター (ベラルーシ) データ管理担当者1名Oracle社の研修受講 (於 ミンスク)
11	2000 (平成12年)	8.7～8	モギリョフセンター (ベラルーシ) データ管理担当者1名Oracle社の研修受講 (於 ミンスク)
11	2000 (平成12年)	8.9～11	モギリョフセンター (ベラルーシ) データ管理担当者1名Oracle社の研修受講 (於 ミンスク)
11	2000 (平成12年)	9.3～7	WHO・国際癌研究機構 (IARC) との若年甲状腺がんに関する共同研究の線量会議に出席のため星正治 (広島大学原爆放射能医学研究所) をフランス (リヨン) へ派遣
11	2000 (平成12年)	10.7～11	WHO・国際癌研究機構 (IARC) との若年甲状腺がんに関する共同研究の線量会議に出席のため星正治 (広島大学原爆放射能医学研究所) をフランス (リヨン) へ派遣
11	2000 (平成12年)	10.15～17	チェルノブイリ甲状腺がん組織バンク・病理診断会議を長崎大学医学部附属原爆後障害研究施設で開催
11	2000 (平成12年)	10.19～20	チェルノブイリ甲状腺がん組織バンク・科学専門部会会議を (財) 放射線影響研究所 (広島) で開催
11	2000 (平成12年)	10.28	第3回チェルノブイリ甲状腺がん組織バンク・運営委員会を財団主催で開催 (於 京都) 議長: 紀伊國献三理事長
11	2000 (平成12年)	11.11～19	5センターの現状調査と技術指導のため、難波裕幸 (長崎大学医学部)、伊東正博 (国立長崎中央病院) をベラルーシ (ゴメリ、モギリョフ)、ウクライナ (キエフ、コロステン)、ロシア (クリンシー) へ派遣
11	2000 (平成12年)	11.12～30	5センターの現状調査と技術指導のため、長崎大学医学部附属原爆後障害研究施設柴田義貞教授をベラルーシ (ゴメリ、モギリョフ)、ウクライナ (キエフ、コロステン)、ロシア (クリンシー) へ派遣
11	2000 (平成12年)	12.7～10	5センター院長会議のため山下俊一 (長崎大学医学部) (～12.17)、紀伊國献三理事長、財団職員1名 (～12.13) をモスクワへ派遣

年次	暦年	月日	出来事
11	2001 (平成13年)	1.27~2.11	WHO-SMHF遠隔医療プロジェクト作業部会のため、山下俊一 (長崎大学医学)、玉城英彦 (北海道大学医学部) (~2.8) および財団職員1名 (~2.9) をベラルーシ (ミンスク) へ派遣
11	2001 (平成13年)	2.12~17	WHO/IARC (国際癌研究機構) との若年甲状腺がんに関する共同研究の疫学会議出席のため柴田義貞 (長崎大学医学部) をフランス (リヨン) へ派遣
11	2001 (平成13年)	2.18~3.5	共同研究ロシアにおける小児甲状腺がんのCase-control Study成果協議のためV. Parshin (ロシア医学アカデミー放射線医学研究所) を長崎大学医学部附属原爆後障害研究施設へ招聘
11	2001 (平成13年)	2.25~3.12	データ管理の打合わせのためS.Y. Cherkin (ロシア医学アカデミー放射線医学研究所) を長崎大学医学部附属原爆後障害研究施設へ招聘
12	2001 (平成13年)	4.19~28	チェルノブイリ甲状腺がん組織バンクの病理診断会議出席のため、伊東正博 (国立長崎中央病院) をベラジオ (イタリア) へ派遣
12	2001 (平成13年)	5.12~20	シンポジウム準備打ち合わせのため柴田義貞 (長崎大学医学部) をウクライナ、ベラルーシ、ロシアの5センターへ派遣
12	2001 (平成13年)	5.14~19	WHO-SMHF遠隔医療プロジェクト運営委員会のため、紀伊國献三理事長および財団職員1名、高村昇 (長崎大学医学部) (~5.26) をスイス (ジュネーブ) へ派遣
12	2001 (平成13年)	5.26~6.4	第6回チェルノブイリ笹川医療協力シンポジウム開催準備のため財団職員2名、ロシア (モスクワ) へ出張
12	2001 (平成13年)	5.26~6.3	チェルノブイリ甲状腺がん組織バンク外部評価委員会出席のため、佐々木正夫 (元京都大学) をロシア (モスクワ) へ派遣
12	2001 (平成13年)	5.29~6.2	第6回チェルノブイリ笹川医療協力シンポジウム開催のため紀伊國献三理事長、ロシア (モスクワ) へ出張
12	2001 (平成13年)	5.30~31	第6回チェルノブイリ笹川医療協力シンポジウム開催 (於 ロシア・モスクワ) 参加者180名 (内日本人 35)
12	2001 (平成13年)	7.30~9.7	N. Petoukyova (ロシア医学アカデミー放射線医学研究所)、S. Mankouskaya (ベラルーシ国立科学アカデミー生理学研究所) をDNA抽出等の研修のため長崎大学医学部附属原爆後障害研究施設へ招聘

年次	暦年	月日	出来事
12	2001 (平成13年)	7.30～9.7	I. Tchegotareba (ロシア医学アカデミー放射線医学研究所) を血液のDNA抽出の研修のため (財)放射線影響研究所 (広島) へ招聘
12	2001 (平成13年)	8.20～26	チェルノブイリ甲状腺がん組織バンク・病理診断会議出席のため、伊東正博 (国立長崎中央病院) をポーランド (ワルシャワ) へ派遣
12	2001 (平成13年)	10.27～11.9	比較研究データ収集、管理ソフト開発進捗状況確認のため、柴田義貞 (長崎大学医学部) をベラルーシ (ゴメリ) へ派遣
12	2001 (平成13年)	11.13～26	WHO-SMHF Health Telematics作業部会のため、山下俊一 (11.17～23)、高村昇 (長崎大学医学部)、玉城英彦 (北海道大学医学部) (11.17～22) をスイス (ジュネーブ) へ派遣
12	2002 (平成14年)	2.2～7	第4回チェルノブイリ甲状腺がん組織バンク運営委員会出席のため紀伊國献三理事長および財団職員1名、スイス (ジュネーブ) へ出張
12	2002 (平成14年)	3.9～13	チェルノブイリ甲状腺がん組織バンクの病理診断会議出席のため、伊東正博 (国立長崎中央病院) をロシア (オブニンスク) へ派遣
12	2002 (平成14年)	3.11～14	チェルノブイリ甲状腺がん組織バンクの科学専門部会会議出席のため、山下俊一 (長崎大学医学部) をロシア (オブニンスク) へ派遣
13	2002 (平成14年)	6.2～7	チェルノブイリ甲状腺がん組織バンクの科学専門部会会議出席のため、山下俊一 (長崎大学医学部) を英国 (スウォンジー) へ派遣
13	2002 (平成14年)	7.7～13	WHO-SMHF遠隔医療プロジェクト作業部会のため、山下俊一 (長崎大学医学部) および玉城英彦 (北海道大学医学部) (～7.10) をベラルーシ (ミンスク) へ派遣
13	2002 (平成14年)	9.21～27	チェルノブイリ甲状腺がん組織バンクの病理診断会議出席のため、伊東正博 (国立長崎中央病院) を米国 (フィラデルフィア) へ派遣
13	2003 (平成15年)	1.22～6.12	A. Abrosimov (ロシア医学アカデミー放射線医学研究所) をDNA抽出分子生物学の研修のためポルト大学 (ポルトガル) へ派遣
13	2003 (平成15年)	2.28～3.7	チェルノブイリ甲状腺がん組織バンク・病理診断会議出席のため、伊東正博 (国立長崎中央病院) をポルトガル (ポルト) へ派遣
14	2003 (平成15年)	5.25～31	WHO-SMHF Health Telematics進捗状況視察のため、高村昇 (長崎大学医学部)、紀伊國献三理事長、財団職員1名をゴメリ (ベラルーシ) へ派遣
14	2003 (平成15年)	5.28～29	第5回チェルノブイリ甲状腺がん組織バンク・運営委員会に紀伊國理事長および財団職員1名出席 (於キエフ)

年次	暦年	月日	出来事
14	2003 (平成15年)	10.17	チェルノブイリ甲状腺がん組織バンクの科学専門部会会議出席のため、長崎大学医学部附属原爆後障害研究施設山下俊一教授をエディンバラ (英国) へ派遣 (10.16~18)
14	2003 (平成15年)	11.22-24	チェルノブイリ甲状腺がん組織バンクの科学専門部会会議出席のため、国立長崎中央病院伊東正博臨床検査科長をスウォンジー (英国) へ派遣
14	2004 (平成16年)	1.10~18	WHO/IARC (国際癌研究機構) との若年甲状腺がんに関する共同研究の疫学会議出席のため柴田義貞 (長崎大学医学部)、星正治 (広島大学原爆放射能医学研究所 (~1.16)、山下俊一 (長崎大学医学部) (~1.15) をフランス (リヨン) へ派遣
14	2004 (平成16年)	1.15~21	WHO-SMHF遠隔医療事業進捗状況の査察のため山下俊一 (長崎大学医学部) をミンスク、ゴメリに派遣

① 5 センター (1991 - 1996)

ロシア連邦

(名称、住所、院長名は 1993 年 1 月当時のもの)

- 1** クリンシセンター (市立小児病院)
Children City Hospital
Sverdlovskaya 76
Klincy, Bryansk Region
Russian Federation, 243100
Tel: 08336-2-0454 Fax: 08336-2-2411
Head Doctor: Dr. Averchev



ベラルーシ共和国

- 2** モギリョフセンター (モギリョフ州立診断センター)
Mogilev Regional Medical Diagnostic Center
Pervomayskaya 59
Mogilev
Belarus, 212030
Tel: 0222-22-4745 Fax: 0222-22-2997
Head Doctor: Dr. T.A. Krupnik



- 3** ゴメリセンター (ゴメリ州立放射線医学センター被曝者専門診療所)
Gomel Specialized Dispensary (Center for Radiation Medicine)
Bratyeu Lizyukovich 5
Gomel
Belarus 246029
Tel: 0232-48-7120 Fax: 0232-53-1903
Head Doctor: Dr. V.E. Derzhitsky



ウクライナ

- 4** キエフセンター (キエフ州立第 2 病院)
Kiev Regional Hospital No.2
Nesterovsky per, 13/19
Kiev
Ukraine 253053
Tel: 044-225-5025 Fax: 044-212-3412
Head Doctor: V. V. Elagin



- 5** コロステンセンター (コロステン広域医療診断センター)
Korosten Inter-Area Medical Diagnostic Center
Kievskaya, 21b
Korosten, Zhitomir Region
Ukraine 260100
Tel: 04142-3-2001 Fax: 04142-3-0459
Head Doctor: V. V. Danilyuk



②チェルノブイリ笹川医療協力委員会（1990－2001）

（五十音順）

氏名	所 属*	
市丸 道人	（財）放射線影響研究所 顧問	委員
岡島 俊三	長崎大学 名誉教授	委員
熊取 敏之	（財）放射線影響協会 理事長	委員
藏本 淳	広島大学原爆放射能医学研究所 所長	委員
佐藤 哲雄	日口貿易協会会長	委員
佐分利輝彦	厚生省社会保険審査会委員	委員
重松 逸造	（財）放射線影響研究所 理事長	委員長
長瀧 重信	長崎大学医学部第一内科 教授	委員
松平 寛通	放射線医学総合研究所 所長	委員
三輪 史朗	（財）沖中記念成人病院研究所 所長	委員
日野原重明	（財）笹川記念保健協力財団理事長	委員
紀伊國献三	（財）笹川記念保健協力財団常務理事	委員

*所属は委員就任時のもの

③チェルノブイリ笹川医療協力専門家委員会（1990－2001）

（五十音順）

氏名	所 属*	
岡島 俊三	長崎大学 名誉教授	委員
藏本 淳	広島大学原爆放射能医学研究所 所長	委員
重松 逸造	（財）放射線影響研究所 理事長	委員長
柴田 義貞	（財）放射線影響研究所 疫学・生物統計部部长	委員
長瀧 重信	長崎大学医学部第一内科 教授	委員
藤村 欣吾	広島大学原爆放射能医学研究所臨床第一（内科）研究部門 助教授	委員
星 正治	広島大学原爆放射能医学研究所 助手	委員
山下 俊一	長崎大学医学部附属原爆後障害研究施設 教授	委員
紀伊國献三	（財）笹川記念保健協力財団常務理事	委員

*所属は委員就任時のもの

④技術協力者（1990 - 2001）

（五十音順）

氏名	所属
芦澤 潔人	長崎大学医学部第一内科 研究生
飯田恵美子	臨床検査技師（元）ケニヤ国立病院勤務
和泉 元衛	長崎大学医学部第1内科助教授
井関 毅	（社）日本放射線技師会 常務理事
市丸 道人	（財）放射線影響研究所 顧問
伊東 正博	長崎大学医学部附属原爆後障害研究施設 助教授
今中 文夫	広島大学原爆放射能医学研究所臨床第1（内科）研究部門 助手
今村 展隆	広島大学原爆放射能医学研究所臨床第1（内科）研究部門 講師
宇佐美 寛	臨床検査技師（財）星総合病院勤務
遠藤 暁	広島大学原爆放射能医学研究所 助手
岡島 俊三	長崎大学 名誉教授
尾花 恵子	放射線技師 鐘紡記念病院勤務
加來 守男	放射線技師（元）蒼龍会井上病院勤務
笠井 俊文	放射線技師 島根医科大学勤務
河合 政明	アロカ株式会社
川口 浩志	アロカ株式会社
菊地 秀知	プランルーベ株式会社
木口 良章	臨床検査技師 徳洲会八尾徳洲会病院勤務
久住 静代	（財）放射線影響研究所 臨床研究部検査科長
熊取 敏之	（財）放射線影響協会 理事長
藏本 淳	広島大学原爆放射能医学研究所 所長
栗原 恭子	臨床検査技師（元）鈴木病院勤務
小林 克基	NTT マルチメディアビジネス開発部
櫻井 浩三	プラン・ルーベ株式会社
佐々木正夫	京都大学放射線生物研究センター 教授
佐藤 斉	放射線技師 東京医科大学霞ヶ浦病院勤務
重松 逸造	（財）放射線影響研究所 理事長
清水 元工	アロカ株式会社
下杉 彰男	（財）日本臨床衛生検査技師会 会長
下村 壮司	広島大学原爆放射能医学研究所 助手

氏名	所属
柴田 義貞	(財)放射線影響研究所 疫学・生物統計部部长
白石 健司	放射線技師 (元)広島赤十字病院勤務
高田 純	広島大学原爆放射能医学研究所 助教授
高辻 俊宏	長崎大学アイソトープ総合センター 管理室長
高村 昇	長崎大学医学部附属原爆後障害研究施設 助手
竹岡 清二	放射線技師 広島大学原爆放射能医学研究所勤務
巽 純子	京都大学医学部 RI主任
玉城 英彦	北海道大学大学院医学研究科社会医学専攻 教授
束村 宏	NTTマルチメディアビジネス開発部
土肥 博雄	広島赤十字原爆病院 第四内科部長
中尾 隆	臨床検査技師 鹿児島市立病院勤務
長瀧 重信	長崎大学医学部第一内科 教授
長友 恒人	奈良教育大学 教授
難波 裕幸	長崎大学医学部附属原爆後障害研究施設 助手
西川(本村) 智子	長崎大学医学部第一内科 研究生
埜村 朋之	ブラン・ルーベ株式会社
橋本 新	アロカ株式会社
原 健	長崎大学医学部第一内科 大学院生
藤川 一宏	アロカ株式会社
藤村 欣吾	広島大学原爆放射能医学研究所臨床第一(内科)研究部門 助教授
星 正治	広島大学原爆放射能医学研究所 助手
松浦 千秋	臨床検査技師 聖霊病院
松平 寛通	放射線医学総合研究所 所長
宮園 直人	アロカ株式会社
三輪 史朗	(財)沖中記念成人病院研究所 所長
本射 滋己	東亜医用電子株式会社
山内 康正	東亜医用電子株式会社
山下 俊一	長崎大学医学部附属原爆後障害研究施設 教授
山田 宏志	日本コダックダイアグノステック株式会社
横山 直方	長崎大学医学部第一内科 助手

※所属・肩書きは参加開始時のもの

⑤研究業績（発表論文リスト）

発表論文リスト 和文

番号	著者名 (共著者を含む)	論文名	誌名・書名	Vol	No	pp	年	月	発行所 (団体名)
1	山下俊一	4.甲状腺関係検診活動 およびシンポジウム発表 に対するコメント	第1回 チェルノブイリ 笹川医療協力シンポ ジウム報告書			98- 102	1992		笹川記念 保健協力 財団
2	難波裕幸、山下俊一、 津田一英、横山直方、 長瀧重信	チェルノブイリ周辺地域 住民の尿中ヨード測定	広島医学		47	535- 538	1994		
3	伊東正博、山下俊一、 芦澤潔人、難波裕幸、 星 正治、柴田義貞、 長瀧重信、関根一郎	チェルノブイリ周辺地域 における小児甲状腺疾 患の形態学的検討	長崎医学会誌		69	434- 436	1994		
4	山下俊一	チェルノブイリでの小児 甲状腺癌	医学のあゆみ		172	712- 713	1995		
5	山下俊一、星 正治、 柴田義貞、藤村欣吾	チェルノブイリ・プロジェ クトと国際医療協力の課 題	International Health/Medical Care (Em. Bridge Special)			52-61	1995		
6	山下俊一、伊東正博、 難波裕幸、柴田義貞、 星 正治、長瀧重信	チェルノブイリ甲状腺調 査	第24回日本医学会 総会誌(1)		32	282- 289	1995		
7	芦澤潔人、長瀧重信、 岡島俊三、高辻俊宏、 藤村欣吾、下村壮司、 星 正治、佐藤 斉、 高田 純、藏本 淳	チェルノブイリ事故から 10年一健康影響評価に 関わる日本の国際研究 協力—Ⅲ-3 民間提起	日本原子力学会誌		38	195- 200	1996		
8	伊東正博、山下俊一、 芦澤潔人、原 健、 難波裕幸、星 正治、 柴田義貞、関根一郎、 G.D. Panasyuk、 長瀧重信	チェルノブイリ周辺地域 における小児甲状腺癌 の組織学的特徴	広島医学	49	3	361- 363	1996		
9	芦澤潔人、山下俊一、 難波裕幸、横山直方、 伊東正博、星 正治、 柴田義貞、長瀧重信	チェルノブイリ原発事故 後の周辺地区における 小児甲状腺疾患と 137Cs 体内被曝線量	広島医学	49		388- 390	1996		
10	伊東正博、山下俊一、 芦澤潔人、西川智子、 難波裕幸、関根一郎、 星 正治、柴田義貞、 長瀧重信	穿刺吸引細胞診からみ たチェルノブイリ周辺地 区での小児甲状腺疾患 の特徴	長崎医学会誌	71		230- 233	1996		

番号	著者名 (共著者を含む)	論文名	誌名・書名	Vol	No	pp	年	月	発行所 (団体名)
11	高田 純、荻野由紀子、 谷 省蔵、遠藤 暁、 新田由美子、星 正治、 佐藤 斉、高辻俊宏、 吉川 勲、 V.V. Masyakin, V.F. Sharifov, I.V. Pilenko, I.I. Veselkina	携帯用NaIスペクトロメ ーターによるIn Situ環境放 射能測定	放射線物理 Suppl.		51	31	1997		
12	山下俊一	[甲状腺疾患の基礎と 臨床-最近の進歩]トピッ クス チェルノブイリ原 発事故と小児甲状腺癌	診断と治療	85	7	1156- 1157	1997		
13	長瀧重信、芦澤潔人	チェルノブイリ事故と甲 状腺癌	日本内科学会雑誌	86	7	1215- 21	1997	7	
14	山下俊一	話題 ヒバクシャ医療国 際協力ー長崎から世界 へー	日本医事新報「ジュ ニア版」		366	9-14	1997		
15	山下俊一	国際ヒバクシャ医療協 力ー旧ソ連邦での経験ー	長崎平和研究		2	85-94	1997		
16	芦澤潔人、山下俊一、 伊東正博、難波裕幸、 和泉元衛、星 正治、 柴田義貞、長瀧 重信	チェルノブイリ周辺地域 における小児甲状腺がん 疾患:スクリーニング5 年間のまとめ	広島医学	51	3	340- 343	1998		
17	山下俊一、柴田義貞、 星 正治、藤村欣吾 ほか	チェルノブイリ原発事故被 災児の検診成績Iー「チェ ルノブイリ笹川医療協 力プロジェクト1991-1996」 よりー	放射線科学	42	10	303- 309	1999		
18	山下俊一、柴田義貞、 星 正治、藤村欣吾 ほか	チェルノブイリ原発事故被 災児の検診成績IIー「チ ェルノブイリ笹川医療協 力プロジェクト1991-1996」 よりー	放射線科学	42	11	338- 348	1999		
19	高村 昇、玉城英彦	医療と通信	日本医事新報		3951	78	2000		
20	山下俊一	チェルノブイリ原発事故 後の健康問題	臨床検査		44	665- 667	2000		
21	山下俊一	トピックス;放射線曝露と 甲状腺癌	総合臨床	49	8	2181- 2184	2000		

番号	著者名 (共著者を含む)	論文名	誌名・書名	Vol	No	pp	年	月	発行所 (団体名)
22	伊東正博、伊藤哲哉、 内藤慎二、永山雄二、 柴田義貞、山下俊一、 関根一郎	小児甲状腺癌における Ax1受容体チロシンキ ナーゼとGas6の発現	広島医学		53	186- 187	2000		
23	山下俊一	平成10年度文部省科学 研究費(国際学術研究) 講演会報告、チェルノブ イリ原発事故の健康影響と 旧ソ連邦の放射線汚染 問題	海外学術調査ニュー スレター		43	1-8	2000		
24	横田賢一、高村 昇、 柴田義貞、山下俊一、 三根真理子、 朝長万左男	国際ヒバクシャ学術情 報交換システムの運用 と評価	第4回遠隔医療研究 会論文集			49-50	2000		
25	横田賢一、高村 昇、 山下俊一、柴田義貞、 三根真理子、 近藤久義、本田純久、 朝長万左男	チェルノブイリ医療支援 のための通信基盤に関 する報告	第41回原爆後傷害 研究会講演集				2000		
26	山下俊一	放射線による甲状腺癌	医学のあゆみ	197	3	225- 227	2001		
27	山下俊一	V.事故の医学的影響	日本原子力学会誌	44	2	186- 193	2002		
28	山下俊一	長崎大学における放射 線医療科学	九州医事新報		484	6	2002		
29	伊東正博、山下俊一、 S. Abroshimov、 T. Bogdanova、 V. LiVolsi、J. Rosai、 Y. Sidrov、G. Thomas、E.D. Williams	チェルノブイリ原発事故 後甲状腺がん組織登録 (NISCTB)の活動状況	チェルノブイリ原発事 故後甲状腺がん組 織登録(NISCTB) の活動状況		77	289- 291	2002		
30	伊東正博、山下俊一	国際共同チェルノブイリ 原発事故後甲状腺がん 組織登録の活動状況	ホルモンと臨床		50	85-89	2002		
31	山下俊一	放射線誘発性甲状腺癌	よくわかる甲状腺疾 患のすべて(伴 良 雄編)						永井書店
32	伊東正博、山下俊一	カレントピックス:チェル ノブイリ事故後の甲状腺 癌とチェルノブイリ組織 バンク	病理と臨床		23	53-58	2005		

発表論文リスト 英文

No.	Authors	Title of Paper	Title of Journal/Book	Vol	No	pp	Year	Publisher	Language
1	M. Hoshi, M. Yamamoto, H. Kawamura, K. Shinohara, Y. Shibata, Mikhail T. Koxlenko, T. Takatsuji, S. Yamashita, H. Namba, N. Yokoyama, M. Izumi, K. Fujimura, V.V. Danilyuk, S. Nagataki, A. Kuramoto S. Okjima, K. Kiikuni and I. Shigematsu	Fallout Radioactivity in Soil and Food Samples in the Ukraine: Measurement of Iodine, Plutonium, Cesium, and Strontium Isotopes	Health Physics	67	2	187-191	1994		English
2	M. Hoshi, Y. Shibata, S. Okajima, T. Takatsuji, S. Yamashita, H. Namba, N. Yokoyama, M. Izumi, S. Nagataki, K. Fujimura, A. Kuramoto, T.A. Krupnik, N.K. Dolbeshkin., S.A. Danilchik., V.E. Derzhitsky., K.A. Wafa., K. Kiikuni, I. Shigematsu	Cesium-137 concentration among children in areas contaminated with radioactive fallout caused by the Chernobyl accident: The results in Mogilev and Gomel oblasts, Belarus	Health Physics	67	3	268-271	1994		English
3	S. Yamashita, K. Fujimura, M. Hoshi, Y. Shibata (eds.)	A report on the 1994 Chernobyl Sasakawa Project Workshop.						SMHF	Russian, English
4	S. Yamashita, H. Namba, M. Ito, K. Ashizawa, N. Yokoyama, M. Izumi, S. Nagataki, M. Hoshi, K. Fujimura, A. Kuramoto, Y. Shibata, S. Kusumi, I. Shigematsu, K. Kiikuni	Chernobyl Sasakawa Health and Medical Cooperation-1994	Nagasaki Symposium on Chernobyl: Update and Future			63-72	1994	Elsevier Science	English
5	S. Yamashita, H. Namba, M. Ito, K. Ashizawa, N. Yokoyama, Y. Shibata, S. Nagataki	Chernobyl Sasakawa Cooperation Project: thyroid-related examinations	Nagasaki Symposium on Chernobyl: Update and Future			249-255	1994	Elsevier Science	English
6	M. Ito, S. Yamashita, H. Namba, K. Ashizawa, Y. Shibata, I. Sekine, S. Nagataki	Preliminary report of thyroid aspiration biopsy cytology of children around Chernobyl	Nagasaki Symposium on Chernobyl: Update and Future			261-264	1994	Elsevier Science	English
7	S. Yamashita, S. Nagataki	Chernobyl and Thyroid		5		153-154	1995		English
8	M. Ito, S. Yamashita, K. Ashizawa, H. Namba, M. Hoshi, Y. Shibata, Y. Sekine, S. Nagataki, I. Shigematsu	Childhood thyroid disease around Chernobyl evaluated by ultrasound examination and fine needle aspiration cytology	Thyroid	5		365-368	1995	SMHF	English
9	S. Yamashita, K. Fujimura, M. Hoshi, Y. Shibata (eds):	A report on the 1995 Chernobyl Sasakawa Project Workshop	Thyroid					SMHF	English Russian,
10	M. Ito, S. Yamashita, K. Ashizawa, T. Hara, H. Namba, M. Hoshi, Y. Shibata, I. Sekine, L. Kotova, G. Panasyuk, EP. Demidchik, S. Nagataki	Histopathological characteristics of childhood thyroid cancer in Gomel, Belarus	Int J Cancer	65		29-33	1996		English
11	K. Ashizawa, S. Yamashita, S. Nagataki	Radiation and thyroid diseases; experiences in Nagasaki and around Chernobyl	Acta Medica Nagasakiensis	41		1	1996		
12	M. Ito, I. Sekine, L. Kotova, G.D. Panasyuk, K. Ashizawa, T. Nishikawa, S. Nagataki, S. Yamashita	Cytological characteristics of pediatric thyroid cancer around Chernobyl	Acta Cytol	41	5	1642-1644	1997		English
13	S. Yamashita, S. Shibata, (eds):		Chernobyl: A Decade				1997	Elsevier Science	English

No.	Authors	Title of Paper	Title of Journal/Book	Vol	No	pp	Year	Publisher	Language
14	K. Ashizawa, Y. Shibata, S. Yamashita, H. Namba, M. Hoshi, N. Yokoyama, M. Izumi, S. Nagataki	Prevalence of goiter and urinary iodine excretion levels in children around Chernobyl	J. Clin Endocrinol Metab	82	10	3430-3433	1997		English
15	S. Nagataki, K. Ashizawa, S. Yamashita	Cause of childhood thyroid cancer around Chernobyl	Thyroid	8	2	115-117	1998		
16	K. Tanaka, Y. Nagayama, T. Nakano, N. Takamura, H. Namba, S. Fukada, K. Kuma, S. Yamashita, M. Niwa	Expression profile of receptor-type protein tyrosine kinase genes in the human thyroid	Endocrinology	139	3	852-858	1998		
17	Y. Shirahige, M. Ito, K. Ashizawa, T. Motomura, N. Yokoyama, H. Namba, S. Fukata, T. Yokozawa, N. Ishikawa, T. Mimura, S. Yamashita, I. Sekine, K. Kuma, K. Ito, S. Nagataki	Childhood thyroid cancer: Comparison of Japan and Belarus	Endocrine J	45	2	203-209	1998		
18	K. Ashizawa, T. Krupnik, S. Nagataki, S. Yamashita	Transient Thyrotoxicosis around Chernobyl	Thyroid	8	6	535-536	1998		
19	S. Yamashita, Y. Shibata, N. Takamura, K. Ashizawa, K. Eguchi	Telemedicine from Nagasaki to Chernobyl	Thyroid	9		969	1999		
20	S. Yamashita, M. Ito, K. Ashizawa, Y. Shibata, S. Nagataki, K. Kikuni	Monitoring and prevention of the development of thyroid carcinoma in a population exposed to radiation	Radiation and Thyroid Cancer (ed by G. Thomas, A. Karaglou, E.D. Williams)			369-376	1999	World Scientific	
21	N. Takamura, N. Kryshenko, V. Masyakin, H. Tamashiro, S. Yamashita	Chernobyl-induced radiophobia and the incidence of tuberculosis	Lancet		356	257	2000		English
22	T. Takatsuji, H. Sato, J. Takada, S. Endo, M. Hoshi, V.F. Sharifov, I.I. Veselkina, I.V. Pilenko, W.A. F. Kalimullin, V.B. Masyakin, A. I. Kovalev, I. Yoshikawa, S. Okajima	Relationship between the ¹³⁷ Cs whole-body counting results and soil and food contamination in farms near Chernobyl	Health Physics	78		86-89	2000		English
23	M. Hoshi, Y.O. Konstantinov, T.Y. Evdeeva, A.I. Kovalev, A.S. Aksenov, N.V. Koulikova, H. Sato, T. Takatsui, J. Takada, S. Endo, Y. Shibata S. Yamashita	Radiocesium in children residing in the western districts of the Bryansk oblast from 1991-1996	Health Physics	79	2	182-186	2000		
24	G.A. Thomas, E.D. Williams, D.V. Becker, T.J. Bogdanova, E.P. Demidchik, E. Lushnikov, S. Nagataki, V. Ostapenko, A. Pinchera, G. Souchkevitch, M.D. Tronko, A.F. Tsyb, M. Tuttle, S. Yamashita	Thyroid tumor banks	Science	289	5488	2283	2000		English
25	G.A. Thomas, E.D. Williams, D.V. Becker, T.J. Bogdanova, E.P. Demidchik, E. Lushnikov, S. Nagataki, V. Ostapenko, A. Pinchera, G. Souchkevitch, M.D. Tronko, A.F. Tsyb, M. Tuttle, S. Yamashita	Chernobyl tumor bank	Thyroid	10		1126-1127	2000		English

No.	Authors	Title of Paper	Title of Journal/Book	Vol	No	pp	Year	Publisher	Language
26	E.D. Williams, A. Abroshimov, T. Bogdanova, M. Ito, J. Rosai, Yu. Sidrov, G.A. Thomas	Guest editorial: Two proposals regarding the terminology of thyroid tumors. International	J Surg Pathology	8		181-183	2000		
27	S. Yamashita, Y. Shibata, M. Hoshi, K. Fujimura (eds)		Chernobyl: Message for the 21 st century. Proceedings of the six Chernobyl Sasakawa Medical Cooperation Project Symposium, Moscow				2001	International Congress Series No. 1234, Elsevier	English
28	S. Yamashita, Y. Shibata, H. Namba, N. Takamura, V. Saenko	Molecular epidemiology of childhood thyroid cancer around Chernobyl	Radiation and Homeostasis (ed. by) T. Sugawara				2001	International Congress Series No. 1236, Elsevier	English
29	S. Yamashita, H. Namba, N. Takamura, K. Ashizawa, Y. Shibata	Lessons from Chernobyl; need for molecular epidemiology of childhood thyroid cancer	The Genetics of Complex Thyroid Diseases (ed. by) T. Davis and T. Akamizu				2001	Springer-Verlag, Tokyo Inc	English
30	Y. Shibata, S. Yamashita, V. Masyakin, S. Nagataki	Fifteen years after the Chernobyl accident: novel evidence of post-Chernobyl thyroid cancer	Lancet		9297	1965-1966	2001		
31	K. Ishigaki, H. Namba, N. Takamura, H. Saiwai, V. Parshin, T. Ohashi, T. Kanematsu, S. Yamashita	Urinary iodine levels and thyroid diseases in children; comparison between Nagasaki and Chernobyl	Endocrine J	48		591-595	2001		English
32	G.A. Thomas, E.D. Williams, D.V. Becker, T.I. Bogdanova, E.P. Demidchik, E. Lushnikov, S. Nagataki, V. Ostapenko, A. Pinchera, G. Souchkevitch, M.D. Tronko, A.F. Tsyb, M. Tuttle, S. Yamashita	Creation of a tumour bank for post Chernobyl thyroid cancer	Clin Endocrinol	55		423	2001		English
33	K. Yokota, N. Takamura, Y. Shibata, S. Yamashita, M. Mine, M. Tomonaga	Evaluation of a telemedicine system for supporting thyroid disease diagnosis	Medinfo	10		866-869	2001		
34	N. Takamura, M. Nakashima, M. Ito, Y. Shibata, K. Ashizawa, S. Yamashita	A new century of international telemedicine for radiation-exposed victims in the world	J Clin Endocrinol Metab	86		4000	2001		English
35	S. Yamashita, N. Takamura, H. Tamashiro, M. Repacholi	Trial of telemedicine in Belarus through the the WHO-SMHF project	Proceedings of the REMPAN, WHO H/Q				?		English
36	M. Ito, M. Nakashima, T. Nakayama, A. Ohtsuru, Y. Nagayama, N. Takamura, E.P. Demedchik, I. Sekine, S. Yamashita	Expression of receptor tyrosine kinase axl and its ligand gas6 in pediatric thyroid carcinomas around Chernobyl	Thyroid	12	11	969-973	2002		English
37	S. Yamashita, H. Namba, N. Takamura, K. Ashizawa, Y. Shibata	Lessons from Chernobyl; need for molecular epidemiology of childhood thyroid cancer	The Genetics of Complex Thyroid Diseases eds by T. Akamizu, M. Kasuga, T.F. Davies			184-197	2002	Davies Springer-Verlag Tokyo	English
38	S. Yamashita, Y. Shibata, H. Namba, N. Takamura, V. Saenko	Molecular epidemiology of childhood thyroid cancer around Chernobyl.	Radiation and Homeostasis eds by T. Sugahara, O. Nikaïdo, O. Niwa			201-205	2002	Elsevier	English

No.	Authors	Title of Paper	Title of Journal/Book	Vol	No	pp	Year	Publisher	Language
39	H. Sato, T. Takatsuji, J. Takada, S. Endo, M. Hoshi, V.F. Sharifov, I.I. Veselkina, I.V. Pilenko, W.A.F. Kalimullin, V.B. Masyakin, I. Yoshikawa, T. Nagatomo, S. Okajima	Measuring the External Exposure Dose in the Contaminated Area near the Chernobyl Nuclear Power Station Using the Thermoluminescence of Quartz in Bricks	Health Physics	83	2	227-236	2002		English
40	S. Nagataki, E. Nystrom	Epidemiology and primary prevention of thyroid cancer	Thyroid	12	10	889-896	2002		English
41	Y. Shibata, V.B. Masyakin, G.D. Panasyuk, S.P. Gomanova, V.N. Arkhipenko, K. Ashizawa, M. Ito, N. Takamura, S. Yamashita	A comparative study on thyroid diseases among children in Gomel region, Belarus	Chernobyl: Message for the 21 st Century eds by S. Yamashita, Y. Shibata, M. Hoshi, K. Fujimura			121-126	2002	Elsevier	English
42	M. Ito, S. Yamashita	Summary of the cytological diagnosis of childhood thyroid diseases around Chernobyl	Chernobyl: Message for the 21 st Century eds by S. Yamashita, Y. Shibata, M. Hoshi, K. Fujimura			121-126	2002	Elsevier	English
43	V.S. Parshin, S. Yamashita, A.F. Tsyb, N.P. Narkhova, G.P. Tarassova, A.A. Ilyin	Ultrasound examination of thyroid diseases in children and adults living in Tula region of Russia	Chernobyl: Message for the 21 st Century eds by S. Yamashita, Y. Shibata, M. Hoshi, K. Fujimura			231-238	2002	Elsevier	English
44	Y. Shibata, S. Yamashita, M. Watanabe, M. Tomonaga (eds)		Radiation and Humankind@ICS 1258			308pp	2003	Elsevier	English
45	A. Kumagai, H. Namba, V.A. Saenko, K. Ashizawa, A. Ohtsuru, M. Ito, N. Ishikawa, K. Sugino, K. Ito, S. Jeremiah, G.A. Thomas, T.I. Bogdanova, M.D. Tronko, T. Nagayasu, Y. Shibata, S. Yamashita	Low frequency of BRAFT1796A mutations in childhood thyroid carcinomas	J Clin Endocrinol Metab	89	9	4280-4284	2004		English
46	E.D. Williams, A. Abroshimov, T. Bogdanova, E.P. Demidchik, M. Ito, V. LiVolsi, E. Lushnikov, J. Rosai, Yu. Siderov, M.D. Tronko, A.F. Tsyb, S.L. Vowler, G.A. Thomas	Thyroid carcinoma after Chernobyl latent period, morphology and aggressiveness	Br J Cancer	90		2219-2224	2004		
47	V.K. Ivanov, S.Y. Chekin, V.S. Parshin, O.K. Vlasov, M.A. Maksioutov, A.F. Tsyb, V.A. Andreev, M. Hoshi, S. Yamashita, Y. Shibata	Non-cancer thyroid diseases among children in the Kaluga and Bryansk regions of the Russian Federation exposed to radiation following the Chernobyl accident	Health Physics	88	1	16-22	2005		English
48	E. Cardis, A. Kesminiene, V. Ivanov, I. Malakhova, Y. Shibata, V. Khrouch, V. Drozdovitch, E. Maceika, I. Zvonova, O. Vlasov, A. Bouville, G. Goulko, M. Hoshi, A. Abroshimov, Ya. Anoshko, L. Astakhova, S. Chekin, E. Demidchik, R. Galanti, M. Ito, E. Koroboba, E. Lushnikov	Risk of thyroid cancer following 131I exposure in childhood	J of the National Cancer Institute	97	10	724-732	2005		English

⑥財団制作出版物

出版年月	タイトル	著者・編集	言語	頁数	部数	出版社・発行者
1990 8	チェルノブイリ原発事故医療協力調査団報告書	チェルノブイリ原発事故医療協力調査団	日	68		笹川記念保健協力財団
1992 10	第1回チェルノブイリ医療協力シンポジウム報告書	山下俊一、藤村欣吾、星 正治、柴田義貞	日	153		笹川記念保健協力財団
1992 10	A Report of the 1st Chernobyl Sasakawa Medical Symposium (June 1992)	S. Yamashita, et al (eds.)	英	143		笹川記念保健協力財団
1992 10	A Report of the 1st Chernobyl Sasakawa Medical Symposium (June 1992)	S. Yamashita, et al (eds.)	露	149		笹川記念保健協力財団
1993 9	チェルノブイリ原発事故医療協力報告書	笹川記念保健協力財団	日	106		笹川記念保健協力財団
1993 10	A Report on the 1993 Chernobyl Sasakawa Project Workshop (June 30-July 2, 1993, Moscow)	S. Yamashita, et al (eds.)	英・露	104+ 108		笹川記念保健協力財団
1993 10	Chernobyl Sasakawa Radiation Science Series I : "Why is so much attention paid to radiation and the thyroid?"	S. Yamashita, et al.	英・露	51		笹川記念保健協力財団
1994 9	Chernobyl Sasakawa Radiation Science Series II : "An Introduction to Radiation and Radioactivity"	M. Hoshi, et al	英・露	31+ 27		笹川記念保健協力財団
1994 9	A Report on the 1994 Chernobyl Sasakawa Project Workshop (May 16-17, 1994, Moscow)	S. Yamashita, et al (eds.)	英・露	132+ 136		笹川記念保健協力財団
1995 11	Chernobyl Sasakawa Radiation Science Series III : Manual for Diagnosis and Treatment of Hematologic Diseases	K. Fujimura, et al.	英・露	50+ 41		笹川記念保健協力財団
1996 1	A Report on the 1995 Chernobyl Sasakawa Project Workshop (July 7-8, 1995, St. Petersburg)	S. Yamashita, et al (eds.)	英・露	149+ 158		笹川記念保健協力財団
1996 3	チェルノブイリ笹川医療協力プロジェクト	笹川記念保健協力財団	日	35		笹川記念保健協力財団
1996 3	甲状腺疾患の確定診断—チェルノブイリ原発事故医療協力の経験から	重松逸造 (監修)	日	135		笹川記念保健協力財団
1996	甲状腺疾患の確定診断—チェルノブイリ原発事故医療協力の経験から	重松逸造 (監修)	露	136		笹川記念保健協力財団
1997	Chernobyl : A Decade (Proceedings of the Fifth Chernobyl Sasakawa Medical Cooperation Symposium, Kiev, Ukraine, 14-15 October 1996)	S. Yamashita & Y. Shibata (eds.)	英	613	1000	Elsevier (Amsterdam)
1999 12	チェルノブイリ原発事故被災児の検診成績—“チェルノブイリ笹川医療協力プロジェクト1991-1996”より—	山下俊一、柴田義貞、星 正治、藤村欣吾 他	日	24		『放射線科学』抜刷
2002 11	Chernobyl : Message for the 21st Century (Proceedings of the Sixth Chernobyl Sasakawa Medical Cooperation Symposium, Moscow, Russia, 30-31 May 2001)	S. Yamashita, et al (eds.)	英	354	1000	Elsevier (Amsterdam)

⑦ 供与器材

List of Equipment, Spareparts and Consumables donated

Date	Item	Donation to	Qty	Total Qty	Unit Price (¥)	Total (¥)
1991.3.22	Spare parts for Sysmex K-1000 (1st donation)	5 centres	2	10	299,700	2,997,000
1991.3.27	Acryl Phantom for ALOKA Chair Counter with case (4th donation)	5 centres	1	5	330,000	1,650,000
1991.4.10	Still Video Recorder SV-1000P for ALOKA ultrasonic scanner (3rd donation)	5 centres	1	5	75,000	375,000
1991.4.16	Toyota Coaster type Mobile Laboratory (HZB30L-MDZR) Whole Body Counter (ALOKA WBC-101) Ultrasonic Scanner (ALOKA SSD-520, ASU-46) TOA Hematology Analyser Sysmex K-1000 Blood Collecting Instrument +accessory, reagents, consumables, spare parts for the Mobile Laboratory	5 centres	1 1 1 1 1	5 5 5 5 5	98,067,420	490,337,100 0 0 0 0 0
1991.4.22	ALOKA Electric Pocket Dosimeter (MY DOSE mini) PDM-102 Lithium battery, CR2450	5 centres	2 2	10 10	44,150 5,290	441,500 52,900
1991.5.24 (1992.4.22)	Diagnostic Set Diagnostic Set for ENT Percussion Hammer Instrument Tray Sterilizer Forceps Portable Autoclave Tampon Jar Waste Receptacle Ambu Bag (Hand resuscitation bag) Oxygen Resucitator Mercurial Sphygnomanometer for Children Mercurial Sphygnomanometer for Adult Stethoscope, Litman Type Bandage Scissors Hight Scale Weight Scale Automatic Puls and Blood Pressure Manometer	5 centres	1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1	5 5 5 10 5 5 5 5 5 5 10 5 5 5 5 5 5	1,300,300	6,501,500 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0
1991.5.25	YUASA Uninterrupted Power Supply YOMIC-S500		1	5	154,500	772,500
1991.6.5	Spare parts for ALOKA ultrasound scanner	5 centres	1	5	24,050	120,250
1991.6.28	CS-137 Gamma Standard SOU	5 centres	1	5	32,000	160,000
1991.7.3	Pharmaceutical Refrigerator MPR510R, 486 litter recording paper SANYO -85°C Deep Freezer, MDF-292AT, 180 litter storage case MDF-292C recovery pen MDF-38FP SANYO -85°C Deep Freezer, MDF-393AT, 309 littler storage case MDF-39SC recording pen MDF-38FP, PR-85 Table Dryer AC 220V 500W Corpuscles Counter F-410 with Printer pH meter HM-10P pH 0.00 - pH14.00	5 centres	2 1 1 8 1 1 20 1 2 2 2	10 5 5 40 5 5 100 5 10 10 10	382,000 3,400 858,400 11,400 6,150 916,400 9,500 6,150 5,100 88,100 63,000	3,820,000 17,000 4,292,000 456,000 30,750 4,582,000 950,000 30,750 51,000 881,000 630,000
1991.7.11	Citizen electric thermometer G-212	5 centres	10	50	980	49,000

Date	Item	Donation to	Qty	Total Qty	Unit Price (¥)	Total (¥)
1991.7.8	Film Viewer	5 centres	1	5	5,460	27,300
1991.8.14	Film FUJI ASA100	5 centres	50	250	610	152,500
	Olympus Microscope BHS-112		1	5	558,000	2,790,000
	Olympus Microscope Spare Bulb		2	10	2,800	28,000
	Olympus Microscope Discussion BHS-112+BHS2-DO-1		1	5	83,300	416,500
	Olympus Microscope Discussion Spare Bulb		2	10	2,800	28,000
	Olympus Triple Eyes Microscope BHS-312		1	5	595,000	2,975,000
	Olympus Triple Eyes Microscope Spare Bulb		2	10	2,800	28,000
	Olympus Camera PM10-35ADS-2		1	5	752,000	3,760,000
1991.10.25	SAKURA Automatic Hemato-stainer (7th donation)	5 centres	1	5	666,900	3,334,500
	HIRAYAMA Automatic Washer Distiller S-3	5 centres	1	5	157,500	787,500
	HIRAYAMA Case for Handyclave HP-15		1	5	20,250	101,250
	HIRAYAMA 37°C Incubator FIN-600M- II		1	5	254,790	1,273,950
	Tools for Dyeing Process	5 centres	1	5	63,888	319,440
	Dyeing agent		1	5	86,150	430,750
1991.11.14	Still video cleaner, SONY FD VFD-25CL	5 centres	1	5	1,000	5,000
1991.11.15	TOYOTA Coaster HZB30L-MR	5 centres	1	5	2,426,000	12,130,000
	TOYOTA HiAce LH114L-BRMRS		1	5	1,558,000	7,790,000
1991.11.25	Spare parts for Coaster Oil filter, fuel assy, air element, shoe kit, shoe kit break	Kiev	1	1	38,130	38,130 0
1991.12.10	Still Video FUJIX R1000MH	5 centres	2	10	327,350	3,273,500
1991.12.25	Whole Body Counter ALOKA WBC-101 (9th donation)	5 centres	1	5	29,243,280	146,216,400
	Ultrasonic Scanner for Thyroid Exam ALOKA SSD-520		1	5	35,191,880	175,959,400
1992.2.3	ALOKA Multipurpose Ultrasonic Scanner "ECHOCAMERA" model SSD-630	4 centres (excl. Mogilev)	1	4	9,270,000	37,080,000
	7.5 MHZ Sector Scanner Probe (9th donation)		1	4	855,000	3,420,000
	Puncture (biopsy needle) adapter for ASU-32WL-7.5		1	4	180,000	720,000
	ALOKA ECHO COPIER	5 centres	1	5	360,000	1,800,000
	Thermal Paper for SS2-303	5 centres	10	50	35,000	1,750,000
	CW/HPRF/PW DOPPLER UNIT for SSD-630	Mogilev	1	1	3,150,000	3,150,000
	3MHZ Dual-Element Sector Scannerprobe for SSD-630	Mogilev	1	1	810,000	810,000
1992.2.21	Bran Luebbe Automatic Urine Iodine and Creatinine Analyser II (8th donation)	Mogilev, Kiev	1	2	32,025,000	64,050,000
1992.4.1	Body Height Measuring Rod, 700-2000 mm Tsutsumi mode HP	5 centres	1	5	25,800	129,000
	Body Weight Scale, 0-160 kg, Tsutsumi mode AS 160 kg		1	5	62,000	310,000
	Diameter Measuring Instrument, Tsutsumi model PP		1	5	40,000	200,000
1992.4.9	Electronic Balance, A&D model ER-180A	Mogilev	1	1	218,000	218,000
	Electronic Balance, A&D model FX-4000		1	1	149,000	149,000
	Magnetic Stirrer, Kayagaki model KM S-2		1	1	44,000	44,000
	Pipette Distiller, IUCHI mode		1	1	173,000	173,000
1992.4.22	Still Video Recorder, FUJIX R1000MH	Gomel	2	2	327,250	654,500

Date	Item	Donation to	Qty	Total Qty	Unit Price (¥)	Total (¥)	
1992.8.25	Spare Parts for TOYOTA Coaster engine oil, air filter, fuel filter, oil filter	5 centres	1	5	12,912	64,560 0	
1992.11.5	Winter Tire, 700R16-12, for TOYOTA Coaster Winter Tire, 185R14-8, for TOYOTA HiAce Front Glass for TOYOTA Coaster, 46111-90B01	5 centres	6	30	25,000	750,000	
		Gomel	4	20	18,500	370,000	
			1	1	80,000	80,000	
1992.11.18	PC (stored at MO. To be used at 5 centres on request)	MO (stored)	1	1	570,000	570,000	
1992.11.19	PC (Hard Disk, MS-Basic PC98-371-HV, numbering data processor, RAM board)	Gomel	1	1	574,000	574,000	
1992.12.17	Spare Parts for TOYOTA Coaster HZB30 air filter, fuel filter, front break pad kit, rear break, belt set, Spare Parts for TOYOTA HiAce handle assy slide	5 centres	1	5	92,000	460,000 0 0	
						0 0	
1992.12.21	Bran Luebbe Auto Analyser II (15th donation) Spare Parts for TOYOTA Coaster And HiAce oil filter, air filter, fuel filter, wheel for winter, front break pad set, rear break pad set, break fluid, oil, drive belt set, filter set for petrol engine	Kiev	1	1	2,960,490	2,960,490	
		5 centres	1	5	80,246	401,230	
			0 0				
1993.3.1	TOA Automated Hematology Analyser, Sysmex NE-7000 auto printer DP-490, graphic printer C310-XP, consumables KUBOTA Table Top Centrifuge, model 2010 with 10ml x 24 bucket TOA Automated Hematology Analyser, Sysmex NE-7000, 23-parameter auto printer DP-490, graphic printer C-310, consumables KUBOTA Table Top Centrifuge, model 2010 with 10ml X 24 bucket	Mogilev, Kiev, Klincy	1	3	29,640,000	88,920,000	
			0				
		Korosten, Gomel	1	3	185,000	555,000	
			1	2	29,640,000	59,280,000	
			0				
1	2	185,000	370,000				
1993.3.9	Data Management Computer Netware File Server 486/33 WorkStations 386/33 WorkStations Printer, HP 4M laser jet with 4MB RAM, cartridge, Epson LQ1170 Software, CodeBase 4.5, C Network Compiler Data Management Computer Printer, HP 4M laser jet with 4MB RAM, cartridge, Epson LQ1170 Software, FOXPRO 2.1, Clarion 3.0 486/33 WorkStations 386/33 WorkStations Data Management Computer 386/33 WorkStations Printer, Epson LQ1170 Data Management Computer 386/33 WorkStations Printer, Epson LQ1170	Mogilev	1	1	1,734,990	1,734,990	
			2	2	379,170	758,340	
			2	2	191,194	382,388	
			1	1	786,950	786,950	
			1	1		0	
			Kiev	1	1	620,345	620,345
				1	1		0
		1		1	379,170	379,170	
		Korosten	1	1	191,194	191,194	
			1	1		0	
			1	1	179,129	179,129	
			1	1	80,430	80,430	
		Klincy	1	1		0	
			1	1	179,129	179,129	
1	1	80,430	80,430				

Date	Item	Donation to	Qty	Total Qty	Unit Price (¥)	Total (¥)
1993.3.29	SEIKO EG&G ORTEC high purity Gesemi conductor-type γ detector GEM-30195-P germanium detector, spectrum master, lead shield, IBM computer A65-BI92X-W3 MCA emulation software, A-66 B Ge. Spectroscopy CEEEL30 liquid nitrogen, standard SOU, 2225 oscilloscope, accessory YAMATO/DFN 44 dryer, ACC-1 light (on-type), muffle firemaker ISUZU blender Yamato/HGB-SP, stepdown trans with NFB, spare parts	Mogilev	1	1	16,971,600	16,971,600
						0
						0
						0
						0
1993.4.9	Super Signal Any-to-Any Switch, 8 serial port (inmac)	Mogilev	1	1	88,745	88,745
1993.4.21	FAX machine KX-F220 BNJ	Klincy	1	1	114,400	114,400
1993.5.11	MO Disk, SONY EDM-1DA1sa	5 centres	4	20	23,600	472,000
1993.5.13	PC Software Novell Network C for NLMs PC Software FoxPro V 2.5 Windows, CodeBase V5 Visualstat Windows, Wordperfect Dos, Epicure	Mogilev Kiev Mogilev	1 1 1	1 1 1	218,900 61,560 313,520	218,900 0 0 61,560 313,520
1993.6.8	Spare Parts for Business Car (remaining from 1992 C-66) Air Filter Fuel Filter Drive Belt	5 centres	2 10 1	10 50 5	73,616	736,160 0 0 0
1993.8.6	MO disk, SONY EDM-1DA1sa	5 centres	4	20	23,600	472,000
1993.9.13	Spare Parts for Thermal Imager FTI-210 motor, gear, micro switch	5 centres	1	5	25,180	125,900 0
1993.9.27	Attachment for Olympus microscope OES (Olympus LS-10)	Korosten	1	1	445,000	445,000
1993.9.30	Thyroid Fine Needle Biopsy Set PTC needle, Chiba Univ. method biopsy sucking pistol, catheline needle absorbent cotton, bandage	5 centres	1	5	45,668	228,340 0 0
1993.10.20	EU-152 Gamma Standard SOU EU 401 URCE	Mogilev	1	1	54,000	54,000
1993.12.3	Probe for Ultrasonic Scanner ALOKA SSD-630 (ASU-32 WL-7.5) Digital Timer for Thyroid	Mogilev 5 centres	1 1	1 5	443,000 4,000	443,000 20,000
1993.12.22	Probe for Ultrasonic Scanner ALOKA SSD-630 (ASU-32 WL-7.5)	Mogilev	1	1	132,000	132,000
1994.1.10	MO disk, SONY EDM-1DA1sa	excl. Korosten	2.5	10	23,600	236,000
1995.1.18	MO disk system (incl. Software development, work fee) Improved Software of volume calculation system (ALOKA VD602AS)	5 centres	1 1	5 5	900,000	4,500,000 0
1994.2.16	Spare Parts (heater) for Automatic Water Distiler HIRAYAMA S-3, 3 litter heater	5 centres	2 for Mo 1 for rest	6	17,500	105,000 0

Date	Item	Donation to	Qty	Total Qty	Unit Price (¥)	Total (¥)
1994.3.8	ALOKA Volume Calculator VD602AS with MO Disk	5 centres	1	5	12,624,200	63,121,000
1994.3.31	Probe for Ultrasonic Scanner ALOKA SSD-630 AUS-32-WL-7.5	Mogilev	1	1	280,000	280,000
1994.4.1	Improved Software for ALOKA Ultrasonic Scanner ALOKA SSD-520	5 centres	1	5	114,000	570,000
1994.4.7	Plotter for EU-152 γ standard, HP7475A (+cable pen, paper) MO Disk System (+20 MO disks)	Mogilev	1	1	509,000	509,000
			1		430,000	0
1994.4.11	SYSMEX NE-7000 Tube Holder	5 centres	5	25	780	19,500
1994.4.14	Deep Freezer (MINSK)	5 centres	2	10	50,000	500,000
1994.4.21	Olympus Research Microscope Model BX50-12E01+BX-PMD0	Mogilev	1	1	1,697,600	1,697,600
1994.4.26	Spare Parts for SANYO Deep Freezer MDF-392AT	Klincy	1	1	21,600	21,600
1994.5.30	MO Disk, SONY EDM-1DA1sa	5 centres	5	25	23,600	590,000
1994.6.15	Improved Puncture Adapter and Probe for SSD-520, ASU-32WL-7.5 Improved Puncture Adapter and Probe (following C-34)	5 centres	total 7	7		0
		5 centres	total 4	4	280,000	1,120,000
1994.8.15	MO disk, SONY EDM-1DA1sa Water Tank HTS-50 220V, triangular flask, electric balance model FX-4000 filter paper, thermometer	5 centres	4	20	23,600	472,000
		5 centres		5	463,600	2,318,000
						0
1994.9.26	SEIKO ORTEC Ge Power Stabiliser, FH-3300-RK	Mogilev	1	1	730,000	730,000
1994.11.14	Network Computer Notebook 486DX2-50, Modem, Software, Floppy disk, Cable DTK 486DX-33 Computer, modem, UPS, printer, Software, Floppy disk, Cable	5 centres	1	5	756,384	3,781,920
			1	5	966,794	4,833,970
1994.12.5	Winter Tire for TOYOTA Coaster Summer Tire for TOYOTA Coaster	5 centres	12	60	23,530	1,411,800
			12	60	22,750	1,365,000
1994.12.6	Uninterrupted Power Source, YUASA YOMIC-S500	5 centres	1	5	355,000	1,775,000
1994.12.22	Auto Voltage Regulator SNAC-2K	5 centres	1	5	680,000	3,400,000
1994.12.15	Spare Parts for TOYOTA oil filter, fuel filter, timing belt, engine oil, T/M oil, D/F oil, LLC	Kiev	1	1	29,900	29,900
						0
1995.3.13	Spare Parts for TOYOTA HiAce tire, belt timing, bush, oil filter, belt set, V-belt, T/M oil, D/F oil engine oil, LLC, short parts	Kiev	1	1	134,870	134,870
						0
						0
1995.4.3	Furniture for the Office book shelf stand, sofa set, wardrobe, working desk, book shelf, chair window blind, window curtain, carpet, game machines, TV	Korosten	1	1	1,577,700	1,577,700
						0
						0

Date	Item	Donation to	Qty	Total Qty	Unit Price (¥)	Total (¥)
1995.5.6	Spare parts for Olympus Microscope BHS-112 (filter) KB-4	Gomel	1	1	4,000	4,000
1995.5.10	Statistical Softwear (Visual Stat, CSS Statistica)	Gomel	1	1	198,000	198,000
1995.5.30	Spare Parts for TOYOTA Coaster air element, fuel filter assy, shoe kit disk break, shoe kit break time belt, tie lot, spider kit	5 centres		5	214,316	1,071,580 0 0
1995.8.17	Spare Parts for TOYOTA Coaster break pad, engine oil, cooling water, break oil, grease	Kiev	1	1	46,488	46,488 0
1995.12.15	Spare Parts for TOYOTA HiAce cylinder head gasket, cylinder head, intake bulb, exhaust bulb break wire engine gasket kit, iol filter, V-belt, cooling water, engine oil, fuel filter glow plug, bulb lifterm air element, piston, ring set, nozz;e, nozzle sheet baring, clunk shaft baring, conrod baring, water pump, front glass parking break wire, shock absorber, alterator, transmission oil, break oil	Gomel	1	1	750,355	750,355 0 0 0 0 0
1995.6.17	Spare Battery for UPS	5 centres	1	5	5,274	26,370
1996.1.24	Nal Crystal for ALOKA WBC-101	Gomel	1	1	287,500	287,500
1996.1.29	Server Intel Xpress Ether Express 32 Flash EISA Cable UTP level 5 Back-ups 1250 RJ-45 Connector Stripping/crimping tool for UTP EtherExpress PRO BNC/RJ-45 with Flash Multiplexor MOXA-C104T4 Port RS-232 Card with UART 16550 FUJITSU MO-Laufwerk 3.5 Ethernet Hub 12 10Base-T MO medium 230 Mb Separate Hard Drive 9Gb. Elite Motherboard Intel, CPU iPentium EXM 28-016 16 MB	4 centres (excl. Mogilev) 5 centres Mogilev	1 1 125 1 14 1 4 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 2	4 4 1000 4 56 4 16 4 4 4 50 1 1 50 1 1 2	553,980 37,800 105 91,350 45 4,725 24,885 36,225 164,850 92,400 7,875 663,600 36,750 139,650	2,215,920 151,200 105,000 365,400 2,520 18,900 398,160 144,900 659,400 369,600 393,750 663,600 36,750 279,300
1996.2.19	Scan Probe for SSD-630 (ASU-32WL-7.5)	Kiev	1	1	443,000	443,000
1996.3.25	Spare Parts for HiAce and Coaster (timing belt, belt set, belt, thermostat, water outlet gasket, grommet steering gear assy, steering grammet, windshied glass, air element UPR ball joint assy, cylinder, holder&nozzle set, glow plag assy oil filter, fuel filter assy, disk pad kit, brake shoe kit, parking cable assy bearing kit, exhaust pipe assy, s. bean, bracket sub-assy, bracket pipe sub-assy, spider kit, arm, end sub- assy, bolt, clutch bearing assy mirror sub-assy, blade	excl. Gomel	1	4	950,230	3,800,920 0 0 0 0 0 0 0 0 0
1996.7.18	Spare Parts for HiAce (generator)	Mogilev	1	1	61,500	61,500

Date	Item	Donation to	Qty	Total Qty	Unit Price (¥)	Total (¥)
1996.11.6	Deep Freezer, -85°C, 310 litre, vertical	5 centres	1	5	1,897,410	9,487,050
	Deep Freezer, -85°C, 430 litre, vertical		1	5	1,743,025	8,715,125
1996.11.11	ALOKA Ultrasonic Scanner SSD-630	Mogilev	1	1	3,000,000	3,000,000
1997.5.1	Spare Parts for TOYOTA Coaster (fuel engine, bolt, W/washer)	Gomel	1	1	1,050,000	1,050,000 0
1997.8.1	Data Management Equipment PC Satellite Pro 460CDT	Gomel	1	1	422,600 79,150	422,600 0
1997.9.22	Portable Ultrasonic Scanner GE YOKOKAWA LOGIQ α 100 ultrasonic scanner probe for thyroid (L76, 7.5MHz) probe for abdomen (C36, 3.5MHz) image record system (TEAC, MX-50M) video printer (MITSUBISHI, AP-9500)	Gomel	2	2	2,750,000	5,500,000 0 0 0 0
1997.11.20	Spare Parts for TOYOTA Coaster (Engine)	Gomel	1	1	121,000	121,000
1998.2.16	Heater for Distiller	Gomel	1	1	17,000	17,000
	Frozen protection gloves		2	2	22,500	45,000
	Spare Lamps for Microscope "Olympus"		5	5	1,600	8,000
1998.5.12	Softwear (InternetWare)	Gomel, Mogilev	1, 2	3	151,800	455,400
1998.5.28	Deep Freezer, -85°C, 430 litre, vertical Bench Top Centrifuge, 10X20ml, 5000RPM	Gomel	2	2	1,062,960	2,125,920
			1	1	201,600	201,600
1998.6.9	PC (Toshiba Satellite 320 CDT)	Gomel	2	2	288,000	576,000
1998.6.17	BEHRING Elisa Processor II plus with computer and printer BEHRING Economic System Software Vitasyn Orange	Gomel	1	1	7,380,000	7,380,000
			1	1	588,000	588,000
			1	1	40,800	40,800
1998.9.18	Data Management Equipment	Gomel, Mogilev				0
	Terminal (Compaq Deskpro 2000; HDD 3.2GB, P II 266MHz, RAM 32MB)	Gomel, Mogilev	3, 2	5	211,950	1,059,750
	Colour Monitor (Compaq V75 TCO)	Gomel, Mogilev	3, 2	5	74,925	374,625
	Server (Compaq ProLiant 1600, P II/300, 128 MBEDO ECCRAM)	Gomel, Mogilev	1, 1	2	546,075	1,092,150
	Array Controller (Compaq SMART 2dh, 16MB)	Gomel, Mogilev	1, 1	2	265,950	531,900
	Hard Drive (Compaq 9100MB Pluggable Ultra-Wide SCSI 1")	Gomel, Mogilev	3, 3	6	155,250	931,500
	DAT Drive (Compaq 4/8GB SCSI-2)	Gomel, Mogilev	1, 1	2	136,080	272,160
	Monitor (Compaq V55, MPR NH Eurocord EURO)	Gomel, Mogilev	2, 2	4	39,825	159,300
	UPS (APC Smart UPS 1400W Power Shut Plus)	Gomel, Mogilev	2, 2	4	96,795	387,180
Printer (HP Laser Jet6PM, Postscript)	Gomel	1	1	149,175	149,175	
1998.10.1	Data Management Software Oracle 8 for Novel Netware, 10 users Oracle Developer for Windows NT/95, single user	Gomel, Mogilev	2, 2	4	3,120,000	12,480,000
		Mogilev	1	1	1,133,370	1,133,370

Date	Item	Donation to	Qty	Total Qty	Unit Price (¥)	Total (¥)
1999.5.13	UPS for BEHRING ELISA Hormone Analyser (purchased with the money from SMHF)	Gomel	1	1	77,440	77,440 0
1999.5.27	Spare Parts (fuel pump) for TOYOTA Coaster	Mogilev	1	1	267,000	267,000
1999.7.15	Spare Parts for TOYOTA Coaster and HiAce Coaster (light pump, oil filter, fuel filter, air filter) HiAce (light bulb, oil filter, fuel filter, air filter)	Gomel	1	1	90,530	90,530 0 0
1999.7.21	PC (Mr.Tsukamura) Digital HiNote Ultra2, 1.2 Gb, SVA display, CR-ROM, Battery	Gomel (Dr.Panashuk)	1	1	56,150	56,150
1999.8.10	PC memory, 16 Mb	Gomel (Dr.Panashuk)	2	2	8,400	16,800
1999.8.30	Magneto-Optical Videodisk recorder	Gomel	1	1	1,245,300	1,245,300
1999.8.31	Ultrasonic Scanner LOGIQ α 100	Mogilev	1	1	1,300,000	1,300,000
1999.11.9	ALOKA SSD-630 improved puncture adapter	Gomel	2	2	260,000	520,000
2000.1.20	Olympus microscope, discussion apparatus ALOKA SSD-630 probe	Mogilev Mogilev	1 1	1 1	150,000 330,750	150,000 330,750
2001.6.8	Repair of Mobile Laboratory	Klincy	1	1		0
2001.10.17	Development of software for microscope images for telemedicine system-1 Personal computer	Gomel Gomel	1/3 1	1 1	500,815 187,937	500,815 187,937
2002.3.8	Development of software for microscope images for telemedicine system-2	Gomel	1/3	1	1,105,145	1,105,145
2002.5.1	Development of software for microscope images for telemedicine system-3	Gomel	1/3	1	783,240	783,240

⑧ 供与試薬 List of Reagents donated

Date	Item	Donation to	Total (¥)
1991.3.25	FUJIREBIO Microtiter Particle Agglutination Serodia-AMC, Microplate, Micropipetter, Tips, Tray mixer, Stepdown Transformer	5 centres	13,328,000
1991.4.16	Reagents for K-1000 Cellpack, Stomatolyser 3WP, Stomatolyser C, Cellclean, Eight Check, Recording Paper	5 centres	3,192,150
		5 centres	244,800
1991.5.25	Eight Check	5 centres	237,650
1991.5.26	Eight Check	5 centres	237,650
1991.7.23	Eight Check	5 centres	237,650
1991.9.11	Reagents for Bran Luebbe Automatic Iodine & Creatinine Analyser II sulfuric acid etc.	Mogilev, Kiev	15,042
1992.3.24	Reagents for Bran Luebbe Automatic Iodine & Creatinine Analyser II arsenic trioxide, ceric ammonium sulfate, creatinine, potassium iodine, picric acid, BRIJ 35 (30% solution)	Mogilev, Kiev	8,732
1992.2.26	Eight Check	5 centres	237,650
1992.3.24	Eight Check	5 centres	237,650
1992.4.1	Eight Check	5 centres	244,800
1992.4.9	Reagents for Bran Luebbe Automatic Iodine & Creatinine Analyser II arsenic trioxide, sodium hydroxide, sulfuric acid, sodium chloride, BRIJ 35, creatinine ceric ammonium sulfate, potassium iodine, picric acid, EDTA disodium	Mogilev	33,290
1992.4.30	Amerlite FT4, Amerlite TSH-60 (fixed price x 0.75)	5 centres	25,272,000
1992.9.14	FUJIREBIO Microtiter Particle Agglutination Test Kits Serodia-ATG, Serodia-AMC	5 centres	7,360,000
1992.9.10	Reagents for Bran Luebbe Automatic Iodine & Creatinine Analyser II briy, picric acid, sodium hypochlorite, arsenic trioxide, calcium potassium iodate KYO3, NaOH	Mogilev	22,125
1992.10.19	Amerlite FT4, Amerlite TSH-60, Luminous Reagents Set, Washing Reagents Amerlite Free Thyroid Control (fixed price x 0.75)	5 centres	20,490,600
1992.10.19	Reagents for Bran Luebbe Automatic Iodine & Creatinine Analyser II Ca (OH) 2, Fe (OH) 3	Mogilev	2,700
1992.12.21	Reagents for Bran Luebbe Automatic Iodine & Creatinine Analyser II for iodine and creatinine measurement, arsenic neutraliser Reagents for Bran Luebbe Automatic Iodine & Creatinine Analyser II	Kiev	45,960
		Mogilev	8,680
1993.1.25	Amerlite FT-4, Amerlite TSH-60, Luminous Reagents Set, Washing Reagents Amerlite Free Thyroid Control (fixed price x 0.75)	5 centres	33,372,000
1993.1.27	Eight Check Reagents for K-1000 Cellpack, Stomatolyser, Sulfolyser, Cellclean, Thermal paper	5 centres	244,800 704,100
1993.3.1	Reagents for TOA Blood Analyser NE-7000 cellpack, cellpack-GL, cellsheath, stromatolyser-GL, stromatolyser- EO stromatolyser-BA, sulfolyser, manoresh, cellclean, recording paper	Mogilev, Kiev, Klincy	1,566,000

Date	Item	Donation to	Total (¥)
1993.3.17	Reagents for FUJIREBIO Microtiter Particle Agglutination Test Kits Serodia ATC, Serodia AMC, Microplate, Single-multipipette tips, Maygrunwald Giemsa, pH 6.4 Buffer powder, Immersion oil, Slide glass label	5 centres	6,240,100
1993.3.17	Amerlite FT-4, Amerlite TSH-60, Luminous reagent set, Washing reagent Amerlite Free Thyroid Control, Printer Inkhead Cartridge, Printer paper	5 centres	28,648,100
1993.5.27	Amerlite FT-4, Amerlite TSH-60, Luminous reagents set, Washing reagents Amerlite Free Thyroid Control	5 centres	29,091,650
1993.5.31	Reagents for Papa-Nikolaus Staining Gill's hematoxylin, OG-6, OG-50, Giemsa, Maygrunwald, Permount, Ethanol, Xylene Micro cover glass, Micro cover glass superfrost, Stain vat, Slide case, Spray-ctte	5 centres	836,050
1993.9.24	Reagents for FUJIREBIO Microtiter Particle Agglutination Test Kits Serodia-ATG, Serodia-AMC, Microplate, Single multipipette tips 8-channel Mupipette tips	5 centres	5,736,725
1993.11.6	Amerlite FT-4, Amerlite TSH-60, Luminous reagents set, Washing reagents Amerlite Free Thyroid Control, Well holder set, printer paper	5 centres	28,524,600
1993.12.15	Reagents for Bran Luebbe Automatic Iodine & Creatinine Analyser II Phosphoric acid, Potassium persulfate, Sulfric acid, Arsenious trioxide, Sodium hydroxide Sodium chloride, Ceric ammonium sulfate dihydrate, Potassium chloride, Iodine Picric acid, EDTA disodium, BAIJ 35, Potassium iodine, Creatinine Sodium hydroxide, Sodium hypochloride solution, Iron (III) chloride Reagents for Papa-Nikolaus Staining Giemsa, Maygrunwald, pH 6.4 Buffer powder, Xylene, Slide glass	5 centres	188,740 882,400
1993.12.21	Amerlite Free Thyroid Control	Mogilev, Klincy, Korosten	243,000
1994.1.31	Reagents for NE-7000 Cellpack, Cellpack-GL, Cellsheath, Stromatolyser-GL, Stromatolyser-EO Stromatolyser-BA, Manoresh, Cellclean, Recording paper	5 centres	3,187,400
1994.1.31	Reagents for FUJIREBIO Microtiter Particle Agglutination Test Kits Serodia-ATG, Serodia-AMC, Microplate, Single-micropipette tips 8-channel micropipette tips	5 centres	2,934,000
1994.1.6	Eight Check TOA NE Check G-type, normal/abnormal level	5 centres	6,664,500
1994.3.7	Amerlite FT-4, Amerlite TSH-60, Luminous Reagents set, Washing Reagents, Amerlite Free Thyroid Control, Well Hoder Set	5 centres	26,760,600
1994.2.23	Stromatolyser 3WP (K-1000) Sulfolyser	Gomel	35,260
1994.3.15	FUJIREBIO microtiter particle agglutination test kits Serodia-ATG, Serodia AWC, Microplate, SOCOLEX single micropipette tips SOCOLEX 8-channel micropipette tips	5 centres	6,434,000
1994.4.26	Reagents for K-1000 Cellpack, Stromatolyser 3WP, Sulfolyser, Cellclean, Thermal paper	5 centres	373,390

Date	Item	Donation to	Total (¥)
1994.6.1	Reagents for NE-7000 Stromatolyser-GI, Stromatolyser-BA FUJIREBIO microtiter particle agglutination test kits Serodia-ATG, Serodia AWC, Microplate, SOCOLEX single micropipette tips, SOCOLEX 8-channel micropipette tips Reagents for Papa-Nikolaus staining Gill's Hemaoylin, OG-6, EA-5, Permout, Xylene, Microcover glass, Micro slide glass Reagents for Bran Luebbe Automatic Iodine & Creatinine Analyser II Ceric ammonium sulfate dyhydrate, Picric acid, Creatinine, Sodium hydroxide	5 centres	25,900 7,259,500 229,680 40,620
1994.6.7	Amerlite FT-4, Amerlite TSH-60, Luminous Reagents Set, Washing Reagents Amerlite Free Thyroid Control	5 centres	13,301,550
1994.8.5	Amerlite Felitin, Amerlite Endocrinology Control	5 centres	416,250
1994.10.20	Amerlite FT-4, Amerlite TSH-60, Luminous reagents set, washing reagents Amerlite Free Thyroid Control	5 centres	18,718,200
1994.10.20	Reagents for FUJIREBIO Microtiter Particle Agglutination Test Kits Serodia-ATG, Serodia-AMC, Microplate Reagents for Papa-Nikolaus Staining Gill's hematoxylin, OG-6, Multiple polychrome, Catheline needle, Disposable syringe	5 centres	4,603,450 178,400
1995.2.10	NE Check Eight Check	5 centres	4,288,000 2,614,150
1995.2.10	Amerlite FT-4, Amerlite TSH-60, Luminous reagent set, Washing reagent	5 centres	4,069,920
1995.2.17	Reagents for NE-7000 Cellpack, Cellpack-GL, Cellsheath, Stromatolyser-GL, Stromatolyser-EO Stromatolyser-BA, Sulfolyser, Manoresh, Cellclean, Recording paper, Ink ribbon	5 centres	3,302,550
1995.2.17	Reagents for K-1000 Cellpack, Stromatolyser 3WP, Sulfolyser, Cellclean, Thermal paper	5 centres	689,770
1995.2.20	Amerlite FT-4, Amerlite TSH-60, Amerlite Felitin II, Luminous reagent set Washing reagents, Amerlite thyroid free control, Amerlite endocrinology control	5 centres	23,809,500
1995.3.2	Reagents for K-1000 Cellpack, Stromatolyser 3WP, Sulfolyser, Cellsheath, Stromatolyser-GL Stromatolyser-EO, Stromatolyser-GA, Sulfolyser, Cellclean Reagents for FUJIREBIO Microtiter Particle Agglutination Test Kits Serodia-ATG, Serodia-AMC, Microplate, Micro-pipette tips Reagents for Papa-Nikolaus Staining Gill's hematoxylin, OG-6, Multiple Polychrome, Giemsa, Permout, Xylene Reagents for Bran Luebbe Automatic Iodine & Creatinine Analyser II Phosphoric acid, Potassium chloride, BRIJ 35, Sodium hypochlorite solution Potassium persulfate, Arsenious trioxide, Arsenious trioxide, Sodium hydroxide Ceric ammonium sulfate dihydrate, Iodine, Picric acid, EDTA disodium Potassium iodine, Creatinine, Sodium hydroxide, Iron III chloride	5 centres	136,940 3,800,675 77,040 100,310

Date	Item	Donation to	Total (₹)
1995.5.1	Reagents for FUJIREBIO Microtiter Particle Agglutination Test Kits Serodia-ATG, Serodia-AMC, Microplate, SOCOREX micropipette tips, Immersion oil Printer cartridge, Printer paper, Disposable syringe, Cathelin needle Giemsa, Maygrunwald powder	5 centres	4,953,550
1995.5.2	Amerlite FT-4, Amerlite TSH-60, Luminous reagent set, Washing reagent Amerlite free thyroid control	5 centres	16,020,000
1995.5.24	Reagents for NE-7000 and K-1000 Cellpack, Cellpack-GL, Cellsheath, Stromatolyser-GL, Stromatolyser-EO Stromatolyser-BA, Sulfolyser, Manoresh, Stromatolyser	Kiev, Gomel, Mogilev	460,180
1995.7.25	Reagents for Papa-Nikolaus Staining Gill's Hematoxylin, OG-6, EA-50 Multiple polychrome stain, Giemsa, Permout Xylene, Slide case, Spray-cyte	5 centres	1,193,750
1995.7.25	Amerlite FT-4, Amerlite TSH-60, Amerlite Felitin II, Luminous reagent set Washing reagent, Amerlite free thyroid control, Amerlite endocrinology control	5 centres	18,175,950
1995.8.4	Reagents for FUJIREBIO Microtiter Particle Agglutination Test Kit Serodia-ATG, Serodia-AMC, Microplate, Recorder pen	5 centres	7,146,525
1995.11.27	Reagents for FUJIREBIO Microtiter Particle Agglutination Test Kits Serodia-ATG, Serodia-AMC, Microplate, SOCOREX micropipette tips Reagents for Hemocyte Smear System Maygrunwald, Giemsa Reagents for Papa-Nikolaus Staining Gill's hematoxylin, OG-6, EA-50 Multiple Polychrome stain, Giemsa, Maygrunwald Permout, Xylene, Microscope xylene	5 centres	5,301,425 86,660 113,780
1995.11.22	Amerlite FT-4, Amerlite TSH-60, Luminous reagent set, Washing reagent Amerlite free thyroid control	5 centres	14,345,550
1996.1.25	Amerlite FT-4, Amerlite TSH-60, Luminous reagent set, Washing reagent Amerlite free thyroid control	5 centres	19,371,150
1996.2.2	Reagents for FUJIREBIO Microtiter Particle Agglutination Test Kit Serodia-ATG, Serodia-AMC, Microplate, SOCOREX micropipette tips Reagents for Bran Luebbe Automatic Iodine and Creatinine Analyser II Arsenious trioxide, Sodium hydroxide, Sodium chloride, Cerir ammonium sulfate, Iodine Potassium persulfate, Potassium chloride, EDTA disodium, Potassium iodine, Creatinine Iron (III) chloride, Recording paper, SOCOREX micropipette tips, Washing powder Floppy disk, Medical chart, BRIJ 35, Sodium hypochlorite Reagents for Hemocyte Maygrunwald Reagents for Papa-Nikolaus Staining Gill's single orange G stain, OG-6, EA-50 Multiple polychrome stain, Gimesa Maygrunwald, Permout	5 centres	6,280,925 159,900 55,680 106,330
1996.1.30	Eight Check NE Check	5 centres	475,300 536,000

Date	Item	Donation to	Total (¥)
1996.3.12	Reagents for K-1000 Cellpack, Stromatolyser, Sulfolyser, Cellclean, Recording paper Reagents for NE-7000 Cellpack, Cellpack-GL, Cellsheath, Stromatolyser-GL, Stromatolyser-EO Stromatolyser-BA, Sulfolyser, Manoresh, Cellclean, Recording paper, ink ribbon Reagents for FUJIREBIO Microtiter Particle Agglutination Test Kits Serodia-ATG, Serodia-AMC, Microplate, SOCOREX micropipette tips, thermal paper	5 centres	422,040 1,658,010 3,746,505
1996.3.12	Amerlite FT-4, Amerlite TSH-60, Luminous reagent set, Washing reagent Amerlite Free Thyroid Control	5 centres	6,454,300
1996.5.9	Amerlite FT-4, Amerlite TSH-60, Luminous reagent set, Washing reagent Amerlite Free Thyroid Control	5 centres	29,359,350
1996.5.20	Reagents for K-1000 Cellpack, Stromatolyser, Sulfolyser, Cellclean, Recording paper Reagents for NE-7000 Cellpack, Cellpack-GL, Cellsheath, Stromatolyser-GL, Stromatolyser-EO Stromatolyser-BA, Sulfolyser, Manoresh, Cellclean, Recording paper, Ink ribbon	5 centres	331,860 1,198,530
1997.11.9	Reagents for K-1000 Cellpack, Stromatolyser 3WP, Sulfolyser, Cellclean, Thermal paper	Gomel	152,000
1998.6.11	Reagents for Behring ELISA Processor II Plus Serozyme-M TPO, Serozyme-M TSH, Serozyme Free T4	Gomel	22,133,200
1998.2.20	Eight Check 3WP G III	Gomel	133,084
1999.6.3	Reagents for Behring ELISA Processor II Plus Serozyme-M TPO, Serozyme-M TSH, Serozyme Free T4	Gomel	3,410,766
1999.9.3	Reagents for K-1000 Cellpack, Stromatolyser 3WP, Sulfolyser, Cellclean, Thermal paper	Gomel	351,530
1999.12.10	Reagents for Behring ELISA Processor II Plus Serozyme-M TPO, Serozyme-M TSH, Serozyme Free T4	Gomel	3,948,218

あとがきにかえて

まえがきにもありますように、チェルノブイリ笹川医療協力事業に深く関わっていただいた方々のお話をうかがってチェルノブイリ事業の総括をしておいたほうがよいのではないかとということになり、2004年12月、5名の先生方をお願いして座談会というかたちでお話を伺いました。本誌は、その座談会の記録をまとめたものですが、「チェルノブイリ笹川医療協力事業」の全貌をご理解いただくために、1995年に行った座談会、この事業の年表（『笹川記念保健協力財団 世界と共に歩んだ30年 1974-2003』より抜粋）、およびその他資料を加えて一冊にいたしました。

二つの座談会をお読みいただければ、なぜ日本が遠く離れた原発事故にかかわりを持つことになったのか、持たなければならなかったのか、お判りいただけたのではないかと思います。

以下ではあとがきに代えて、座談会と資料の補足として、5センター所在地、モスクワ事務所、通訳の方々について簡単にご紹介しようと思います。

5センター

1990年末よりソ連保健省とチェルノブイリ医療協力プロジェクトについて準備を進めていくうちに、保健省側から事故による放射能汚染が強い5カ所で健康調査事業をしてほしいという要望があった。それはロシアのプリヤンスク市(プリヤンスク州)、白ロシア共和国(現ベラルーシ共和国)のゴメリ市とモギリョフ市、ウクライナの首都キエフ市とコロステン市(ジトミール州)であった。

ロシア

保健省は当初プリヤンスク市を予定し、私は実際プリヤンスク市立小児病院を下見にいったが、検診開始直前になって同市より西へ120kmほどの汚染がよりひどいプリヤンスク州クリンシィ市に変更された。クリンシィはベラルーシ国境に近く、プリヤンスク市よりはゴメリ市に近い。農業地帯であるが、織物工場もある。革命前の貴族の館に一部病室を追加して、クリンシィ市立小児病院となっている。その一部にクリンシィ・センターを立ち上げた。全くゼロからのスタートだった。

余談であるが、ある日東京のデパートで、神戸のゴンチャロフという製菓会社が販売している「クリンシィ」という焼き菓子を発見し、次回クリンシィ・センターを訪ねるときのお土産にした。センターでは、午後のお茶に時間には、おいしいお茶とお菓子をご馳走になることが多いからである。センターのみんなはびっくりしていた。センターのカレフスカヤ医師によればクリンシィにはゴンチャロフという姓は多いということであった。

ベラルーシ

ゴメリ市は首都ミンスクに次ぐ第2の都市である。人口約50万人（ミンスクは165万人）で、数年前に市制800年を祝った。後述のドニエプル川に合流するソージュ川がそばを流れ、人々は釣りや、夏には泳ぎや船上の食事を楽しむ。革命前からあるチョコレート工場がご自慢である。ゴメリ・センターは事故直後急遽ゴメリ州立病院に隣接した建物に設置されたものである。現在はそれはRepublican Research Center for Radiation Medicine and Human Ecologyというベラルーシ国立の機関に発展・吸収されている。この建物はチェルノブイリ事故に関するベラルーシの治療・研究は全てこの機関に集中させるという国の方針で昨年完成したが、その完成に向け尽力していたゴメリ・センターのデルジスキー院長が、志し半ばで甲状腺がんで亡くなられたのは非常に残念であった。

モギリョフ市（人口36万人）はベラルーシ第4の都市である。センターは大きな建物で、銀行として建てた直後にチェルノブイリ事故が起こり、医療センターに変更されたもの。このセンターには、放射線物理あるいはデータ管理で有能な人が多く、データ管理では5センターの中心になってもらった。ただ、有能な人が多いだけ病院をやめて銀行へ転職したり海外へ仕事を求めて移住する人も多く、次々とスタッフが変わった記憶がある。

モギリョフは静かな町という印象が強い。郊外の空港近くに、1960年代に英日の企業と合弁で建てられたという大きな化学工場（化学繊維・化学薬品）があり、そこで通訳として働いていた女性たちが大阪万博に招待され、日本で楽しい数日を過ごしたという話を聞いた。そのうちの1人、リユーバさんは通訳として今でもモギリョフ・センターで働いており、私たちの事業になくはならない人だった。この近くには工場の従業員用の別荘地があり、白い砂浜の人工池を中心にたくさんのダーチャが建っている。ダーチャの奥には森が続いている。しかしダーチャと森の間は相当の幅が空き地になっていて、これはもし人家が火事になって森に燃え広がらないように配慮したソ連の法律によるものであるとのこと。このダーチャに招待され、生活を「優雅に」楽しむ労働者の生き方を垣間見ることができた。

ウクライナ

首都キエフ市（人口約265万人）はドニエプル川（長さ2200kmで黒海に注ぐ。ヨーロッパでは、ボルガ、ドナウに次ぐ第3の川）中流の両側に広がる旧ソ連邦でもっとも古い都市（5～6世紀）。最初はキエフ州立診断センターにベースをおいて検診活動を行なったが、後にキエフ州立第2病院へ変わった。この病院には世界各国からチェルノブイリ事故に対する援助がかなり入ってきていたようである。事故後に設立された全ソ放射線医学研究所がある（ソ連崩壊後は「全ソ」が削除されたのは言うまでもない）。

コロステン市はキエフの北西140kmに位置する。今はホテルはひとつだけ、というような

町だが、コロステンは昔、東西・南北の鉄道の交差する要衝であったようだ。イサドラ・ダンカン（1878-1927 ダンサー）の公演があったというのも町の博物館員の自慢の一つである。また、現在の自慢はクレムリンの食器一式も作ったことがあるという陶器工場である。センターとなったところは、チェルノブイリ原発事故後に急遽集合住宅の1階を診療所にしたものである。また、診療所とは別にセンターはアパートを1戸所有しており、日本人専門家はここに宿泊することもあった。ダニリュク院長が大変熱心に仕事を進め、数年後にこれまでの診療所に加え、子供用の待合室、レクチャーホールなど備えた別棟を建設した。

これらの5センターのうち、クリンシィとコロステンは検診や臨床検査についてはほとんどゼロからの出発であり、現在も主要スタッフはあまり変わらず、検診活動を熱心に実施している。

モスクワ事務所

当初の日本側窓口は（社）日ソ貿易協会で、ソ連側窓口はノーボスチ通信社内で海外向けの雑誌『モスクワビジネス』を発行しているピサレフスキー氏であった。彼は英語を話さなかったが、彼の下で働いている若い人々は英語の堪能な人が多く、ロシア語を解さない私たちにとって大変ありがたいことであった。初めの頃、訪ソするときはモスクワビジネスに連絡を取り、ビザ発給の手続き（ソ連からの招聘状）、空港での出迎え、車の手配などを依頼していた。1991年5月に本格的に検診事業が始まったときは、財団職員数名がモスクワや現地に滞在して調整を行っていたが、やはりモスクワに財団の事務所が必要だということになった。初めは財団職員の長期派遣ということも考えたが、1991年末に『モスクワビジネス』のミハイル・ボンダレンコ（Mikhail Bondarenko）氏が責任者となり、その下にヴィクトール・ストリージャック（Viktor Strizhak）氏、秘書のカリーナ・ヴィノゴロヴァ（Karina Vinogorova）さん、運転手も兼ねるニコライ・カムシュコフ（Nikolai Kamshkov）氏というスタッフで事務所がスタートした。翌年6月にはモスクワ大学日本語科の卒業を待って、イリヤ・ポーシン（Ilya Poshin）氏が加わった。

モスクワ事務所の主な仕事は、日本から派遣される専門家の受け入れ（5センターまでの交通手段の確保、逗留場所の確保、通訳の手配など）、日本から5センターへ送る機材・消耗品の受け取り（モスクワでの通関手続きなど）、モスクワから5センターへの配送手配（通常は、センターがモスクワヘトラックやバスで取りにきた）、そして各保健省（ソ連時代はソ連保健省と、ソ連邦崩壊後はロシア、ウクライナ、ベラルーシの各保健省）との連絡調整である。また、各センターからの要望（供与機材の不具合、消耗品の補給などから検診に関する技

術的な質問まで)の東京への連絡なども重要な仕事だった。初めは電話が繋がらないことも頻繁だった(モスクワ側での混線が多い)。FAX送受信も然り。

1995年9月にボンダレンコ所長は自分の事業を立ち上げるため去り、その後をストリージャック氏が継いだ。さらに、最初の5年間で終了した時点で、事業の規模も縮小されてカーリーナが去り3名となった。ストリージャック氏は、モスクワ大学ジャーナリズム科卒業で、いろいろな場での交渉に活躍した。彼の交渉は、資料を十分そろえ、時間をかけて説明・説得するというやり方で、保健省の局長でも、あるいは大臣でも、次回からはモスクワから電話連絡できるような信頼を得ることができる人だった。財団から保健省や州保健局へ手紙を出す場合も、彼のアドバイスが大変役に立った。

ポーシン氏(私たちはイリヤと呼んでいたが)は通訳兼コーディネーターとして大活躍だった。甲状腺、血液疾患、線量関係の専門用語を日露で完全にマスターし、日本人専門家がなくても、彼が十分にロシア語で指導できるのではないかと考えたほどである。また、彼は現地の医師たちの信頼も厚く、研修や会議の合間のコーヒブレイクならぬ「タバコブレイク」(イリヤの言葉)でイリヤが得てくる情報は、しばしば現場の本音を伝えてくれた。

カムシュコフ氏(というよりニコライさん)は、ピサレフスキー氏時代に車付きであらわれた運転手である。彼は供与物品の管理、すなわち各センターへの分配にはなくてはならぬ存在になり、細かい仕分けを担当してくれた。日本からモスクワへ送る機材、消耗品が間違いなくセンターに届いたのはニコライさんの力に負うところが大きい。もちろん彼が運転する車では、安心して長時間の旅が出来た。

この事業がある程度の実績を上げることができたのは、十分な資金や真摯な日本人専門家の協力を恵まれていたばかりでなく、この事務所スタッフの働きに負うところが大きい。彼らのおかげで、財団ははじめ日本人専門家はコミュニケーション上の問題もなく、スムーズに検診活動、現地医師の指導を行うことができたのである。最大の長所は、この3人が現地関係者ばかりでなく、日本人専門家からも厚い信頼を得たことであろう。

事務所もモスクワの日ソ貿易協会の一室をお借りしたり何度か転々としたが、最終的にはFinancial Academy(旧ソ連共産党幹部研修センター)の宿泊施設の2部屋に落ち着いた。

通訳

最後に通訳をしてくださった方に触れておきたい。現地で検診活動を行うために、また現地の医師への指導には、どうしても露日の通訳が必要だった。初めの頃は日本から通訳の方に同行してもらった場合もあったが、徐々に、モスクワ大学の先生(女性の先生が多かった)や学生に依頼することが多くなった。学生の中には、交換留学生として東海大学で1年間過ご

した人も多く、単なる言葉の通訳ばかりでなく、日本人専門家の生活上の問題やその他調整に大変な苦勞をしていただいた。しかし、通訳として特にご紹介したいのは次のお二人である。

レオニード・ストリージャック教授（モスクワ大学日本語科）には初期の交渉段階でいろいろお手伝いいただいた。先生には要人の通訳をしていただいたばかりでなく、他のモスクワ大学の先生や学生を通訳として紹介していただいた。モスクワ事務所のヴィクトール・ストリージャックさんの父上でもある。

会議などでよくお世話になったヴィクトール・キム氏の格調高い日本語に驚かない人はいないだろう。サハリン出身で、戦後、父上の母国朝鮮へ戻るかどうか考えたとき、日本語とロシア語しか出来ないものが戻っても困るだろう、と父上の助言をうけソ連にとどまったということである。その後モスクワ放送局日本語放送部門で仕事をするようになり、そこには往年の日本人女優岡田嘉子がいた。キムさんは彼女に厳しく日本語を指導されたという。キムさんの美しい日本語はそのお蔭であるとおっしゃっていた。

さて、この事業では総予算のうち約20億円を機材・試薬に費やしました。検診車を含め車両は各センターに3台を供与し、15台の走行距離をあわせて10年間（1991～2000）で約365万kmとなりました。赤道全周は4万kmですから、赤道を約90周したことになります。しかし、「物」はいつかは老朽化して使えなくなります。各センターではメンテナンスをきちんとしてくれましたので、送った機材はおそらく日本での耐用年数より数年以上長持ちしたのではないかと思います。しかし機械類は次々と発達を遂げモデルが変更されていくので、大事に使っていてもその旧モデルの消耗品が手に入らなくなるということもしばしばありました。

けれどもひとつの仕事を協同で行うことによって培われた人との結びつきは容易に消えるものではないようです。事業が終了して（モスクワシンポジウム2001年）5年を経た今も、センターの医師たちは日本人専門家と連絡を取り合っているようですし、長崎大学医学部では、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会その他の援助を得てセンターの医師を毎年研修のため長崎へ招聘して下さっています。国際協力ということは、結局は人と人とのつながりではないだろうか、そこからまた枝が伸びてゆくのではないだろうか、という思いを強くした事業でした。

いうまでもなく、この事業は日本はじめ、ロシア、ベラルーシ、ウクライナの多くの人々の力で実施できたものです。本誌の2つの座談会にご出席いただいた諸先生やその他の先生方はじめ、検診開始時には（社）日本放射線技師会、（社）日本臨床衛生検査技師会のご協力を得て、放射線技師、臨床検査技師の方々にも現地で活躍していただきました。検診車製作、機材供給などには特に日商岩井、アロカの方々にお世話になりました。また、このプロジェ

クトの生みの親である日本財団の笹川陽平理事長（現会長）には、当時のソ連政府・労働組合幹部やソ連保健省との協議に加え、モスクワや各センターに何度も足を運んでいただき現場のスタッフを激励していただきました。この場をお借りして皆様に心から感謝の意を表したいと思います。

なお、当財団では、紀伊國献三常務理事（現理事長）、（故）鶴崎澄則事務局長、山口和子、榎治子、松本源二、佐々木譲二（1990.11.21～1996.3.31）、油本博（1990.12.3～1991.7.31）、榎林八重子（1990.11.7～1991.8.31）、高岸悦子（1991.1.14～9.30）、十八公宏衣（1991.10.28～）、星野奈央（1999.4.1～）がこの事業を担当いたしました。

（榎 治子記）

笹川チェルノブイリ医療協力事業を振り返って

2006年3月31日

発行：(財)笹川記念保健協力財団

〒107-0052 東京都港区赤坂1-2-2

TEL 03(6229)5377

FAX 03(6229)5388

印刷・製本：ミズノプリテック(株)